2017年度

課外・ボランティア活動支援センター紀要

the Journal of the Center for Service Learning and Extra Activities 2017

東北大学 高度教養教育・学生支援機構
課外・ボランティア活動支援センター

2018年3月発行

はじめに

2017 年度は、課外・ボランティア活動支援センターにとって、さらなる発展の年となりました。

まず、数年来の懸案であった、東日本大震災学生ボランティア支援室の活動を本センターが引き継ぐ手続きが完了しました。これにより、本センターは、学生諸君の課外活動・ボランティア活動を支援する中核的な組織となります。さらに、支援対象となるボランティア活動については、震災ボランティアにとどまることなく、社会が抱える様々な課題に対して学生という立場から取り組むものすべてをカバーすることになりました。

また、本センターの活動を実質的に担ってくださっている学生スタッフ諸君が、みずからの手で、ヤフー基金をはじめとする各種外部基金を獲得するようになったことも、特筆に値する出来事です。これは、単にボランティア活動をおこなうために必要な資金を獲得できたことを意味するにとどまらず、学生諸君のエンパワメントが進んでいる／エンパワメントの機会が活用されていることを証しているからです。

さて、2018 年度、本センターは、資金や人事の面において、大きな変革期を迎えることが予想されています。そのなかで、学生諸君の課外活動・ボランティア活動を支援するというミッションを忘れることなく、活動を継続してゆくにはどうすればよいか……本紀要をご覧いただき、皆さまのご意見を頂くとともに、お知恵を拝借できれば幸いです。学生諸君の人間的な成長にとって、課外活動やボランティア活動は重要な役割を果たせるし、また果たしていると確信しているからです。

2018 年 3 月

東北大学　高度教養教育・学生支援機構
課外・ボランティア活動支援センター
センター長　小田中直樹

目次

第Ⅰ部　授業開発・学生支援、課外・ボランティア活動に関する研究・論考

研究ノート

高等教育機関における課外・ボランティア活動支援の目的.....藤室玲治.....2

課外・ボランティア活動支援と正課教育の連携事例とその可能性..... 江口怜.....6

課外・ボランティア活動の国際化――現状と課題――.....渡部留美・島崎薫.....13

「ボランティアに対する意識および社会的意識に関する調査」を通じた
ボランティアの社会的意義と課題の考察.....三浦哲・斎藤雅史・大庭佳乃・嶋田奈桜.....17

報　告

陸前高田市における地元と東京の中学・高校生の交流から.....鈴木優里.....26

福島県におけるボランティア活動と連携した原発事故伝承の意義と展望
..... 山﨑英彦・松田敦之.....28

学生による緊急災害支援の意義――平成 28 年熊本地震被災地に対する支援の事例から――
..... 山本賢.....34

第Ⅱ部　2017 年度の課外・ボランティア活動支援センター等の報告

1．課外・ボランティア活動支援センターの事業報告 39

1-1.　課外・ボランティア活動支援センター2017 年度の概括 39
1-2.　事務連絡会議（運営会議） 42
1-3.　課外活動団体合同研修会および花輪理事への要望..... 43
1-4.　課外・ボランティア活動研修会 48
1-5.　ボランティア登録団体の支援 52
1-6.　開講した授業 67
1-7.　課外プログラムの実施（高度教養教育開発事業として） 80
1-8.　高校との交流 82
1-9.　国内の大学との交流 84
1-10.　国外の大学との交流 84
1-11.　会議・シンポジウム等..... 85
1-12.　東北大学学友会の支援・連携 86

2. 学生スタッフチーム SCRUM の活動報告 88

2-1. 2017 年度の学生スタッフチーム SCRUM の概要 88
2-2. 総務 89
2-3. 渉外 91
2-4. 広報 94
2-5. 会計 95
2-6. 東北大学祭への出展 97
2-7. 国際部 98
2-8. 震災伝承部 101
2-9. 人権共生部（ひととも） 103
2-10. 緊急時の災害対応 104
2-11. 他団体とのコラボ活動 108
2-12. その他 SCRUM の学生が参加したイベント 110

3. 学生ボランティア団体の活動報告 111

3-1. 陸前高田応援サークルぽかぽか 111
3-2. 東北大学インクストーンズ 114
3-3. 東北大学福興 youth 118
3-4. 東北大学地域復興プロジェクト“HARU” 123
3-5. 震災復興・地域支援サークル ReRoots 125
3-6. 国際ボランティア団体 As One 128
3-7. 基礎ゼミ・展開ゼミ継続サークルたなぼた 129
3-8. 高校生支援団体「bridge」 132

付録 「ボランティアに対する意識および社会的意識に関する調査」集計結果 135

第Ⅰ部　授業開発・学生支援、課外・ボランティア活動に関する研究・論考

紀要の第一部では、課外・ボランティア活動支援センターによるサービス・ラーニング科目の授業開発や課外・ボランティア活動に関する学生支援についての研究成果や論考、また学生による調査研究の成果や、課外・ボランティア活動に関する論考を「研究ノート」「報告」等の形で掲載する。また学生がボランティアなどで活動したフィールドで得た問題意識を、自らの学びや研究に結びつけることも、当センターの重要な活動であり、その成果もここに掲載している。

藤室玲治「高等教育機関における課外・ボランティア活動支援の目的」では、大学等の高等教育機関では何を目的として課外活動やボランティア活動の支援を行っているのかについて、課外活動等が提供する教育的機会・価値に着目しながら考察している。

江口怜「課外・ボランティア活動支援と正課教育の連携事例とその可能性」では当センターで行っている課外のボランティア活動支援と正課のサービス・ラーニング科目の取り組みの連携について、当センターの学生スタッフ組織 SCRUM を取り上げ報告している。

渡部留美・島崎薫「課外・ボランティア活動の国際化―現状と課題―」では、留学生の日本人学生との交流ニーズを背景として、課外活動への留学生受け入れの必要性が論じられ、また留学生を対象とした被災地でのスタディツアーの実践について考察されている。

三浦哲・斎藤雅史・大庭佳乃・嶋田奈桜「『ボランティアに対する意識および社会的意識に関する調査』を通じたボランティアの社会的意義と課題の考察」では、SCRUM と社会問題等を学習する学友会登録団体「学問と社会をつなぐサロン」の学生が共同して 2017 年 10 月に行ったアンケート調査を分析し、以下の 3 つの結論を得ている。(1)ボランティア経験の有無を問わず、ボランティアへのイメージは悪くない。(2)ボランティア経験者は、そうではない学生に比べてエリート意識があり、また他者に寛容である。(3) 権利意識の高さとボランティア経験の有無には相関関係がない。(2)(3)については、ボランティアを題材とした市民性教育やサービス・ラーニング科目の開発にあたって重要なポイントになり得る。

鈴木優里「陸前高田市における地元と東京の中学・高校生の交流から」では、東北大学生が陸前高田市でアレンジした高田と東京の中高生の交流の様子が報告されている。

山﨑英彦・松田敦之「福島県におけるボランティア活動と連携した原発事故伝承の意義と展望」では学生団体・福興 youth が行うボランティアツアー・スタディツアーの意義を、東北大学で専門的な教育を受ける学生たちに原発事故を題材として、科学者として倫理観をもって社会に貢献していく必要性を理解させる点にあるとしている。そのためには、ミクロレベルの地域の事情を理解し、個別の被災者の痛みや苦しみに「寄り添う」ことが重要であると論じている。

山本賢「学生による緊急災害支援の意義―平成 28 年熊本地震被災地に対する支援の事例から―」では、東北大学生による熊本支援を取り上げ、そこから学生による緊急災害支援全般の意義について考察している。

今回、学生による研究ノート・報告を 4 本収録することができたのは、東北大学生ボランティアの活動の充実を示していると考えるが、いかがだろう。是非ご一読いただきたい。今後も継続して、学生たちの成果を発表していきたいと思う。

課外・ボランティア活動支援センター
特任准教授　藤室玲治

研究ノート

高等教育機関における課外・ボランティア活動支援の目的

藤室玲治[1]
課外・ボランティア活動支援センター

1. 課外活動支援の目的

大学・短期大学（以下大学）などの高等教育機関において、単位習得を目的とする正課教育活動と並び、課外活動は学生の学びにおいて重要であると考えられている。しかし、課外活動は学生にどのような教育的機会や価値を提供するのか、また大学が課外活動を支援するに際しては何を目的としているのかは、必ずしも明らかではない。

東北大学においても、窓口の指導に対して課外活動団体の学生は「言う事がコロコロ変わる」「指導の理由が良く分からない」という感想を持っている者も多い。活動支援係の窓口では、指導の理由を上手く説明できていないようだ。その一因は、そもそも東北大学としての課外活動支援の目的が明確でなく、そのため指導が場当たり的になってしまう点に求められる。

そこで本稿では、大学などの高等教育機関における課外活動支援の目的とは、そもそも何であるのかについて考えてみたい。

2. 高等教育機関における課外活動の展開と 3 類型

ここ 20 年、大規模災害の際の学生ボランティアへの期待、地域連携や高大連携、インターン等での起業との連携といった、様々な形での社会との連携が大学の社会貢献として重要であり、また学生の学びと成長にとっても重要であるとされ、こうした社会と連携した形での課外活動も高等教育機関内で増大している。

大東貢生ほか（2012:43）によると「課外活動は従来クラブやサークル・同好会といった学生の自主的な活動と捉えられてきた」とされ、そうした課外活動を「従来型課外活動」としている。それに対して、ここ 20 年程で表れてきた、社会と連携した課外活動を「社会連携型課外活動」と呼んでいる。

さらに学生による他の学生への学習支援、留学生への支援、障害学生への支援等の、キャンパスにおける「ピア・サポート」の取り組みも、近年注目されるようになった。こうした取り組みも「課外活動」として分類すると「ピア・サポート型課外活動」と定義できる。

3. 課外活動が提供する教育的機会・価値

さて、課外活動がどのような教育的機会ないし価値を提供するのか、まず「従来型課外活動」のクラブやサークル・同好会に沿って考えると、以下の 4 つではないかと思う。

A. 自主的に設定した課題への挑戦による、成長と学びの機会
B. 同じ課題に取り組み、大学への適応も支える仲間
C. 課題に取り組め、大学への帰属意識ももたらす居場所（活動場所）

[1] ふじむろれいじ、特任准教授、reiji.fujimuro@gmail.com

D. 仲間との取り組み、居場所による気晴らしと休養、回復の機会（レクリエーション）

「教育的」という以上、本質的にはAが重要なのだが、そのAへの取り組みをともに行うB.「仲間」、その仲間とともに取り組みを行う空間であるC.「居場所」、最後にキャンパスライフにおけるD.「レクリエーション」の提供となる。最後の「レクリエーション」は「遊び」ともとられ、「正しい」課外活動や大学生活からの逸脱ともとられてしまうときもあるが、正課も含めたキャンパスライフを健全に営むために、必要な息抜きと回復の機会の提供と考えれば、これも学生の発達に不可欠な要素であり、広い意味での教育的機会の一部となる。

こうした「従来型課外活動」の支援に際しては、Aを軸としつつ、学生が健全かつ長期でAに取り組むための条件・環境であるB～Dの要素が整うように配慮しなくてはならない。

4.「社会連携型課外活動」の例：ボランティア活動が提供する教育的機会

次に近年、盛んになってきた「社会連携型課外活動」の一例として、課外・ボランティア活動支援センターにも関係の深い、学生ボランティア活動の展開について見てみる。

大学等の高等教育機関で学生ボランティア支援を行う機関として「大学ボランティアセンター[2]」が設置される場合が多い。現在、日本には170大学にボランティアセンターがある[3]。日本には約780大学あるので、ボランティアセンターがあるのは少数派であるが、徐々に増えてきている。ひとつの転機となったのが1995年の阪神・淡路大震災であり、その後、様々な大学に設置されだした。背景として以下の3つの要因が挙げられる。

（1）大学教育をめぐる政策動向から（特色GP、学生支援GP等）

（2）地域再生、地方創生にまつわる政策動向から（COC、COC+等）

（3）相次ぐ災害と復興支援活動から

さて、学生ボランティア活動は、どのような教育的機会・価値を学生に提供するのだろうか。「従来型課外活動」と異なる点を挙げるとすると、活動のフィールドが主に学外であり、そこから得られる社会的な学びがある点となる。そのため、ボランティア活動を通して社会性が身に付くという説明も多い。とはいえ、例えば社会性というものを「他者との円滑な人間関係を営むことができる人間関係能力」あるいは「成人や社会人に期待される社会的規範を身に付けること」と定義すれば、それは従来型課外活動においても身に付くといえる。

むしろ高校までの、家庭と学校の往復が主な生活では出会わなかった、地域社会との出会いによる学び、あるいは同年代・同地域出身以外の新たな人間集団との出会いからの学びが、ボランティア活動を通しての学びとしては大きいと思われる。そうした「(学生にとっての) 未知との出会い」や「(学生にとっての）非日常的な体験」が学外のフィールドでの学びとして大きい。

さらにボランティア活動なので、自分がフィールドにどう貢献できるかということが問われる。貢献の目的が、そこに暮らす人々への寄り添いにせよ、地域課題の解決にせよ、新たな社会的価値の創造であれ、様々な創意工夫をしながらフィールドに働きかけることになり、そこから得られる学びもある。この学びの内容は、従来型課外活動で得られる「A. 自主的に設定した課題への挑戦による、

---

[2] 具体的な名称は大学毎に「ボランティア支援室」「ボランティアステーション」「ボランティア支援センター」など様々である。また支援内容についてもそれぞれ異なる。

[3] 特定非営利活動法人ユースビジョン「大学ボランティアセンター情報ウェブ」より。2018年1月15日時点。

成長と学びの機会」と近いのだが「他者や社会に貢献できているか」という問いと向き合わなければならない点が、ボランティアならではの学びとなる。

貢献するためには、その対象となる他者のことを良く知らなければならず、そのことが自分と異なる社会的背景を持つ他者への理解を深めることとなる。さらには、自らの社会的背景を問い直すきっかけになる。また貢献するために自分に何ができるか、その強みや弱み、得意なことや苦手な事なども知ることとなり、その意味でも自分を知るきっかけになる。このような道筋で、ボランティア活動は他者理解と自己理解のきっかけとなる。

整理すると、ボランティア活動では「従来型課外活動」が提供する A～D の教育的機会に加えて、以下の学びが見られる。

E. 多世代交流、異文化体験、社会の仕組みへの理解、社会問題の発見など、社会の中で活動することによる学び（社会体験による学び）

F. 貢献を意識することによる、貢献対象になる自分とは社会的背景が異なる他者についての学び（他者に対しての学び）

G. 貢献しようとする自分自身の社会的背景、弱みや強み、興味関心についての学び（自分自身についての学び）

E と G は学生のキャリア形成にとっても重要な学びとなるだろう。これらの学びが得られるように条件を整えるのが学生ボランティア支援にとって（また「社会連携型課外活動」全般に対する支援にとって）重要である。

なお「従来型課外活動」においても、活動内容や取り組み方によっては、E～G の学びは得られる。また、あまり他者と接しないボランティア活動の場合は E～G の学びは得られない。それぞれの課外活動を個別具体的に見て、どのような「学び」の要素が強いのか理解することも支援のために必要である。

5. どのように学生ボランティア活動を支援するか？

大学による学生ボランティア活動の支援は、大きくは以下の 2 つに分かれる。

（1）学生の自主的な活動の支援

（2）社会貢献活動を組み込んだ教育プログラムの実施

（2）については課外・ボランティア活動支援センターでも取り組んでおり、本紀要の江口研究ノートをご参照いただきたい。ここでは（1）についてより細かく見ていく。

（1）は、さらに分けると、①個人の学生への支援、②学生ボランティア団体への支援に分かれる。個人の支援が入るのが「従来型課外活動」支援と「社会連携型課外活動」支援の大きな違いになる。

例えばキャリアセンターで学生のインターンシップ参加（インターンシップは「社会連携型課外活動」）への支援を行う場合でも、主には学生個々人への支援が中心になるはずである。ボランティア活動については、学生ボランティア団体への支援も行うので「従来型課外活動支援」と似たような性質もあるが、学生が個人で、学外のボランティア団体や施設等でボランティア活動を行うことも支援する。それも、E～G の学びを支援することになるからである。ただし、それだけでは B～D の支援にはならない。

必ずしも、A～G のすべてを支援する必要はないが、学外のフィールドで個人で活動しているボランティアについても、同じフィールドで活動する学生仲間同士の集まりを組織したり、活動テーマに応じた勉強会を組織すると、B～D の支援につなげることができ、支援の質を上げることが出来る。

E～G の学びはそれだけでも価値のあるものなのだが、学外の社会での活動では、上手く行かない場合や、挫折や葛藤を抱える場合もある。その際にクッションとなる B「仲間」や C「居場所」、D「レクリエーション」等の要素が無い場合、身体の疲弊や、自信の喪失等のメンタルな問題が発生してしまう可能性がある。学生ボランティア活動支援、特に個人の学生を支援する場合についても、なるべく B～D の要素に配慮する必要がある。

他にも「従来型課外活動」と「社会連携型課外活動」のひとつである学生ボランティア活動には異なる性格があるのを【表】にまとめた。

【表】「従来型課外活動」と学生ボランティア活動の違い

項目	従来型課外活動（東北大学学友会を想定）	学生ボランティア活動
継続性	1 年以上の実績が登録（支援の前提）に必要。支援にあたり継続性が重要視される。	時限的取り組みにも意義がある（災害救援、オリンピックなど行事毎支援）。
団体と個人	5 名以上の団体による活動のみを支援。団体としての目標と規範、統率を重視。	個人として一時的に学外の活動に参加するのも有意義。個人としての動機や自発性、主体性を尊重。
利己性と利他性	活動の目的は自分たちの成長や学び、レクリエーション（良い意味で利己的）。	自分たち以外の他者への貢献（利他性）が目的。同時に自分たちの成長や学びを目ざす性格もある。
社会性	主に同年代との関係で完結（活動によってはそうではない）。	学外での活動の場合、多様な年代、立場の人々と関係する。
他大学の同類型の団体との関係	競い合い、切磋琢磨する相手。試合や競技などで争う。	協力して、同じ課題に取り組む仲間。連携して活動を行う。
活動経費	主に部費（メンバーの自己負担）。大学や卒業生の支援がある場合も。サークルバイトや模擬店売り上げなど事業収入も。	メンバーの自己負担である場合もあるが、助成金・寄付金等の社会から信託された資金である場合も多い。大学や卒業生、地域社会の支援がある場合も。バザー等事業収入も。

6. おわりに

本稿では課外活動を支援する際の目的を考察するために、活動が提供する教育的機会・価値に着目し、「従来型課外活動」について A～D の、「社会連携型課外活動」について E～F の、合わせて 7 つの教育的機会・価値を想定した。これら 7 つの教育的機会・価値を提供することを課外・ボランティア活動支援の目的として想定すると、限られたリソースを使って、どの機会・価値、どのように・どれだけ提供できるかについて、根拠を持って議論し優先順位をつけて実施することが出来るだろう。

なお、本稿では「ピア・サポート型課外活動」について考察することができなかった。この類型が、当センターの直接の業務対象にないと考えていたからだが、例えば東北大学の学友会体育部や文化部、ボランティア支援スタッフ SCRUM 等は「ピア・サポート型」の活動を行っているともいえる。「ピア・サポート型」が提供する教育的機会・価値、支援方法についての考察を今後の課題としたい。

【参考文献】

大東貢生ほか「大学における体育・スポーツ系課外活動に関する研究の諸課題――高等教育機関における課外活動の研究 I ――」『佛大社会学』36 号,43-49,2012 年 3 月,佛教大学

研究ノート

課外・ボランティア活動支援と正課教育の連携事例とその可能性

江口怜[4]
課外・ボランティア活動支援センター

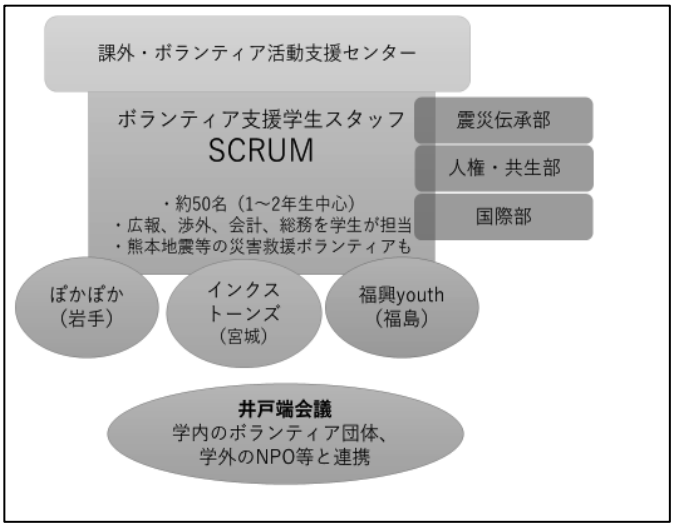
はじめに

ボランティアを教育と結び付けることについて、これまでも様々な懸念や批判が表明されてきた[5]。とりわけ、高等教育においてボランティア活動を義務化しようという流れも伏流する中で、大学がボランティア活動を支援することや、ボランティア活動を組み込んだ授業開発を行うことに関して、本来であれば慎重な吟味・検討が必要であろう。本稿では、こうした原則的な問題には十分に踏み込むことはできないが、筆者が取り組んで来た課外でのボランティア活動支援とサービス・ラーニング科目の実践の中から見えてきた意義と課題について若干の考察を行いたい[6]。

1. 課外のボランティア活動支援と正課のサービス・ラーニング科目開発の連携

課外・ボランティア活動支援センター（以下、センター）は、東日本大震災後の被災地支援に取り組む学生ボランティアの支援を行いつつ、その支援領域を拡張し、またその成果を生かして正課の授業開発にも取り組んで来た。このセンターで開講する授業の多くは、学生スタッフ組織 SCRUM（【図 1】参照）との連携の中で実現してきた。本紀要の各所で取り上げているように、SCRUM の人数は増加し、取り組みも熊本地震被災地支援や日常的な人権課題の学習等、広がりを持ちつつある。SCRUM の学生は、自らもボランティア活動を行うが、それに加えて以下の三つの役割を担っている。

【図 1】SCRUM の組織図



---

[4] えぐちさとし、特任助教、satoshi.eguchi.d3@tohoku.ac.jp

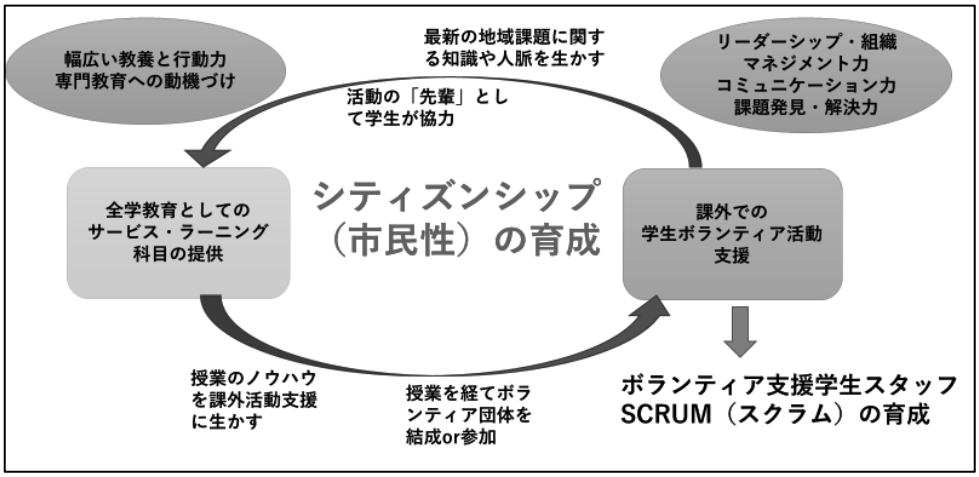
[5] ボランティアに関する言説やボランティア批判の系譜に関しては、仁平典宏『「ボランティア」の誕生と終焉』名古屋大学出版会、2011 年を参照されたい。

[6] 筆者らのボランティアに関する見解は、藤室玲治・江口怜「サービス・ラーニングを通してつちかう〈地域視点〉と〈人権感覚〉」『2016 年度課外・ボランティア活動支援センター紀要』2017 年を参照されたい。そこでは、ボランティアと教育を結び付ける上で、資本と国家から相対的に自立した領域としてボランティアを構想し、人々の生活世界と当事者性に根差して社会を眺める〈地域視点〉や人権侵害の現実を直感し声をあげることのできる〈人権感覚〉の養成が重要であることを論じている。

①つなぐ（コーディネート＆ネットワーキング）
ボランティアに取り組む学内の団体･個人を支援し､学外の団体も含めて交流･連携を深めることで、ボランティア活動を活性化させる。
②学ぶ・深める（ラーニング）
ボランティアの現場で感じたこと・考えたことを深めたり、ボランティアの現場の抱える課題・ニーズを学ぶことのできる機会を提供する。
③生み出す（インキュベーション）
新しい現場に行ってみる視察やツアーを企画し、新たなボランティア活動を生み出す。

また、課外のボランティア活動支援と正課の授業開発の関係を整理して【図 2】に示した。

【図 2】課外活動支援とサービスラーニング科目の連携



筆者らが SCRUM の学生と協働して実施している被災地でのボランティアツアーやスタディツアーは、被災地の現状と課題を学び、ボランティア活動を通してその解決の一助となるべく支援を行うものである。しかし、その中で学生たちは、組織マネジメントの手法等を学び、リーダーシップやコミュニケーション能力、課題を発見し解決する力などを育んでいる。他方で、全学教育として実施する授業は、より体系的な知識の伝授や教養の獲得、専門教育への動機付け等を狙いとし、課外活動支援とは狙いとする学習目標がやや異なる。学生の意識としても、自発的な活動として行っている課外活動と、知識の受け手であると自らを位置づける全学教育の授業とでは、違いが見受けられる。

しかし、これらを全く別個に行うのではなく、連関を生み出そうとするところにセンターの強みがある。具体的には、課外でのボランティア活動支援の中で培った地域課題に関する知見や地域社会との具体的な人脈等を授業開発に生かすことができ、また授業の一環で行うボランティア活動においては課外で活躍する学生の協力を得ることも多い。逆に、授業を実施する中で培ったノウハウや人脈を、再び課外活動支援に生かす場合もある。

さらに、うまくいくケースでは、授業を通して関心を持った地域の課題に継続的に関わるボランティアグループが生まれる場合もある。例えば 2016 年度に当センターで開講した基礎ゼミ「ボランティア活動と地域課題」では、東日本大震災被災地の仮設住宅や復興住宅の支援を通して、被災者の生活再建の課題やコミュニティ形成の課題を学ぶ授業であったが、授業終了後に「たなぼた」という学生サークルが誕生し、現在でも活動を継続している。またその後の同内容の基礎ゼミや展開ゼミの実

施にも協力してくれている[7]。センターではこのように、地域に根差した正課の学習と課外でのボランティア活動による貢献とを循環させることを狙いとしている。

さらに、こうした循環全体を、高等教育におけるシティズンシップ教育の実践として解釈することも可能である。サービス・ラーニングがシティズンシップ教育としての意義を持つと論じる若槻健は、次のように述べている。

> サービス・ラーニングに取り組むなかで、学習者は支援を必要とする地域社会の人や団体にサービスを提供し、他者と交わることで自尊感情を高め、市民としての責任感を身につけることができる。それと同時に、現実に存在する地域社会の問題の解決に取り組むなかで様々なスキルや批判的な思考力を獲得することが期待されている。サービス・ラーニングは、学習者が具体的な問題状況を抱えた他者にかかわりあい、問題状況に対して他者と協働して働きかけ、問題解決にむけて主体的に活動することを通して進行する。(略) 他者の「声」をみずからのなかに取り込み、かみくだき、みずからのものとし、それに返答していくことの繰り返しで学習が進んでいく。コミュニティ全体からみれば、それは共同の価値、意味、記憶が蓄積されていく過程でもある。他者を含んだ環境を「協働」で「よりよく」変化させていくこと自体が、個人にしてみれば学習の過程なのである。[8]

以上の若槻の主張には、「活動の後に学習がある」、もしくは「学習の後に活動を行う」という活動／学習の二元論を前提とするのではなく、活動＝学習の過程として捉えるべきだという学習観が含意されている。ここは、協働する「他者」及び働きかけの対象となる「他者」の存在が必須のものとされていることも注目される。他者に対する働きかけを含む活動は、いかなる時に学習として成立しうるのだろうか。活動に焦点を当てやすい課外活動支援と、学習に焦点を当てやすいサービス・ラーニング科目の双方を射程に入れることで、こうした問いをより深く考察することができるはずである。以下では、筆者の関わった福島に関する展開ゼミの事例と、基礎ゼミと SCRUM 人権共生部の連携に関する取り組みの事例について取り上げて、若干の考察を行いたい。

2. 福島の復興に関する展開ゼミの開発と福興 youth との連携

筆者は、2016 年の着任以来、福島県内でボランティア活動を行う福興 youth の活動に関わってきた[9]。福興 youth は東日本大震災学生ボランティア支援室福島部門として発足し、2012 年頃から原発事故後の福島県内各所でスタディツアーを行い、2014 年頃からはいわき市を拠点に津波の被災地域や原発事故の避難者が入居する仮設住宅・復興住宅等でコミュニティ支援活動に取り組んできた。

とりわけ、学習の要素が強いのは、例年夏季休暇中に実施している 2 泊 3 日のスタディツアーである。このツアーでは、福島第一原発事故後の諸問題を複眼的に把握することを課題とし、福島県やいわき市などの行政関係者、語り部や市民団体の活動、JA など第一次産業従事者、事故の被害者に関わる弁護士、放射線測定に関わる大学機関、東京電力福島復興本社等を訪れて視察を行いつつ、実

---

[7] 藤室玲治・江口怜「サービス・ラーニングを通してつちかう〈地域視点〉と〈人権感覚〉」『2016 年度課外・ボランティア活動支援センター紀要』、2017 年、16 頁。

[8] 若槻健『未来を切り拓く市民性教育』関西大学出版部、2014 年、68 頁。

[9] 江口怜「学生ボランティアは福島で何を学んでいるのか―ボランティア活動を通した市民性教育の試み」『東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要』3 号、2017 年。

際に避難者の生の声を聴くことができるボランティア活動を組み込んでいる。2017 年のスタディツアーに参加した学生からは、「震災・原発事故から 6 年半経っているにも関わらず、想像以上に未だ深刻な状況にあると学びました。一見多くの人がいるように見えても作業員等が多くの割合を占めており、住民の方が戻ってくることの難しさを感じました」、「福島の問題については、ただ一つの視点からとらえることはできないので、多くの視点から勉強をして深く考える必要があると感じました」、「実際に当事者の方と対面してお話を聞くのはとても大事であると感じました」等の感想が寄せられている。

これらの活動を支援する中で得られた知見や人脈を基にして、2017 年度第 2 セメスターで初めて福島の復興を主題として展開ゼミ「福島における人権保障と共生の課題―原発事故後を生きる人々に寄り添う」を開講した。その概要は紀要の別の個所に記したので、福興 youth との連携に関連する事柄に絞って取り上げてみたい。

まず、授業の受講者に対して、10 月～12 月に福興 youth が実施したボランティア活動への参加を「事前フィールドワーク」として課した。これは、実際に福島を訪れ、ボランティア活動を行う経験を受講者に行ってもらうのに、福興 youth の活動へ参加してもらうことが有効と考えたからである。福興 youth のメンバーは、初めて福島を訪問する人に対して原発事故の概要や放射線に関する基礎知識、関わる地域が抱える課題などについて説明することに慣れており、ここで基本的なガイダンスを受けることができた。また、各地域や団地での信頼関係を築いているため、初めて訪問した学生も自然に住民の方々や自治会の方々から話を聞くことができる。この点、課外で継続的に活動するボランティア団体の協力を得られることは、授業を実施する上でも極めて有意義であった。

また、福興 youth のメンバーに対しては、ドキュメンタリーの視聴や外部講師の講義を行う授業を案内し、任意で参加してもらった。ボランティア活動を継続するには運営等で時間が割かれ、福島の抱える課題を広い視野で学習する機会が少なく、実際の参加は少数ではあったが、その機会を貴重なものと受止めてくれた。なお、本年度に関しては福興 youth 代表の 2 年生の学生が聴講生として授業に継続して参加してくれたため、議論を深める上でも有意義だった。その 2 年生も、課外のボランティア活動だけでは得られない学習の機会を得られたと話してくれた。

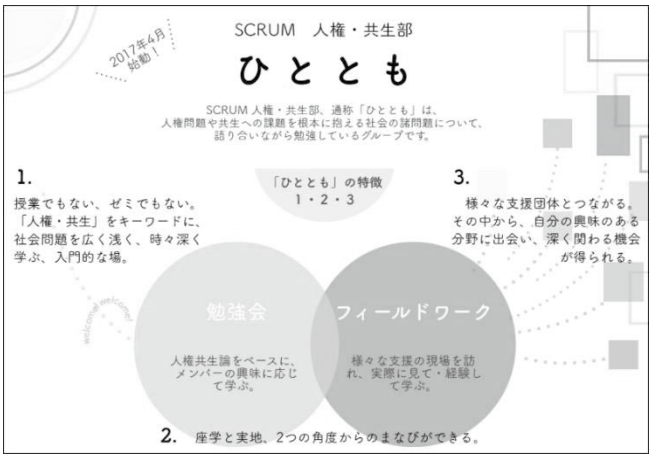
2 月 16 日～18 日に行った本番のフィールドワークに際しても、授業の受講者と福興 youth のメンバーの連携を行うことができた。授業のメンバーは視察先に対するアポイントメントや事前学習を担い、また川内村でのイベントの中身を考案してもらった。福興 youth のメンバーは、足湯ボランティアやカフェ活動など、日常的に自分達が行う企画に関して受講者をサポートし、また全体的なツアー運営面で活躍してくれた。企画の準備段階での連携が遅れた点などやや課題は残ったが、お互いの強みを生かしながらフィールドワーク（ツアー）を行うことができ、双方に満足度の高いものとなった。

このように、どちらかといえば「学習」に重きを置く授業と、「活動」に重きを置く課外活動がうまくコラボレーションすることで、サービス・ラーニングの質を高めることができたように思われる。ただし、前提として、受講者と福興 youth のメンバーの双方に、目的と計画をしっかりと伝え、理解と納得を得て行うことが重要である。その点に手を抜けば、受講者からは「なぜ授業外の学生の助言を受けなければならないのか」、福興 youth のメンバーからは「なぜ授業の手伝いをしなければならないのか」と不満が出かねない。筆者は現在福興 youth のミーティングも定期的に参加していることでこの連携が可能になったが、課外のボランティア活動支援と正課の授業をよりよく連携させていくための仕組みや枠組みの工夫に関しては、今後も検討・改善の余地があるだろう。

3. 基礎ゼミの開発と SCRUM 人権・共生部との連携

次に、基礎ゼミ「共生社会に向けたボランティア活動―人権・多様性・エンパワメント」と SCRUM との連携の事例を紹介する。SCRUM は東日本大震災後の被災地支援活動から生まれたため、震災復興関係以外のボランティア活動に対する知識や関係性がほとんどない状態であった。しかし、課外・ボランティア活動支援センターとしても震災関係以外のボランティアを担当・推進していく必要があること、また筆者の専門は福祉系・人権系ボランティアとの関係が強いことから、こうしたボランティア活動に関心を持つ学生スタッフの養成を行いたいと考えていた。

【図 3】「ひととも」紹介のポスター



そこで 2017 年度に SCRUM の部として発足させたのが、人権・共生部である。このグループは学生の考案で、「ひととも」という愛称がつけられた。【図 3】は大学祭の際にひとともの学生が作成したものであるが、様々な人権課題や共生社会に関する問題を学習会やフィールドワークを通じて学ぶものであり、その中でこれらに関わるボランティア活動への理解を深め、コーディネートできる人材を育成することを狙いとしていた。また、被災地支援の現場においても、自身がセクハラ被害から身を守ったり、住民へのハラスメントが生じないような人権感覚を身につけたり、地域社会で排除されがちな人々を包摂しうるコミュニティづくりを試みたりなど、ひとともでの学習を生かすことができる場面は多いと考えていた。

ひとともの活動と授業の連携の第一は、授業で実施するフィールドワークの紹介である。実際、授業内で行った障害者施設の見学や仙台自主夜間中学、仙台夜まわりグループでのボランティア活動等に、SCRUM の学生も複数参加してくれた。こうした交流の成果もあって、授業の受講者から SCRUM に参加する学生も 1 名いた。

次に、今後の授業開発にも生かしうる実験的なボランティア体験プログラムを、ひとともの学生と協働で開発したことである。夏季休業中には「子どもの貧困問題解決に向けた取組に学ぶボランティア体験プログラム」を、春季休業中には「障がい児者との共生に向けた取組に学ぶボランティア体験プログラム」を企画・実施した。これは、様々な人権課題の学習会を重ねる中で、学生自身が行ってみたい現場やテーマを出し合い、その中で可能なものをプログラム化したものである。筆者もこのプログラムの準備を通して、せんだいこども食堂など、新たな支援団体とのつながりを作ることができた。現在、このつながりを生かした次年度の授業計画を準備中である。

このように課外での活動を通して学生の意見を聞くことで、現在学生が関心を持っている社会問題について知ることができ、また意見交換を通して論点となる課題を教員の側も把握することができる。これは、課題発見・解決型の授業（Problem/Project Based Learning, PBL）を開発する上で、有効な方法ではないかと思われる。

既存の知識体系を有効に学生に伝授することを目的とする講義型の授業とは異なり、PBL では教員自身もタイムリーな課題に対して常にアンテナを張っていなければ、意義ある授業設計を行うことができない。こうした意味で、PBL 型の授業開発を行う上で、ひとともの ように関心のある課外

の学生グループを生み出し、彼・彼女らと連携していくことは、今後の高等教育においても有効な方法となるのではないだろうか[10]。

4. 課外ボランティア活動支援と正課教育の連携に向けた課題

ここまで課外のボランティア活動支援と正課のサービス・ラーニング科目開発の連携の事例紹介と若干の考察を行ってきた。さらに、これらの取り組みを通して浮かび上がってきた課題点について、幾つか指摘しておきたい。

まず、学生の課外での自発的なボランティア活動と、教員が評価者となり単位を取得する授業内のボランティア活動は、一定の緊張関係を持つ必要がある点である。SCRUM はセンターの学生スタッフ組織としての性格を持つとはいえ、課外に行う自主的活動である限り、教員の都合だけで協力を無理強いすることはあってはならない。あくまで、「連携」の意義や方向性について見解を伝え、了解と納得を得る必要がある。これは、非常に時間のかかる作業であるが、こうした合意のプロセスを丁寧に行うことで、授業開発においてもボランティア活動支援においてもより良い循環を生みだすことができるのではないかと考えている。

この点に関わって本年度感じたことの一つは、学生にとって、課外活動は「自分たちのもの」、授業は「与えられるもの」という意識が強いということである。課外活動は、自分達の時間やお金を出し合って行う以上、満足や楽しさ、やりがいが重視されるし、そうでなければ継続は困難である。逆に、授業の受講者は学期期間中に非常に熱心に学習や活動を行うが、授業終了後にまでボランティア活動を継続しようという学生は少ない。これは、授業期間に学習を目的として行う活動であるという理解があり、また教員のコーディネートで活動するものだと自然に理解しているからであろう。当然、ボランティア活動が自発性に基づくものである以上、授業終了後に継続するか否かは自由である。しかし、あくまでも教育的配慮に満ちた時空間の中で行うボランティア活動は、一定の限界を有することに教員も自覚的でなければならない。この点筆者は、ボランティア活動を継続するか否かよりも、ボランティア活動を通じて出会う様々な課題に対して、一市民として自分が今後生きていく中で向き合って行きたいという意欲を育めるか否かが重要ではないかと考えている。シティズンシップ教育においては、授業の経験がその後の人生経験にどのよう影響したのかという点に関しても今後調査研究を行う必要があるだろう。

次に、ボランティア活動を組み込んだ授業における評価の問題について述べたい。当然、課外活動支援において評価は存在しない。サービス・ラーニング科目開発上の課題の一つは、この評価の問題である。まだ、体系的な評価方法の開発には至っていないが、現時点で重視しているのは、「ボランティア活動への参加自体や参加に際しての意欲は評価しない、ボランティア活動を通じて学んだことや身につけた力に限定して評価する」ということである。教員としても、「ボランティア活動をさせること」を目標とすべきではなく、あくまで教養教育として身につけるべき知識・技能を、より有効に学習しうる方法としてサービス・ラーニングを用いるべきではないか。そのためには、教員は学生が関与するボランティア活動の現場が抱える課題についての知識が求められるし、学生の体験を知識・技能として定着させるための「振り返り（リフレクション）」の方法についての専門性が求められる。

---

[10] こうした方法は、正課とは異なる自発的な学習の場としての自主ゼミ・自主講座等の形で大学文化の中に存在し続けてきた系譜を、真正面から全学教育の方法として取り入れるものであると言えるかもしれない。

また、課外活動とは異なって、授業の面白いところは、ボランティアに懐疑的な学生も時に参加していることである。筆者の基礎ゼミを受講していたある男子学生は、ボランティアに対して「偽善」のイメージを持っていた。しかし、ホームレス支援活動を行う仙台夜まわりグループの活動に参加し、次のような最終レポートを書いた。重要なので、長めに引用したい。

> 活動を通して気づいたことの二つ目は、「ボランティアに参加する」ということはどんな場合であれ素晴らしいということだ。実のところ、僕はボランティアという単語に好印象を持っていなかった。どことなく「偽善」を感じてしまうからだ。これは正直今だって変わらない。ボランティアで人を救いたいなら、死ぬまで人助けを続ける覚悟がなければ偽善だ。ボランティア精神を持っているなら贅沢するな。贅沢するくらいならその金を全部募金しろ。できない？ならばそれは偽善だな。そんな風に思っていた。でも違うのだ。どんなに短期間でも、どんなよこしまな考えを持っていたとしても、どんな動機であれ「ボランティアをした」という事実が大切だったのだ。なぜなら、それによって必ず救われた人がいるから。
>
> 講義を受けて、様々なハンディキャップを抱える人がいることを知った。その人たちが今も昔も戦い続けていることを知った。実際胸が痛んだ。助ける必要があると感じた。すると、今までなら多分こう思ったはずだ。これで行動しなきゃ嘘だ、全部偽善だ、と。違うのだ。まず社会のそういった部分を知れたこと。これが「共生社会」に近づくための一歩だった。こんなところでひねくれて、偽善だなんだと言って終わってしまってはお話にならない。まず知ること。これが大事だった。
>
> それをうけてボランティアに参加するか否か、これはもう完全に自由である。ボランティアをしないとしても誰にもそれを攻める権利などない。むしろ無理してボランティア活動に参加して自分を犠牲にしてしまうほうがよくない。（それでも、そのボランティアしたという事実はすばらしいが）ボランティア＝自己犠牲ではないからだ。する暇がある人が、気が向いたときにちょっとボランティアする、これくらいのスタンスで十分だと僕は思う。
>
> （略）
>
> 最後に、僕は「共生社会」が完全に実現することは難しいだろうなと思っている。ただ、少しでも実現に近づかせるために、学校の授業でマイノリティの人々についての話をしたり、特別支援学級を積極的に取り入れたりして少しでもそういった方面に対する見聞を広めることがやはり大切だと思う。注意点として、「こんな人たちがいるから、みんなで助けてあげましょうね」などと言って生徒を喚起する行為は、僕のような懐疑心を持った子ども（こんな考えを持つ子どもはたくさんいるはずだ）には逆効果であるため控えるべきである。

このレポートの中で注目したいのは、最終段落の部分である。「マイノリティの人々」について話したり、出会いの機会を提供する学習について、彼はうさんくささを感じている。これは、ボランティアを道徳教育的な文脈で実施しようとする時にぶつかる問題である。ボランティアをさせ、助け合いの重要性を説教するだけでは、むしろ「逆効果」になることを彼は鋭く指摘している。このように、ボランティアとは何か、社会の中でいかなる意味づけを与えられ機能しているのかを批判的に考察することも、サービス・ラーニングにおける重要な学習課題の一つになりえるかもしれない。

研究ノート

課外・ボランティア活動の国際化――現状と課題――

渡部留美[1]・島崎薫[2]
東北大学高度教養教育・学生支援機構　グローバルラーニングセンター

1. はじめに

「大学の国際化」、「キャンパスのグローバル化」などというフレーズが使われて久しい。国際化の結果として生まれた国内学生のグローバル人材育成、クォーター制の導入、外国人留学生・研究者の受入れ、英語による講義やコースの提供、留学生と国内学生が共に学びあう共修授業、国際交流プログラムなどは、東北大学においても大学の運営、事業において身近で一般的なものとなりつつある。

東北大学は東日本大震災を経験した大学でもあり、これまで被災地への支援活動、関連する研究、教育プログラム開発など多岐に渡り知識や経験が蓄積されている。このような背景から、国内だけでなく、海外の機関より災害スタディーツアーの受入依頼などが舞い込むことも多く、対応を行ってきた。震災当時は激減した外国人留学生数も順調に回復し、現在、東北大学に留学する外国人学生のなかには震災について学びたい、現地でボランティア活動をしたいという声もきかれる。これらのニーズに応えるためには、国際交流系の部署と課外・ボランティア活動系の部署が協働し、プログラムの企画、提供を行うことが必要になってくる。

本稿では、「キャンパスの国際化」に「課外・ボランティア活動」を掛け合わせることによって起きるプラスの効果や利点、また、二つの要素を取り入れることの難しさや課題、その背景にあるものについて事例を挙げながら紹介する。

2. 本学の国際交流状況と留学生の友人関係、学内での課外活動に対するニーズ

本題に入る前に、本学の留学生と国内学生の交流の状況と留学生が課外活動に参加できる環境の現状について紹介する。本学は国際交流に力を入れている大学の一つであり、学内においても国際交流ができる環境を提供している。まず、国際共修授業と呼ばれる言語・文化背景の異なる学生同士が共に学びあう全学教育科目を通年 50 科目以上開講している。これらは日本語あるいは英語で提供され、留学生、国内学生が様々なトピックや課題について、議論、フィールドワーク、グループ活動、発表等を通して相互理解を深めるねらいがある。留学生にとっては、国内学生と知り合ったり、日本文化・日本社会についてよりよく知る機会となり、異文化不適応に陥らないための予防ともなる。国内学生には、学内にいながら海外の多様な学生と接することにより、多文化理解の促進、国際感覚の涵養、海外への関心の醸成などが期待されている。また、学内には国際交流系団体がいくつか存在しており、課外活動として学生が自由に交流できる機会が備わっている。

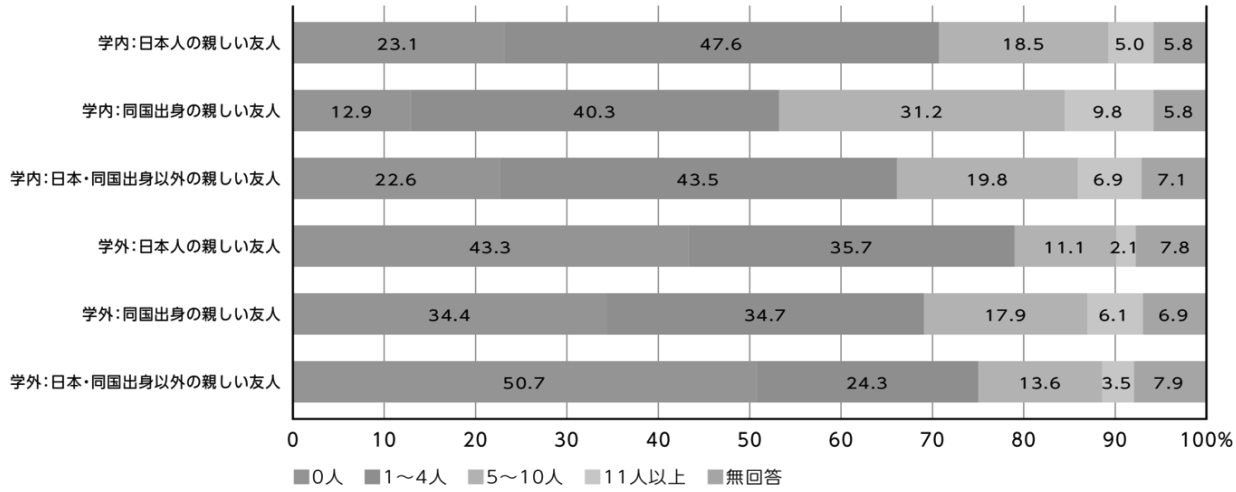
しかしながら、これらの交流機会が数多く存在するにも関わらず、留学生が国内学生と充分に交流できていないという結果が、2016 年度に実施した「東北大学留学生学生生活調査」から明らかになっている。【グラフ１】は、留学生が学内外においてどのような友人関係を構築しているかについて聞いた結果である。全体的に友人が少ないという結果であるが、学内の日本人の親しい友人が 0 人で

[1] わたなべるみ、准教授、rumi.watanabe.c5@tohoku.ac.jp
[2] しまさきかおり、講師、k.shimasaki@tohoku.ac.jp

あると回答した割合が 23.1%、1～4 人と回答した割合が 47.6%となっている。学生生活の多くの時間を費やす場所である大学において親しい友人が少ないという事実は重く受け止めるべきであろう。

【グラフ１】友人の分類と人数

1. どのような友人が多いですか?それぞれ、人数をお教えください。

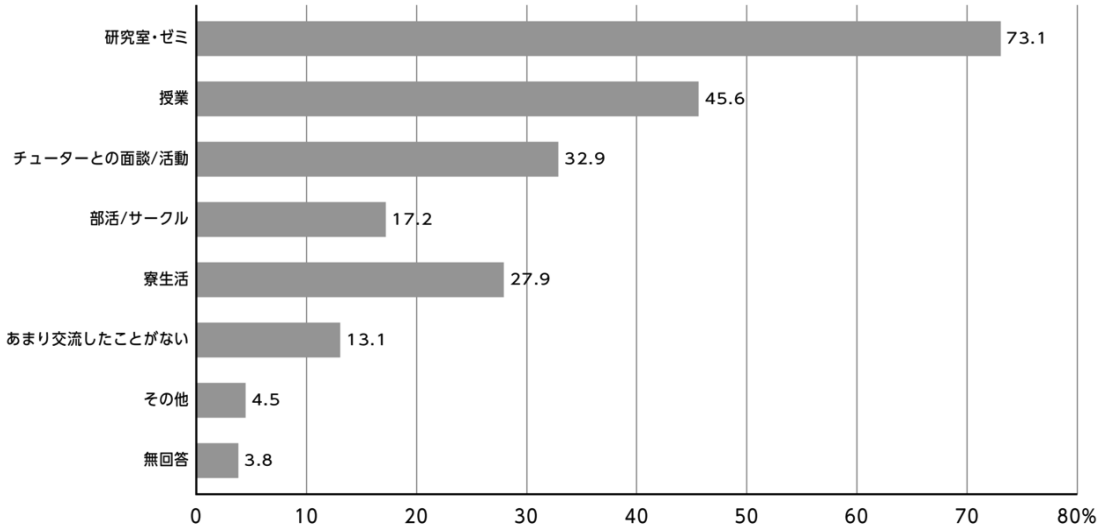


出典：東北大学（2017）p17

また、学内において、どのような時に日本人と交流の機会をもったか、という質問（グラフ２）に対しては、学習・研究活動中が圧倒的に多く、部活やサークルなど課外で交流する機会の少ないことが明らかになっている。それに反し、「日本人学生ともっと交流したいか」という別の質問に対しては、8 割以上の留学生が「交流したい」と回答していることから、留学生の日本人との交流ニーズが満たされていないことが浮き彫りになった。

【グラフ２】学内における日本人との交流の機会

2. これまで学内でどのような時に日本人と交流しましたか?〈複数回答可〉



出典：東北大学（2017）p17

3.「課外・ボランティア活動」と「国際化」を掛け合わせることによる効果と課題

2016 年から、国際交流系の部署であるグローバルラーニングセンターと課外・ボランティア活動系の部署である課外・ボランティア活動支援センターがタッグを組み、それぞれの強みを活かしながら、留学生や国内学生に対する活動の提供を行ってきた。以下では、双方のセンター教員がオブザーバーとなり、学生が主体となって計画、実施した活動内容と参加した学生の声を紹介し、そのメリットと課題について述べる。

【表１】は、留学生を対象とした被災地ツアーの一覧である。課外・ボランティア活動支援センターには SCRUM という学生ボランティア団体があるが、留学生向けのボランティアイベントを企画する流れから、SCRUM から派生して 2016 年 6 月に SCRUM 国際部が発足した。以降、SCRUM 国際部は、留学生が参加できるよう英語対応つきのツアーを定期的に開催し、多くの留学生が参加し、キャンセル待ちが出た回もあった。SCRUM 国際部は他の国際交流系団体（TUFSA:東北大学留学生協会、IPLANET、@home）と共催したツアーも企画しているが、結果として参加する留学生の「奪い合い」にもならず、それぞれの団体の特徴を活かした留学生のニーズに応えた質の高いプログラムとなっている。

【表１】留学生を対象とした東日本大震災被災地ツアー

日程	ツアー地	参加者数	主な内容
2016 年 1 月	女川・石巻	48 名（留学生*36 名）	被災地の方々と交流
2016 年 6 月	女川	28 名（留学生 16 名）	被災地の方々と交流
2016 年 12 月	陸前高田	35 名（留学生 16 名）	被災地の方々と交流
2017 年 2 月	石巻	25 名（留学生 14 名）	ハラルフードツアー
2017 年 6 月	荒浜	19 名（留学生 11 名）	海浜清掃でボランティア
2017 年 11 月	荒浜	32 名（留学生 22 名）	海浜清掃でボランティア
2017 年 11 月	女川	27 名（留学生 17 名）	被災地の方々と交流
2018 年 2 月	荒浜	17 名（留学生 14 名）	海浜清掃でボランティア

*ここで明記した「留学生」とは、ツアーに参加申込みした留学生のことであり、主催する団体 SCRUM、TUFSA、IPLANET、@home にも留学生が含まれている。

ツアーに参加した留学生からは【表 2】のような感想があった。

【表 2】留学生の主な感想

カテゴリー	内容
現地の人々との交流をとおしての感想	・ 日本人がとてもポジティブで、未来を見据えているのが印象的だった。 ・ 日本人の意識的な復興は非常に早いと思った。彼らはかわいそうだと思ってほしくはないようだと思った。 ・ 留学生は経済的な復興に関心を寄せているが、日本人は人々がどう元の生活に戻るかというところに着目している。 ・ 彼らの瞳から悲しい体験を見て取ることができた。 ・ 彼らはいたって普通だった。それは予想外だった。彼らを単に被害者と見なすことはいとも簡単である。体験話にとても衝撃を受け、揺さぶられた。人々

	が体験したことを本当に理解することは決してできないのだと覚えておかなくてはいけない。
日本人学生との交流をとおしての感想	・（一緒にいった）日本人学生は通訳を手伝ってくれた。留学生と現地の人の言語障壁を取り除いてくれた。 ・日本人と一緒に活動することで、テレビで見るよりも多くのことを知ることができた。 ・日本人と留学生の観点の違いを知れたことは面白かった。
その他の感想	・このようなイベントをもっと企画してほしい。 ・被災地でボランティアをしたい。

留学生の感想からは、実際に現地に赴き、被災者と交流することで知り得た東日本大震災の被災地の現状や被災者に対する率直な思いが感じられる。また、日本人学生の言語面や文化面のサポートが被災地に対する理解を深める手助けになっているといえる。これらのツアーは、留学生が課外活動として国内学生やキャンパス外の日本人と交流しながら震災について学べること、国内学生が留学生と地域住民の間を繋ぐ役割を果たしていることなど複数のメリットがある。

一方で課題もある。1 点目は、留学生と日本人学生ではツアーに求めるものや目的が異なっていると感じることである。日本人学生は、被災地において、瓦礫の撤去をしたり、被災した人々の話を聞いたりすること、つまり、ボランティア活動をすることで復興に協力したいという思いが強い。留学生は、現地の人々と活発な議論をしながら、復興のアイディアを出したり、共に何かを作り上げるという作業を求めることが多い。被災地復興に対する考えの違いが反映されていると考えられる。2 点目は、日本人学生の通訳にも限度があるため、日本語能力の充分でない留学生にとっては、できる活動が限られてしまうことである。瓦礫の撤去やゴミの片付けという作業では、留学生の満足度は低くなるかもしれない。留学生、国内学生双方のニーズにあったツアーを作り上げるためには入念な準備が必要であろう。3 点目は、ツアーを受け入れる被災地と大学側の信頼関係である。ツアーの企画は学生の自由な発想で行わせているものの、ボランティア活動を行うにあたっての注意点、ボランティア活動場所の決定、被災者との接し方、ニーズのくみ取り方等、細心の注意を払うべき点も多い。専門家である両センターの教員がある程度介入する場面も必要である。

４．おわりに

学内の国際交流活動は古くからあるものの、これと他の要素を掛け合わせたものはあまりないと考えられ、本稿で紹介した「国際交流×ボランティア」の組み合わせは留学生、国内学生、地域住民それぞれにとって有益なプログラムであるといえるだろう。この試みは始まったばかりであり課題もある。両センター教員も学生も経験を積み、学びながら「国際交流×ボランティア」のエキスパートとして成長できるよう今後も活動を継続していきたい。

【参考文献】

東北大学（2017）「2016 年度東北大学留学生学生生活調査まとめ」東北大学高度教養教育・学生支援機構

研究ノート

「ボランティアに対する意識および社会的意識に関する調査」を通じたボランティアの社会的意義と課題の考察

三浦哲[1]　学問と社会をつなぐサロン
斎藤雅史[2]　学問と社会をつなぐサロン
大庭佳乃[3]　SCRUM
嶋田奈桜[4]　SCRUM

0. はじめに

2017 年 10 月、東北大学課外･ボランティア活動支援センター学生スタッフ「SCRUM」（以下、「SCRUM」）と東北大学学友会登録団体「学問と社会をつなぐサロン」（以下、「サロン」）の 2 団体の共同で、「ボランティアに対する意識および社会的意識に関する調査」を実施した。本稿では、調査の概要を述べるとともに、その結果を分析し、ボランティアの社会的意義と課題について考察したい。

1. 本調査の目的

（1）東北大生のボランティアへの参加状況

「平成 27 年度東北大学学生生活調査」のまとめによると、学部生の 20%、大学院生の 28%がボランティア活動を経験している。活動内容は、40%弱が「震災復興活動」、続いて「児童、生徒の学習支援」「地域活動」「留学生などの外国人支援」「環境、保護活動」となっており、ボランティアを始めたきっかけは、学部生・大学院生ともに過半数が「自発的に」、約 30%が「友人・知人の紹介」、約 10%は「学内の掲示」であった。また、学部生および大学院生の約 30%は、まだ経験は無いがボランティア活動に関心があると回答している。さらに、ボランティアセンターが開催しているツアーには、計 49 回の開催で、のべ 713 人が参加している（2015 年度）。学生生活における活動の選択肢の一つとして、ボランティアが学内に根付いていることが分かる。

（2）問題意識と調査目的

阪神淡路大震災を機に一躍脚光を浴び、東日本大震災で再び注目が高まったボランティアの功罪はさまざまな角度から論じられてきたが、高等教育におけるボランティアという点では、「一人の市民として、地域社会の現実や課題を知り、関わり、考える」という「市民性教育」の視点（藤室・江口 2017）はとりわけ重要だろう。少なくない東北大生がボランティアやツアーに参加しているが、そのことは学生が社会に開かれた意識を獲得し、それを深めていくきっかけとなっているのだろう

---

[1] みうらさとし、文学研究科博士前期課程 2 年、salon.tohoku@gmail.com（学問と社会をつなぐサロン）
[2] さいとうまさふみ、経済学部 4 年、同上
[3] おおばよしの、文学部 2 年、vol.tohoku.univ@gmail.com（SCRUM）
[4] しまだなお、工学部 2 年、同上

か。2011 年 3 月 11 日から 7 年が過ぎようとし（執筆時点）、仮設住宅の供与という点だけで見れば、復興の「仕上げ」の時期に差し掛かっている。今こそ、ボランティアが学生にどのような影響を与えたのかという点から、ボランティアの社会的意義を問い直していくことが求められている。

同時に、学生とボランティアの関係を考えるうえでは、まさしく学生がボランティアに対してどのような意識を持っているのかを明らかにすることが重要である。ボランティア経験のない人と話しているときにある種の「温度差」を感じるという体験は、筆者を含め、ボランティア経験のある人の多くが共有するところだろう。SCRUM メンバーの間では、ボランティアに参加しない東北大生はボランティアにマイナスイメージを抱いているのではないかという「仮説」が、それなりに有力なものとして存在していた。実際にはどうなのだろうか。学生のボランティア活動をより発展的なものにしていくためにも、ここは明らかにしたいポイントである。

以上の問題意識を出発点として今回の調査を行った。①東北大生がボランティアおよび社会に対してどのような意識を持っているのかを明らかにすること、②ボランティア経験が学生の社会的意識にどのような影響を与えているのかを明らかにすること、この 2 点が本調査の目的である。

2. 調査概要

（1）調査方法

東北大学の学部生･院生（卒業生･修了生を含む）を対象とするアンケート調査を実施した。アンケート方法は以下の 3 点である。調査票および入力フォーム（以下、「調査票」）は選択式となっており、いずれの方法においても、回答は回答者本人が記入もしくは入力した。

① 川内北キャンパスでのアンケート

SCRUM およびサロンのメンバーが調査員となり、キャンパス内にいる学生に回答を依頼した。バインダーを用いて個々の調査員が声を掛けたほか、厚生会館前に回答用ブースを設置した。調査員は 1 日 10 人前後。

・実施期間：2017 年 10 月 11 日～18 日　平日 12 時～13 時（17 日は実施せず）

② 授業内アンケート

後期セメスターに授業を担当している教員に協力を依頼し、授業内に調査票を配布、回収した。

・実施期間：2017 年 10 月中

③ ネットアンケート

Web 上に入力フォームを作成、該当 URL を SCRUM およびサロンの SNS に掲載し、回答を募集した。また、「東北大学ボランティア情報メール配信サービス」を通じて、配信サービス登録者からの回答も募集した。なお、このネットアンケートについては、SCRUM メンバーにも任意での回答を依頼した。

・実施期間：2017 年 10 月 12 日～10 月 31 日

（2）調査票の構成

調査票は、「０．基本情報」、「１．ボランティアに対する意識」、「２．社会に対する意識」、「３．一般的な社会課題に対する意識」の 4 部から構成されている。「０．基本情報」では、学部と学年、

性別を質問した。「１．ボランティアに対する意識」では、ボランティア経験の有無やボランティアに対する意識を質問した。また、ボランティア経験の有無に応じて独立の項目を設け、ボランティアを始めた理由／ボランティアに参加しない理由などについて、それぞれ回答を得た。「２．社会に対する意識」では、ニュースに触れる頻度やエリート意識、「市民」的意識について尋ねた。「３．一般的な社会課題に対する意識」では、貧困層および外国人に対する国の政策についての意識を尋ねた。

質問項目については、本紀要の 135-6 頁に集計結果と併せて掲載されているため、詳しくはそちらを参照されたい。

なお、調査票の作成にあたって、ISSP（International Social Survey Programme）による 2014 年の国際世論調査（NHK 放送文化研究所世論調査部・小林 2015）、Pew Research Center による 2007 年の国際世論調査（Pew Research Center2007）、東京大学新聞社による 2017 年の東京大学新入生調査（東京大学新聞社 2017）の中で用いられている設問を参照または引用した。

3. 調査結果

調査を通じて、333 件のサンプルが得られた。内訳は、川内北キャンパスでのアンケートが 251 件、授業内アンケートが 61 件、ネットアンケートが 21 件となっている。

回答については、項目ごとに単純集計を行った。さらに、ボランティア経験がボランティアや社会に対する意識にどのような影響を与えているかを分析するため、ボランティア経験の有無を尋ねた項目とそれ以外の項目でクロス集計を行い、それぞれの結果を比較した。詳しい集計結果は上述の「(調査結果のページ)」に掲載されているため、そちらを参照されたい。

なお、サンプルの中には、記入漏れのほか、途中で回答を中止したとみられるものがいくつかあった。これらについては、サンプルそのものを無効とはせず、回答があった項目のみを集計した。そのため、項目によって母数が異なる。

また、調査票では「学部・学科」を尋ねていたが、工学部や理学部など学科分けがなされている学部でも学部しか記入されていないものがかなりの数に上った。そのため、集計段階では学科分けを行わず、学部のみを集計単位とした。

さらに、サンプルの属性に関して、課題が 2 点ある。1 点目として、「川内北キャンパスでのアンケート」がサンプルの大半を占めるため、そのキャンパスで授業を受けることの多い学部 1 年生および 2 年生の比率がきわめて高くなっている。2 点目として、上述のとおり、ネットアンケートは SCRUM メンバーにも回答を呼びかけた。そのため、通常よりもボランティア活動に意欲的な層の回答比率が高くなっている可能性がある。

４．分析

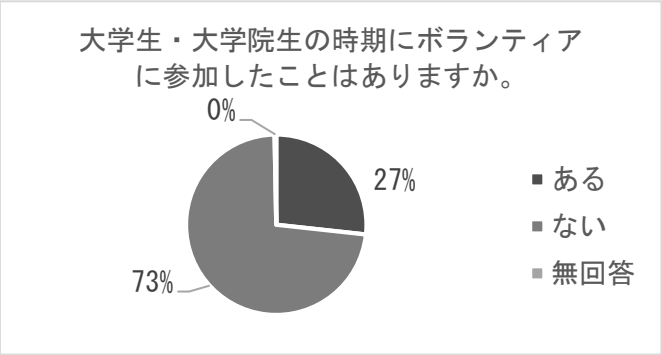
集計結果をもとに分析を行う。なお、紙幅の都合上、すべての項目について検討することはできない。また、掲載するグラフも最小限にとどめた。

（1）母集団、属性

大学生･大学院生の時期のボランティア経験の有無を尋ねたところ、「あり」27%、「なし」73%だった（【図１】）。学部生の 20%、大学院生の 28%がボランティア活動を経験しているという「平成 27 年度東北大学学生生活調査」の結果と近しい値になっている。本調査は、サンプルの属性が 1･2 年生に大きく偏っているものの、東北大生の状況を一定程度反映することができていると言えるだろう。

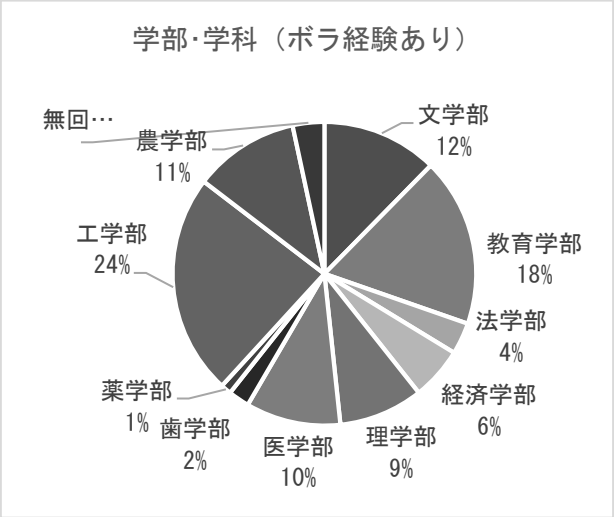
また、ボランティア経験のある人の 76%は、東日本大震災関連のボランティアに参加していた。このことは、東日本大震災を機にボランティアに関わった学生が多いことを示していると同時に、被災地にある東北大学ならではのボランティアの特徴的傾向を表していると言えるだろう。

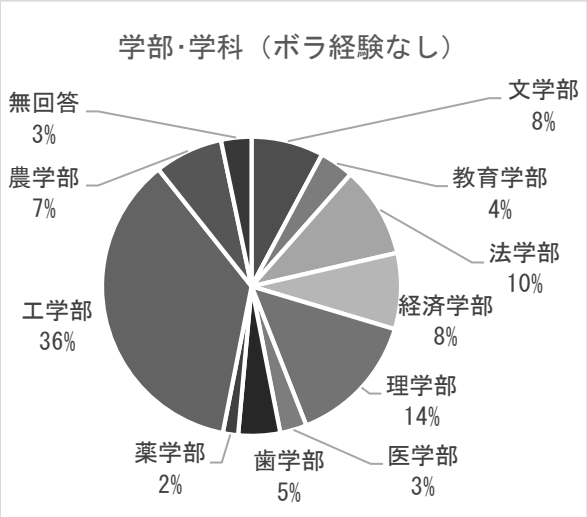
【図１】ボランティア経験の有無



ボランティア経験「あり」と回答した集団（以下、「ボラ経験あり」）と「なし」と回答した集団（以下、「ボラ経験なし」）の学部構成を比較すると、ボラ経験ありのうち文系学部の占める割合は 39%となっており、ボラ経験なしの 30%を上回る（【図２・３】）。文系学部のほうがボランティア経験のある学生の割合が高いことが分かる。中でも教育学部は、ボラ経験ありの 18%を占め文系学部最多、工学部に次いで 2 番目となっている。入学定員わずか 70 名（全 10 学部中 9 位）の教育学部がこれほどの割合を占めていることは、教育関連ボランティアが主要なボランティアの一つとして位置づいていることと関連があると考えられる。本調査でも参加したボランティアの種類を尋ねているが、「子どもの教育」は「傾聴・交流」に次いで 2 番目に多くなっている。

【図２・図 3】ボランティア経験の有無と学部構成

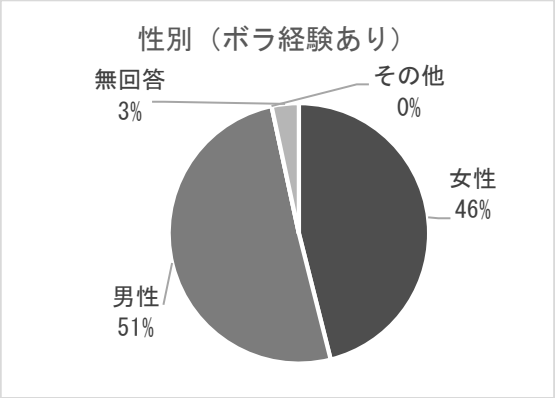


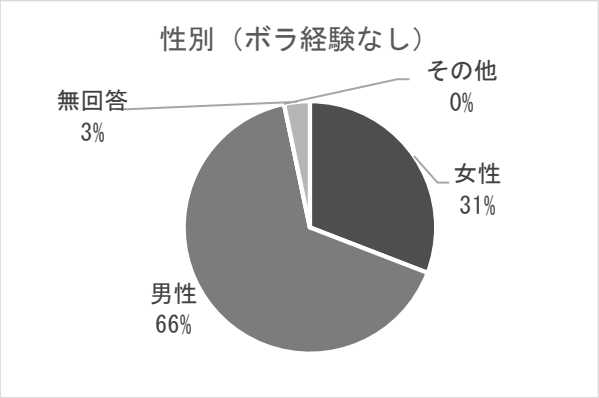


また、ボラ経験ありの女性比率は 46%となっており、ボラ経験なしの 31%を大きく上回っている（【図 4・5】）。女性のほうがボランティア経験のある学生の割合が高いことが分かる。東北大学の学部生に占める女子学生の割合が約 26%であることを踏まえると（2017 年 5 月時点）、ボラ経験ありの 46%は注目すべき数字と言える。なお、集計結果には反映されていないが、上述の教育学部と医

学部のボラ経験ありでは女性比率がより高い（教育学部 16 人中 12 人、医学部 9 人中 7 人）。ボラ経験ありの「医学部」の内訳として、保健学科の割合が高い可能性が考えられるだろう。

【図４・5】ボランティア経験の有無と性別構成



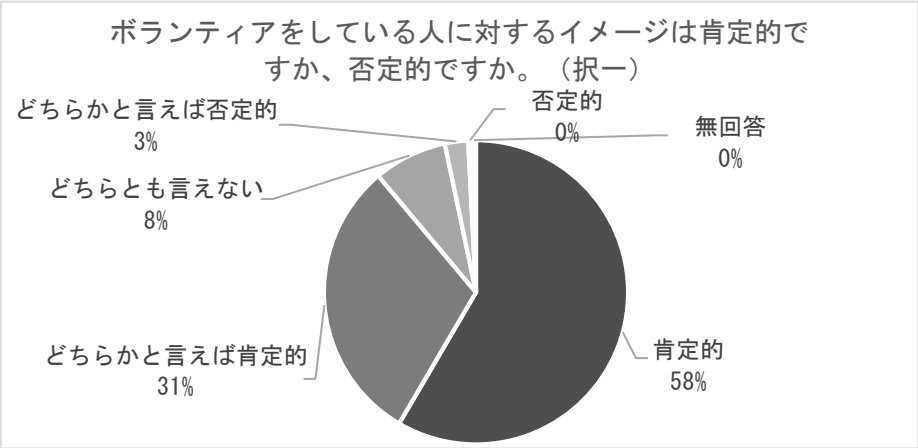


（2）ボランティア経験とボランティアに対する意識の関連

ボランティアが人の役に立ち、社会を良くするものだと思うかという質問に対して「そう思う」または「どちらかと言えばそう思う」と回答した人の割合は、ボラ経験ありでは 94%、ボラ経験なしでは 92%と、ほとんど差がなかった。また、ボラ経験なしにはボランティアをしている人に対するイメージが肯定的か否定的かを尋ねているが、「肯定的」が 58%、「どちらかと言えば肯定的」が 30%と、大半は肯定的なイメージを抱いていることが分かった（【図６】）。また、ボラ経験なしのうち、ボランティア活動に「興味はある」または「少し興味はある」人の割合も 61%に上っている。

この結果は、調査目的のところで述べた、ボランティアがマイナスイメージを持たれているという「仮説」に対する明確な反証となっている。そうした「仮説」は、ボランティアに取り組んでいる人たち自身が内部で作り上げてしまったものだということになるだろう。

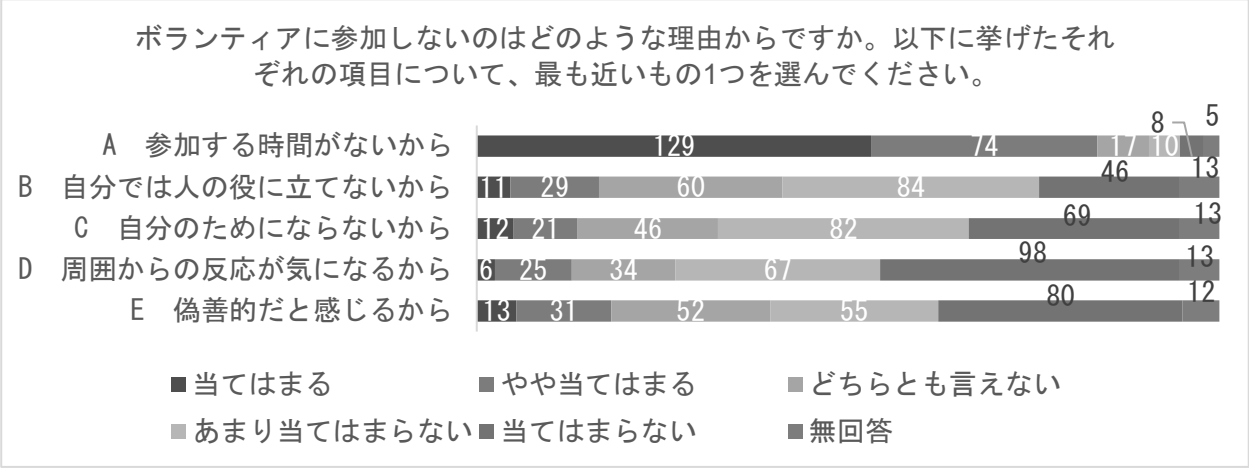
【図６】ボランティアをしている人に対するイメージ



それでは、肯定的なイメージを持っている人が多いにも関わらず、実際にボランティアに関わる人が必ずしも多くないのはなぜだろうか。ボランティアに参加しない理由を尋ねたところ、「参加する時間がないから」が「当てはまる」または「やや当てはまる」とする回答が 83%となり、20%未満に止まるそれ以外の理由を圧倒した（【図７】）。学業やアルバイト、他のサークル活動など、ボランテ

ィアよりも優先したい、あるいは優先せざるをえない事情を抱えていると見ることができ、「温度差」もそこに由来していると考えることができるだろう。

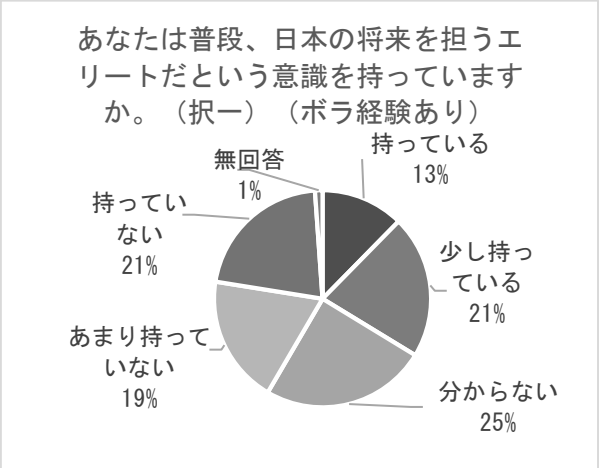
【図 7】ボランティアに参加しない理由

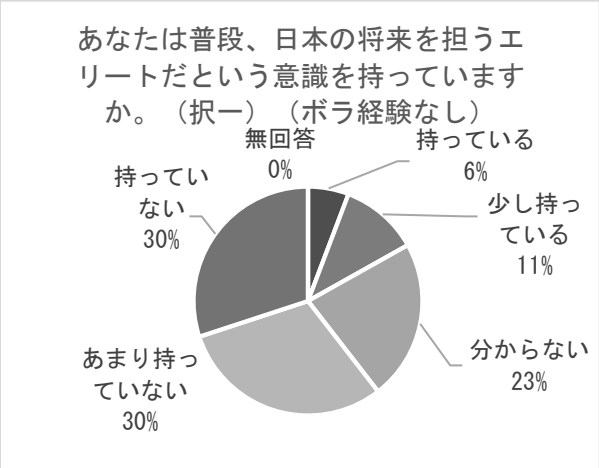


（3）ボランティア経験と社会的意識の関連

エリート意識を持っているかという質問に対して「持っている」または「少し持っている」と回答した人の割合は、ボラ経験ありでは 34%、ボラ経験なしでは 17%と、大きく差が開いた（【図８・９】）。エリート意識を持っていることが「良い」こととは限らないが、この結果は重要である。なぜなら、エリート意識とは、自分が社会のどこに位置しているかという意識にほかならないからである。低所得者層の生活に触れたり、「東北大生なんだ、期待しているよ！」と言われたりといった具体的な経験から自分自身がエリートと呼ばれる社会的地位にいることに気付いたのかもしれない。ボランティア経験が自分と社会の関係を意識する契機となっている可能性を、ここに見ることができる。あるいは元々エリート意識の高い人がボランティア活動を行う傾向があるのかもしれない。

【図８・図９】ボランティア経験の有無とエリート意識

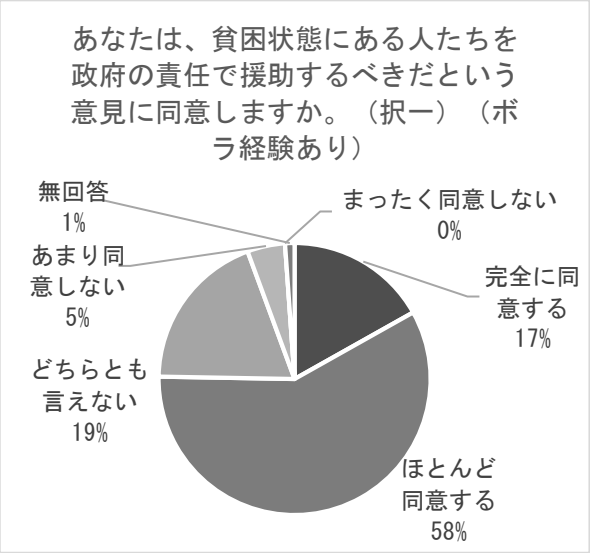


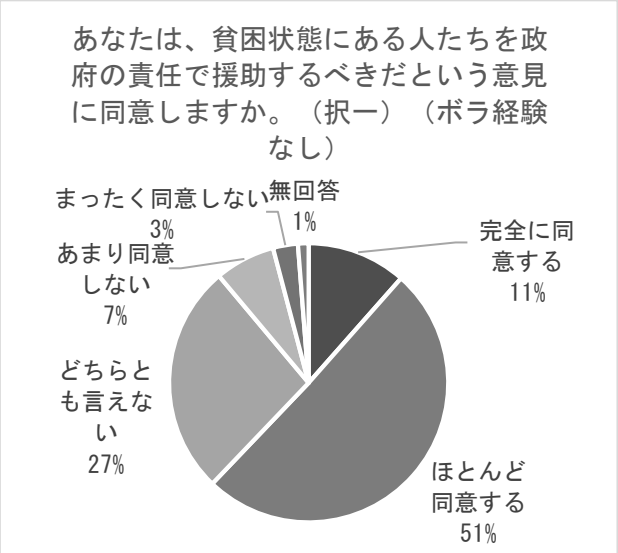


貧困層を政府が援助すべきかという質問に対して「完全に同意する」または「ほとんど同意する」と回答した人の割合は、ボラ経験ありでは 75%、ボラ経験なしでは 62%と、こちらもボラ経験ありが上回った（図 10・11）。また、外国人に対する政策を 3 つ挙げ、それぞれについて賛成か反対かを尋ねた質問でも、「賛成」または「どちらかと言えば賛成」と答えた人の割合は、すべての政策でボ

ラ経験ありのほうが高かった。すなわち、ボランティア経験と「他者」への寛容さには正の相関があることが分かった。社会的に不利な立場に置かれている人たちを支援する現場の中で、自己責任論が相対化されたり、不平等に疑問を抱く感性が養われたりしている可能性がある。あるいは、「他者」への寛容さを持った人が、ボランティアを行う傾向が強いということかもしれない。

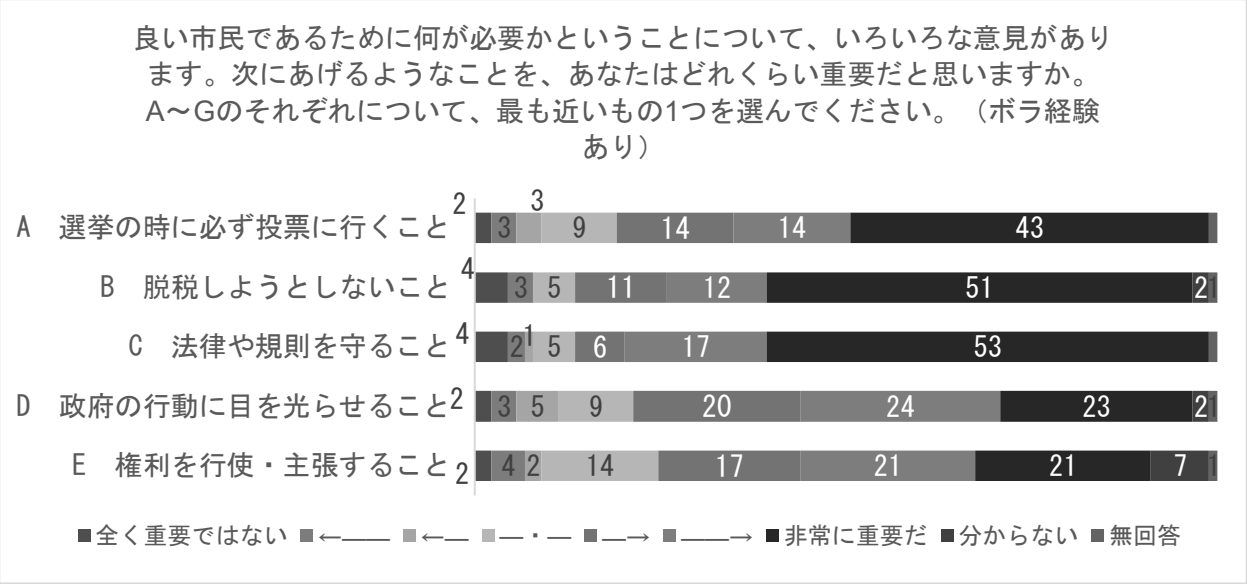
【図 10・図 11】ボランティア経験の有無と貧困層に対する政府援助への態度



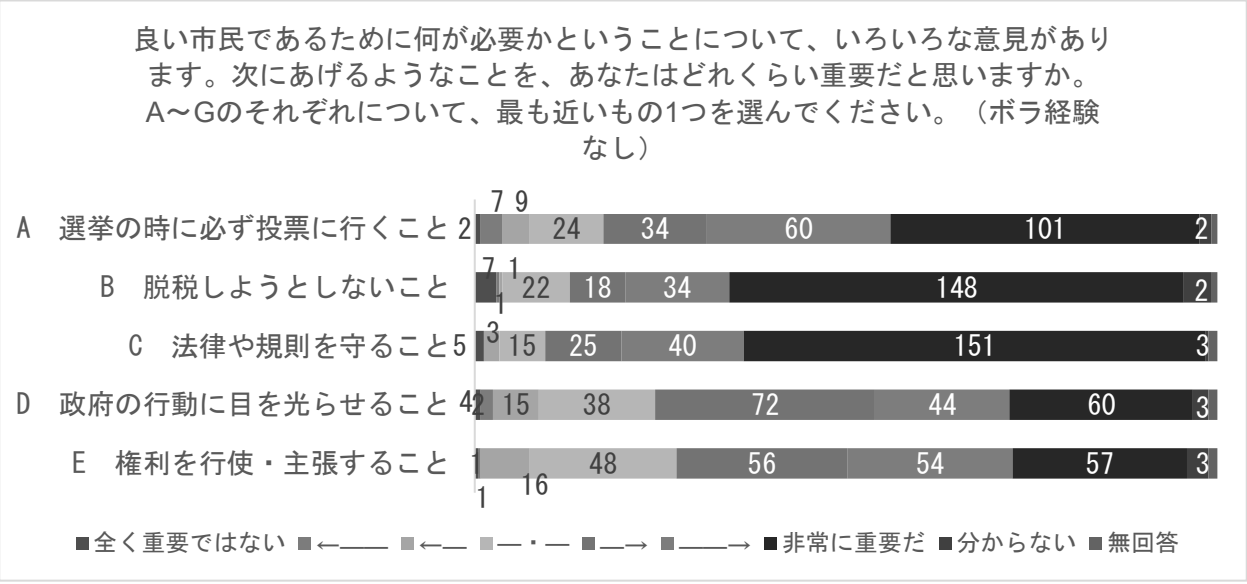


ボラ経験ありとボラ経験なしの間で、エリート意識や「他者」への寛容さに有意な差が出たことは、ボランティアと社会的意識の結びつきを示していると言えよう。しかし、一方で課題も見えてきている。良い市民であるために何が必要かについて、5 つの項目を挙げてそれぞれ重要性を尋ねたが、「権利を行使・主張すること」に関してボラ経験ありとボラ経験なしで大きな差がなかった（【図 12・13】）。貧困層や外国人への福祉・医療の提供、定住外国人への参政権付与といった政策は、権利保障的な役割を果たすものであり、その意味で権利の行使や主張と不可分のはずである。それにもかかわらず、ボランティア経験の有無と権利の行使・主張には相関がないということは、「他者」の権利保障に対する寛容さと、それを現実たらしめるための権利行使の感覚に距離があるということを示していると言えるだろう。

【図 12】ボランティア経験の有無と良い市民として重要なことの認識（ボラ経験あり）



【図 13】ボランティア経験の有無と良い市民として重要なことの認識（ボラ経験なし）



5. まとめ

大半の東北大生は、ボランティア経験のない人も含めて、ボランティア活動に対しては肯定的なイメージを持っていることが分かった。また、それでもボランティアに参加しない理由として、参加する時間的余裕のなさが最も大きいということも分かった。今後、さらにボランティアに関わる学生を増やしていくうえで、この点が課題となるだろう。

またボランティア経験の有無と、エリート意識、「他者」への寛容などの社会的意識には正の相関があることが分かった。ボランティア活動を通して、これらの社会的意識が涵養されたのか、あるいは元々、社会的意識が高い人がボランティア活動を行う可能性が高いのかという点は今回の調査では分からないが、ボランティアと社会的意識に強い関連があるとは言える。一方、権利の行使・主張

に対する重要性の認識は、ボランティア経験の有無で大きな差がないことも分かった。これはボランティア活動を題材として市民性教育に取り組む際にも、充分に留意すべき点であると思われる。

今後の課題として、ボランティアをきっかけとした社会的意識の萌芽を、より具体的なものへといかに繋げていくかが問われていくことになるだろう。

【参考文献】

藤室玲治・江口怜，2017,「研究ノート サービス・ラーニングを通してつちかう〈地域視点〉と〈人権感覚〉 ―東日本大震災以降のボランティア活動支援と市民性教育の可能性―」課外・ボランティア活動支援センター紀要（2016 年度），p2-18.

NHK 放送文化研究所世論調査部・小林利行，2015,「低下する日本人の政治的･社会的活動意欲とその背景～ISSP 国際比較調査「市民意識」・日本の結果から～」放送研究と調査 2015 年 1 月号.

Pew Research Center，2007,「World Publics Welcome Grobal Trade-But Not Immigration　47-Nation Pew Global Attitudes Survey」

東京大学新聞社，2017,「東大新入生アンケート 2017①　推薦合格者、女子は 4 割　「エリート意識ある」半数割れ」http://www.todaishimbun.org/survey20170421/、2018 年 2 月 20 日閲覧.

報告

陸前高田市における地元と東京の中学・高校生の交流から

鈴木優里[1]
陸前高田応援サークルぽかぽか

0. はじめに

2017 年 8 月 9～10 日に陸前高田市において東北大学と東京都にある富士見中学高等学校との共催で行われたボランティアツアー（東北復興 study ツアー）の中で実施した陸前高田出身の高校生と富士見中学高等学校の生徒、東北大学生の交流会について述べる。また、高校生、大学生の交流の意義について考察する。

1. 東北復興 study ツアーについて

富士見中学高等学校は報告者の母校であり、震災後 2012 年から陸前高田市に復興 study ツアーとして夏休みに訪れていた。しかし、ツアーの内容のマンネリ化、および年々参加者が減少していることが問題として挙がっていた。そこで、今年度は普段陸前高田でボランティアをしている東北大学（ぽかぽか）と連携を取り、これまでのツアーとは異なるボランティアの要素を含めたツアーを行うこととなった。

2017 年 3 月から富士見中学高等学校の生徒の中でこの企画に関わりたいという有志 6 名と先生方 3 名と話し合いを重ねた。中学・高校生から今回のツアーの目的として以下のようなものがあげられた。

・震災の恐ろしさを再確認する
・東北の魅力や現状、当時東京では知れなかったことを知る
・現地の方と多く交流して様々なことを学ぶ
・「伝える」ことを意識しながら学ぶ
・相手に自分たちが東京で伝える係だと知ってもらう
・笑顔になってもらう

これらの目的に合うように、そして今の陸前高田市の現状と照らし合わせてツアー内容を考えた。具体的なツアー内容は以下の通りである。

・震災遺構（TAPIC45、奇跡の 1 本松、定住促進住宅）の視察
・伊勢勤子先生（震災当時、高田高校勤務）のお話
・陸前高田出身の高校生、富士見生、東北大生の交流
・高田一中仮設住宅、高田コミュニティセンターでの手芸・料理企画

このツアーに参加した富士見中学高等学校の生徒は中学生 8 名、高校生 12 名の計 20 名で、引率教員 3 名、東北大学生 13 名がこれに加わる。次の章からはこの中にある陸前高田出身の高校生、富士見生、東北大学生の交流企画について述べる。

---

[1] すずきゆり、東北大学工学部建築・社会環境工学科　2 年生。tohoku.poka2@gmail.com

2. 交流会の内容

交流会の目的としては震災経験を同世代から聞くこと、生活している場が異なるので、それぞれの今の生活について知ることである。この目的を踏まえて、交流会の内容を考えた。この企画には陸前高田出身で大船渡高校、高田高校の生徒 5 名が参加して下さった。具体的には参加者を 4 つのグループに分け、それぞれ同じテーマで陸前高田出身の生徒にインタビューをする形で交流を行った。テーマは震災当時のこと、今の陸前高田に思うこと、今の生活について、自分の将来、将来の陸前高田について等である。【表 1】に陸前高田出身の高校生と富士見中学高等学校生徒の感想をまとめた。

【写真】交流会の様子

【表 1】参加者の声

高田の高校生	こういう機会がないと震災について話すことない。友達ともなんとなく震災のことは話さないんだ。
高田の高校生	今は復興の状況を知ってもらいたい。頑張っていることを知ってもらいたい。
富士見中学生	同年代の方から震災についてありのままの話を聞き、震災のことがとても近くに感じた。もし自分だったらどうするだろうと考えた。
富士見高校生	同い年である事が恥ずかしくなるくらい将来のやりたいことを具体的に語ってくれた。
富士見高校生	大学生の先輩は大学で学んでいる分野と関連させて活動をされているようでした。そのような姿を見て私も将来大学で学んだ分野を何らかの形で生かせるようになりたいと思った。

3. 高校生、大学生の交流の意義

今回の企画で、富士見中学高等学校の生徒からは地元の高校生や大学生の話を聞くことが出来てよかったという感想が多かった。同世代だけど違う境遇で育ってきた者との交流というのはそれぞれにとって刺激となるものではないかと思う。

私が大学生になって高校時代を振り返ると、高校時代は家庭や学校が主なコミュニティであってそれ以外のコミュニティとのかかわりが少なかったと感じる。だからこそ意識的に普段のコミュニティ以外の人と交流をすることで、自分とは違う考え方を知り、刺激を受け、自分の考え方に変化を与えることが出来ると思う。そこにこのような交流企画の意義があると考える。

報告

福島県におけるボランティア活動と連携した原発事故伝承の意義と展望

山﨑 英彦[1]・松田 敦之[2]
福興 youth

1. はじめに

2011 年 3 月の東日本大震災発災から 7 年を迎えた。東北地方にあり、先端的な研究機関が集積する本学では、震災復興や地域活性を目的とし近隣地域と連携した取り組みが、各部局において数多く行われてきた。一方、本学は東北地方にある大学でありながら、周辺地域の出身者、とりわけいわゆる「被災 3 県」(岩手県、宮城県、福島県)出身の入学者が、入学者の総数に占める割合は 25.8%[3]と非常に少ない。さらに専門領域によっては、在学中に東日本大震災の甚大な被災地域に関与する機会がないというケースも考えられるであろう。

一方、東日本大震災を端緒として、被災地域を含め、在学生による学生ボランティア活動は拡大を続けてきた。我々東北大学福興 youth(以下、福興 youth と記す)もその一例として、課外・ボランティア活動支援センターの前身である東日本大震災学生ボランティア支援室内で、2014 年に同支援室の福島部門として発足した。福興 youth では原発事故・地震・津波の複合災害を被った福島県において被災者支援活動を行ってきた他、学内募集により本学の学生を対象としたボランティアツアー・スタディツアーを企画し、福島県の被災状況や被災地の現状を知る機会を提供してきた。

本稿では、原発事故の被災地域において行われた福興 youth の活動を題材として、福島県で東北大学生がボランティア活動や視察に参加する意義と展望について、「原発事故被害の伝承」という観点に絞って考察していく。なお、福興 youth の活動全般については、本冊子中の「2017 年度　東北大学福興 youth（活動報告 4-1-3）」及びホームページ[4]を参照されたい。

2. 原発事故をなぜ伝える／知ってもらうのか

（1）被災地の伝承活動を巡る背景

東日本大震災から 8 年目を迎える現在は、国の復興予算では 5 年間の「集中復興期間」に次ぐ、「復興・創生期間」に位置しており、実際に三陸沿岸の津波被災地では復興に向けたインフラ整備は終盤に差し掛かりつつある。福島県においても、除染や放射能の減衰によって放射線量が低下しており、発災当日から原発周辺に出されていた避難指示が、昨春には一部を除いて解除された。旧避難指示区域では、解除を機に人の立ち入りは自由になり、被災家屋の解体や防潮堤整備、役所機能の再開など、様々なフェーズで復興産業が活発化している。

---

[1] やまさきひでひこ、東北大学経済学部　2 年生。fukkoyouth.tohoku.univ@gmail.com
[2] まつだのぶゆき、東北大学歯学部　1 年生。同上
[3] 東北大学（2017）より。平成 28 年度入学者の数値に基づく比較として、東北大学の東北地方出身者は約 39%、名古屋大学の中部地方出身者は 74%、九州大学の九州地方出身者は 69%と、他大学に比べ東北大学の周辺地域出身者が低い傾向が見受けられる。北海道大学（2016)。
[4] http://www.fukko-youth.tumblr.com/

このように復興の兆しも一部に見受けられる一方で、現在も震災以降の制度・生活環境などの諸要因により復興への課題は山積しており、決して無視できる状況にはない。特に福島県に関しては、原発事故以降、幅広い面で課題が残されており、こうした事情は旧避難区域への住民帰還率はごく低い水準にとどまっている現状にも表出している。

しかしながら、震災の風化は著しく進行している。風化に対しては、主に津波による遺族や被災者により、津波被災の教訓、現地の復興状況を主とした伝承活動、情報発信が行われてきた。全体を通して、その意義は風化を食い止めるということの他に、「防災についての市民教育」と見なすこともでき、被災者以外であっても伝承活動の効果を直感的に意識しやすいと言えよう。一方で原発事故については、甚大な損害や心労を伴う原子力災害であったにも関わらず、被災後の伝承活動や情報発信は、県や市町村、教育機関、あるいは被災者団体など、様々な立場によって強く行われているものの、その意義は津波被災の場合と比較して意識しづらいように思われる。

では、福島県における伝承活動の意義として、果たして何が挙げられるのであろうか。そして、東北大学生を対象とした視察・伝承の活動意義としては、何が挙げられるのであろうか。

（2）社会問題に学生が関心を持つ窓口に

さて原発事故について論じるにあたって、概説的に原発事故による住民被害についても触れておきたい。

既知の通り、原発事故は福島県民らの市民生活に多くの問題を来した（【表 1】）。 浜通り・中通り地方を中心として放射線量が高くなり、とりわけ避難指示区域の住民は終わりの見えない長期の避難生活を強いられたことで、その心労が生活に関わるあらゆる面にひずみをもたらしたことによる。

【表 1】福島県民が直面する参考／多岐にわたる諸問題

- 避難指示区域の設定や除染の対応差(賠償額や帰還時期、住民感情に影響)
- 原発事故被災者への賠償内容や指針による区分
- 廃炉作業や汚染水、除染廃棄物の取り扱いに対する不安
- 地元自治体/避難先自治体の住民サービス
- 仮設住宅・復興公営住宅の住み慣れない暮らし(→共助、孤独死の問題)
- 家族内や地域社会との分断
- 避難中の児童へのいじめ
- 奪われた仕事と故郷
- 避難者と避難先住民との軋轢
- 「風評被害」の影響と不安払拭への課題　　etc…

現在も続く広域避難や福島県産品に対する買い控えのように、原発事故の及ぼした影響は、福島県外の市民生活とも密接に関連している。例として、被災地や避難先で暮らす人々の心の回復については、自己選択や自己決定の機会、社会的ネットワークの変化、人生観の転換、さらには避難先の文化のあり方などが大きな役割を果たすことが挙げられている（Haidt 2006＝2011；高橋 2012）。また、避難の長期化につれて避難先への定住者が増加する傾向にあるが、この理由について生活の安定（慣れ、周囲の人間関係）を挙げた世帯の割合が急激に増加していることも、県外の避難者受け入れ環境が大きく関係していることを示している（新潟県県民生活・環境部広域支援対策課 2014）。しかし、

原発事故でどのような問題が起きたのかを学生に知ってもらうことが、問題解決の一端を担うと同時に、社会問題に対する学生の関心を高めることに繋がる。

（3）科学技術を見つめ直す機会としての「原発事故」

戦後日本の経済成長を支えてきたのは、科学技術の発展と活用であった。原子力発電もその 1 つとして、1970 年代以降相次いで原発が建設されたほか、震災直前には国内発電量の 3 割弱を占めるほど有力な電力源として、原発が経済大国日本を支えていたことは事実である。しかし、原発事故という「想定外」の事態が発生し、その深刻すぎる結果によって、それまで科学技術に対して抱かれていた信頼感は裏切られることとなった。現代社会はそれまで頼りにしていた科学技術といかに付き合っていくか、という問題に直面したのだ。

文部科学省の『平成 24 年度　科学技術白書』では、科学技術政策研究所が行った、科学者や技術者に対する国民の信頼についての調査の結果が述べられている（文部科学省 2012)。この調査は、平成 22 年 5～6 月、10～11 月、平成 23 年 5～6 月、10～11 月、平成 24 年 1 月～2 月においてインターネット上で 10 代から 60 代までの男女それぞれ 60 名以上を対象に試行され、「あなたは、科学者の話は信頼できると思いますか」と質問し、「信頼できる」、「どちらかというと信頼できる」、「どちらかというと信頼できない」、「信頼できない」、「わからない」という選択肢から一つを選ぶ、というものである。問いに対する肯定的な回答をした者の割合の変化を以下【表 2】に記す。

【表 2】震災前後の肯定的な回答をした割合の変化

	震災前	震災後
信頼できる	12～15%	6%
どちらかというと信頼できる	64～70%	59%

震災前と比較した震災後の国民の科学者や技術者に対する信頼感の低下がうかがえる。また、科学技術政策研究所は別の調査を平成 21 年 11 月と平成 23 年 12 月に行っている。その調査内容は、20～69 歳の男女を対象に、「科学技術の研究開発の方向性は、内容をよく知っている専門家が決めるのがよい」と質問し、「そう思う」、「どちらかというとそう思う」、「どちらともいえない」、「わからない」、「どちらかというとそう思わない」、「そう思わない」の 6 つの選択肢から選んで回答してもらう、というものである。こちらも肯定的な回答の割合の変化を記す。

【表 3】震災前後の肯定的回答者の割合の変化

	震災前	震災後
そう思う	59.1%	19.5%
どちらかというとそう思う	19.7%	25.5%

「そう思う」と回答した者の割合が、3 分の 1 程度まで大きく減少した。肯定的回答者(「そう思う」もしくは「どちらかというとそう思う」、と回答した者)の割合は 78.8%から 45.0%へと大幅に低下している。

【表 2】及び【表 3】から、東日本大震災の発生を契機として、科学技術に対して批判的に考える姿勢や、科学技術に関する事柄を専門家任せにしない姿勢が国民に芽生えつつあると言うことができる。これらは科学技術に対する抑止力になると思われる。

原発事故の大きな特徴として、長期に渡る避難指示による人口流出や生活基盤への影響など、周辺地域のコミュニティに非常に長期間に渡る甚大な影響を与えたということが挙げられる。こういった要因もあり、例として平成 29 年 4 月 1 日に町の大部分で避難指示が解除された富岡町では、町民帰還が伸び悩み、町の展望が不透明になっている。確かに原発は莫大なエネルギーを得ることができる上に、設置する市町村も経済効果が得られるが、目先の利益に囚われた行動の末路が、未来世代にまで影響を及ぼすことを忘れてはならない。

原発は、周辺住民の生活、周辺地域のコミュニティと隣り合わせである。コミュニティを破壊し深刻な被害をもたらした原発事故を肝に銘じ、被害への償いに向き合い続け、そして二度と原発事故を繰り返さない責任が、原発に関わる科学者や技術者にはあるはずだ。さらには、現存世代への恩恵や損害を考えるだけに留めず、長期の影響を伴う原子力と付き合うならば、未来世代をも考慮していかなくてはならない。

このように、科学技術の産物である原子力発電の事故によって起きたこと、そして科学技術を扱う重い責任には、科学者が今後も向き合っていかなくてはならない。本学で専門的な教育を受ける学生たちもまた、科学者として倫理観をもって社会に貢献していくことが必要であると認識しなくてはならない。東北大生を対象とした一連の伝承活動は、原発事故の被災地を訪れ、原発事故の深刻な被害に向き合うという科学者倫理の醸成に必要な経験を提供するという点で、意義が大きいと言えるのではないだろうか。

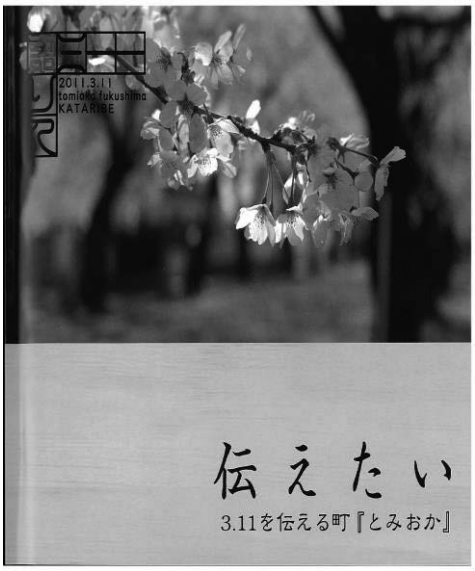
3. 原発事故をどのように伝え継いでいくのか

(1)「寄り添う」視点を持ってもらう

ここまで、我々のボランティアツアー・スタディツアーをベースとして原発事故被災地に関する伝承活動の意義について考えてきた。一連の伝承活動・支援活動において、運営メンバーが原発事故被災地への関心・理解を深めてきた中で最も頻繁に用いられるキーワードは「寄り添い」であった。原発事故という現代日本を語る上で欠くことのできないような大きな社会問題は、関心を持つ人々にとっては比較的容易に新たな知識を吸収したり、議論の場にも移行したりしやすい一方で、それまで関心のなかった人々、特に初学者にとってはあまりにスケールが大きく、実像を捉えきれない状況に陥りやすい。従って、スケールの大きな話であっても、より小さいスケールの視点を持つほど初学者にとっては原発事故の実像を捉えやすく、我々の活動において採用した小さいスケールこそ、原発事故で被災した 1 人 1 人に「寄り添う」視点なのである。さらには、被災した地域を実際に訪れ、事故直後の被害、現状を目の当たりにすることも「寄り添う」視点といえるであろう。筆者としては、原発事故で被災した「人」・「街」といった小さなスケールから原発事故を捉え、被災した方や街の在り様を強烈な実感として理解するというやり方こそが最善のデバイスとして、原発事故に対する関心を高めていくことに繋がるのではないかと考えている。

言い換えると、今後も伝承活動の継続を目指すならば、この「寄り添う」ためのデバイスを欠くことは出来ない。少し話題は逸れるが、地震・津波の被災地同様、原発事故の被災地にも被災体験の語り部が存在し、活動していることを紹介しておこう。福興 youth では特に富岡町との関わりが多く、町内視察の際には富岡町の語り部団体「富岡町 3・11 を語る会」にガイドを依頼してきた。同団体の

場合、所属する語り部の多くは現在も富岡町外への避難生活を続けているが、事務所を避難先の郡山だけでなく富岡にも開設するなど、富岡町の現状を発信し続けるべく活動を続けている。こうした地域事情に精通している方々に我々が定期的にガイドを依頼していることで、学生はより多くのことを学ぶことができ、語り部の方の「伝えたい」という思いに対して、新たな顧客を呼び込む「窓口」を用意し続けるという役割も果たしている。この点にもまた、ある種の活動の意義を見いだすことが出来るのではないだろうか。



【写真】富岡町３・１１を語る会発行の冊子「伝えたい」

福興 youth として視察する際には、原則参加者全員に【写真】の冊子を配布し、事故後の富岡町の経過を理解してもらえるよう同団体と協力している。

（2）伝承活動の「質」を維持するために

さて、震災の伝承活動ではこれまで、震災遺構や語り部の講演、あるいは詩の朗読など様々な形が取られてきたが、いずれも参加者の心に訴えかけるメッセージを秘めている。参加者がこのメッセージを受けとることで「実感」を伴った理解へと結び付くものであり、すなわちメッセージの伝え方が伝承活動の「質」に関わるということは言うまでもない。

先に述べたように、福興 youth では「被災した地域を実際に訪れ、事故直後の被害、現状を目の当たりにする」という形が伝承活動の「最善のデバイス」であると考え、ツアーの中心に据えてきた。しかしながら、この形での伝承活動をいつまで続けていくことが出来るかは不透明である。

現在津波の被災地域では、復興事業によるかさ上げや復旧工事により、かつての街並みや震災遺構など、被害を物語る痕跡は相次いで消失しており、津波被害の伝承活動を行う各地域の語り部がいかに語り継いでいくか、対応に苦慮している。こうした声を定期開催の「全国被災地語り部シンポジウム」等、各地の語り部が集う機会では筆者は度々耳にしてきた。この問題は、決して津波被災地域だけの問題ではない。原発事故の被災地域にも迫り来る問題であることは容易に想像できよう。これにより、被災状況についての実感的な理解は現在よりも困難になると言える。先行して問題に直面した津波被災地では、ほぼ各地域に震災遺構や被災状況に関する展示施設が存在し、語り部がガイドする際もこれらの施設をまわる場合が増えてきているが、原発事故の被災地域にはまだ展示施設は存在

せず、遺構も乏しい。私たちが伝承の質を維持する上では、施設の建設や遺構の保存を自治体に要望するということも考えられるが、自主的な手段として写真やビデオ、新聞記事などのメディアを保存し、伝承活動に活用していくなどの対策も今後講じていく必要があるのではないだろうか。

（3）伝承活動を継続していく必要性

ここまで述べてきた一連の伝承活動は、学内の学生団体によって運営されている学生の自主的な活動という側面が大きい一方で、東北に所在する大学としての地域貢献、あるいは研究第一を掲げる本学の研究活動、高度教養教育の一貫としても捉えることができ、学生の成長につながる重要な活動である。一方で、活動に対する大学からの財政支援が無いため、現在は学外団体同様に企業や関係機関からの支援に依存している状況であり、安定性にやや欠けている。本稿において挙げた意義ある活動の維持や発展、今後の普及に向けた大学の支援も期待したい。

【参考文献】

Haidt J.,2006, The happiness hypothesis: Finding modern truth in ancient wisdom, Basic Books (=2011 藤澤隆史・藤澤玲子訳『しあわせ仮説』新曜社).

北海道大学，2016,『平成 28 年度北海道大学ファクトブック』北海道大学.

文部科学省，2012,『平成 24 年度　科学技術白書』文部科学省.

新潟県県民生活・環境部広域支援対策課，2014,『避難生活の状況に関する調査』新潟県.

高橋征仁, 2012,「沖縄県における原発事故避難者と支援ネットワークの研究 1 ～弱いきずなの強さ」山口大學文學會志，63，79-97.

東北大学，2017,『2018 年度入学者用東北大学案内』東北大学.

報告

学生による緊急災害支援の意義

――平成２８年熊本地震被災地に対する支援の事例から――

山本賢[1]
SCRUM

0. はじめに

本学では、東日本大震災被災地への支援はもちろんのこと、水害等の緊急災害が発生した地域への支援活動も行っている。中でも平成 28 年熊本地震被災地への支援は、2018 年 3 月までに 10 度実施され、SCRUM および HARU に所属するメンバーのべ 44 名が活動を行った。筆者も熊本で活動を行った学生の 1 人である。

本論考では、本学の学生ボランティアによる平成 28 年熊本地震被災地への支援を事例として、学生ボランティアが緊急災害支援[2]を行う意義について考察を行う。

1. 平成 28 年熊本地震被災地への支援の概要

平成 28 年熊本地震は、2016 年 4 月 14 日に前震（M6.4）、4 月 16 日に本震(M7.1)が発生し、熊本県益城町では前震・本震ともに震度 7 を観測した大きな地震であり、熊本県の益城町や西原村、南阿蘇村を中心に大きな被害が出た地震である。

本学では熊本地震発生から間もない 2016 年 5 月から平成 28 年熊本地震被災地への支援活動（以下、熊本派遣と記す）をスタートし、先述の通り 2018 年 3 月までに 10 度の派遣を実施した。熊本派遣の目的は、以下の通りである。

①東日本大震災被災地にある大学としての大規模自然災害被災地への貢献
②熊本大学の学生ボランティア支援に関する助言・アドバイス（教員）
③学生ボランティア同士の経験交流（学生）

なお、現地での活動は、熊本大学学生災害復旧支援団体熊助組（第 1 次～10 次・以下熊助組と記す）および熊本県立大学学生ボランティアステーション（第 5 次～10 次・以下県立大と記す）と連携して実施している。

熊本派遣で行った活動は、がれき撤去の活動や被災家屋の片付けなどの「ハード系」の活動と、避難所・仮設住宅での足湯ボランティアやカフェ活動などの「ソフト系」の活動の 2 つに分類することが出来る。

「ハード系」の活動は、第 1 次～4 次派遣で実施され、各市町村に設置された災害ボランティアステーションを通してのがれき撤去・被災家屋の片付けを中心に行った。「ハード系」の活動は、普段東北では出来ない活動であるため、本学の学生にとっては貴重な経験であった。また、現地で一緒に

---

[1] やまもとただし、東北大学文学部２年。vol.tohoku.univ@gmail.com
[2] ここでの「緊急災害支援」とは、「東日本大震災以降に発生した大規模な自然災害に対する支援活動」を表す。

活動する熊助組のメンバーは「ハード系」の活動のノウハウを持っていたため、本学の学生が熊助組のメンバーからノウハウを学ぶことが出来た。また、「ハード系」の活動において取り扱うのは、現地の方にとって大切なものであるので、このような活動こそ現地の方の気持ちを考えて活動を行うことが大切だと学ぶことが出来た。

「ソフト系」の活動は、第 1 次派遣から継続的に実施されている。第 1 次～4 次派遣では、避難所での足湯ボランティア、第 4 次派遣以降は仮設住宅での足湯・手芸カフェを実施した。「ソフト系」の活動は、本学の学生が普段東北で行っている活動ということもあり、東北での経験を現地学生に伝えることが出来た。現地学生からも、「“足湯って良いなぁ”というのが、今回一番感じたことです。“足も体も心もケアしてくれてありがとう”という住民の方の言葉にすべて表れていると思います」（熊本県立大生・第 5 次派遣参加者アンケートより）という声が挙がるなど、本学学生が東北で行っている「寄り添い型」の活動の良さ・意義を感じてもらうことが出来た。また、第 7 次・9 次・10 次派遣では、仮設住宅にて清掃ボランティアを実施することができ、清掃ボランティアのノウハウも現地学生に伝えることが出来たほか、住民の方にも喜んでいただくことが出来た。

【写真】本学学生が足湯を熊助組メンバーに教える（2016 年 6 月）

また、活動のみならず現地大学生との意見交換も第 1 次・4 次・6 次・7 次派遣で行った。現地学生からは避難所運営の経験や災害ボランティアセンター運営での実体験などの「リアル」な話を聞くことが出来たほか、学生ボランティア同士だからこそ共感できることも多く、とても有意義な時間となった。

2017 年度に入ると、現地学生による仮設住宅への支援が本格化し、熊助組・県立大により、月 1 回程度の活動が行われた。現地学生による支援の本格化に伴い、熊本派遣でも 2016 年度中（～第 6 次派遣）は活動先が流動的であったのに対して、2017 年度（第 7 次派遣～）は現地学生の活動場所に絞って活動を行った。活動場所を絞ったことにより、現地学生と住民の方の関係が深まっていく様子を目にすることが出来たほか、本学学生にとっても継続的に同じ仮設住宅を訪問することが出来、一回きりではない関係を現地の方と築くことが出来た。

今後、熊本派遣で活動している益城町では、仮設住宅から出られる方が増え、仮設住宅の集約等の変化が生じることが考えられる。それに伴って現地学生の活動場所や活動のスタイルに変化が生じると考えられるが、今後の熊本派遣においても、現地学生が活動を行う仮設住宅で現地学生の活動スタイルに合わせた形で継続的に活動を行っていく予定である。

2. 学生による緊急災害支援の意義

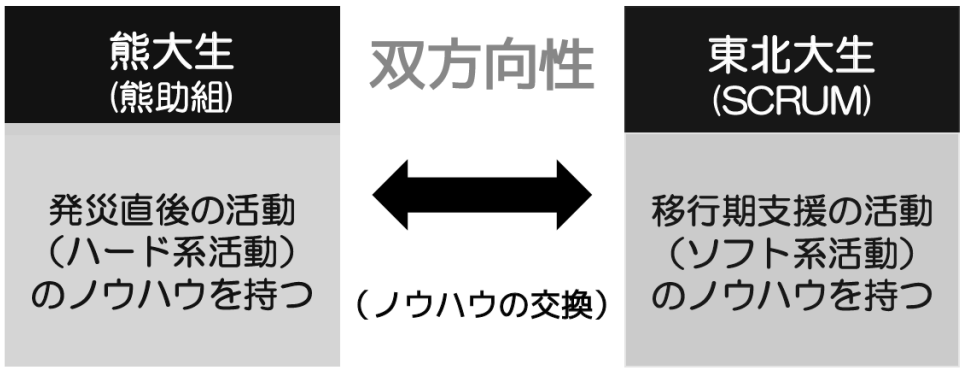
では、学生による緊急災害支援の意義は何だろうか。ここでは、熊本派遣の事例を基に 2 つの意義に関して述べることとする。

（1）学生ボランティア同士の経験交流

意義の 1 つ目は、派遣の目的にもある学生ボランティア同士の経験交流である。

先述した通り、本学の学生と熊助組のメンバーは異なるノウハウ・経験を持っている（【図 1】）。そのような両者が一緒に活動を行うことによって、各々が持っているノウハウ・経験を交換することが出来る。熊本派遣を通し本学学生が東北で普段行っている「寄り添い型」の活動のノウハウ・経験を現地学生に伝える、というのも目的の 1 つであったが、本学の学生が「伝える（教える）側」、現地学生が「伝えられる（教わる）側」といった一方向的なものではなく、互いに自らが持つノウハウ・経験を交換し合う双方向性を持った活動（「学び合い」の活動）であったと言うことが出来る。また、活動への向き合い方や住民の方とのコミュニケーションの取り方など、技術面以外でも学びが多くあった。

【図 1】熊本派遣における経験交流の模式図（筆者作成）



（2）視野の拡大・振り返りの機会

意義の 2 つ目は、視野が広がること・活動の振り返りの機会となることである。

現在、被災地で活動している本学学生は、東日本大震災当時に活動していたメンバーではなく、それに加え発災当初の被災地の様子を知らない。また、現在活動を行っているのも発災から時間が経過した仮設住宅や公営住宅が主である。そんな本学学生が熊本で活動を行うことにより、熊本で活動を行うまでは伝聞したものでしかなかった、発災から時間が経過していない被災地の様子（避難所・入居から時間が経過していない仮設住宅など）を実際に目にすることで違う視点から東北を見ることが出来るようになる。

このように、被災地でコミュニティ支援などの復興支援活動を行っている学生は、違う災害の被災地に行くことで、視野を広げることが出来る。ゆえに互いのフィールドを行き来することはとても有効であると考える。現在東北の被災地で問題になっていることは、2～3 年後に熊本でも問題になっているかもしれない。

また、熊本派遣では、本学学生が普段東北で行っている足湯・清掃などの活動のノウハウ・経験を現地学生に伝えることが出来たが、このような形で自らの経験を伝える（アウトプットする）ことによって、普段東北で行っている活動を振り返る（なぜこのような活動を行っているか・この活動の良さや意義は何か、など）きっかけとなった。

3. 最後に

残念ながら、日本国内では毎年のように大規模災害が発生している。これまでの大規模災害では、多くの学生ボランティアが活躍している。

これまで述べてきた本学学生による平成 28 年熊本地震被災地への支援活動は、団体として行っている緊急災害支援活動の事例だと言うことが出来る。しかしながら、緊急災害発生時には、必ずしも団体として動くとは限らず、むしろ個人単位で比較的時間に余裕があるという学生の利点を活かして支援に行くことが多くなると考えられるので、ここでは個人単位での緊急災害支援の活動に関しても少し言及することとする。

緊急災害に対しては、平時から「支援する側」と「受援する側」という 2 つの立場に立つことを想定して備えをしておくことが必要である。

「支援する側」の準備としては、装備を整えることももちろんであるが、個人単位で支援活動を行う学生や、ボランティア経験が浅い学生を支援するもの（学生ボランティアの拠点や、振り返りの機会など）があることが望まれる。

「受援する側」の準備としては、学生ボランティアが地域の防災訓練に参加するなどして社会福祉協議会との協力関係を築いておくことが望まれる。平成 28 年熊本地震発生時の熊本市災害ボランティアセンターの運営方式（通称：熊本方式[3]）という前例が出来たことで、今後緊急災害発生時に災害ボランティアセンターの運営を学生が担うということも十分に想定される。

繰り返しになるが、学生の強みは比較的時間に余裕があることであるので、その強みを最大限活かせるような仕組みを構築しておくと、学生の力で被災地の人手不足を解消できる可能性がある。ただ、学生ボランティアを酷使することはあってはならない。

災害発生直後は、災害ボランティアセンターを通しての活動がほとんどであるため個人単位でも活動を行いやすいが、時間が経過すると個人単位での活動は行いにくくなる。時間が経過し、現地のニーズが「ソフト系」の活動に移ったころからは、熊本派遣の事例のように団体として支援活動を行っていくべきであろう。残念ながら住宅復興の過程における様々な課題は繰り返される傾向があるので、先の災害被災地で活動するボランティアが、後の災害被災地で現地ボランティアと合同で活動し経験交流することが有効であると考えられる。今回の熊本派遣の事例は、その良い例であると言うことが出来るだろう。

【参考文献】

東北大学課外・ボランティア活動支援センター，2017,『2016 年度課外・ボランティア活動支援センター紀要』.

[3] 「熊本方式」という名称は、熊本県立大の澤田道夫准教授が熊本市災害ボランティアセンターを学生主体で運営した事例に対して用いている。

第Ⅱ部　2017 年度の課外・ボランティア活動支援センター等の報告

第Ⅱ部では、課外・ボランティア活動支援センター等の事業報告を行う。「等」に含まれるのは、学生支援課の活動支援係による学友会支援の事業活動や、当センターの学生スタッフ組織 SCRUM、学生ボランティア団体の活動報告である。

1 章では、大学としての課外・ボランティア活動支援体制に関する変化――これまで学友会に登録していなかった学生ボランティア団体と国際交流系団体の学友会登録、「東北大学学生ボランティア支援に関する内規」の制定により当センターが東日本大震災に限定しない全学的なボランティア支援窓口として位置付けられたこと等――を紹介し、また課外・ボランティア活動支援センターとして実施した事業について報告している。

2 章では、課外・ボランティア活動支援センターにおいて、主にボランティア支援を行う学生スタッフ組織 SCRUM（スクラム）の活動について紹介する。SCRUM では、東北大学生ボランティアを支援するために「ボランティアフェア」をはじめとする様々な活動を行っている。留学生に被災地でのフィールドワークを提供する「SCRUM 国際部」の活動も活発になった。また今年度から「震災伝承部」「人権共生部」等の新しい取り組みも始まった。さらに昨年度から継続している熊本地震被災地での活動、今年度発生した秋田県豪雨被災地での活動も紹介する。

3 章では、主に岩手県・宮城県・福島県の被災 3 県で活動する、東北大学生の学生ボランティア団体の活動を紹介している。SCRUM から派生した、「ぽかぽか（岩手部門）」「インクストーンズ（宮城部門）」「福興 youth（福島部門）」の 3 団体の他、昨年度の基礎ゼミ「ボランティア活動と地域課題」から誕生した「たなぼた」、高校生支援団体 Bridge、地域復興プロジェクト“HARU”、震災復興・地域支援サークル ReRoots、国際ボランティア団体 As One の活動を紹介している。

1. 課外・ボランティア活動支援センターの事業報告

1-1. 課外・ボランティア活動支援センター2017 年度の概括

東日本大震災から 7 年目を迎えた 2017 年度は、これまで東日本大震災関係のボランティア活動支援に業務内容が特化していた当センターが「ポスト大震災」に対応した学生ボランティア活動支援体制とサービス・ラーニング科目の提供を行った年度となった。

もちろん「もう東日本大震災からは離れる」ということではなく、7 年が経過したことを踏まえて、意識的な震災経験の伝承が必要でるとの認識に基づき、サービス・ラーニング科目においても、課外のプログラムにおいても「震災伝承」に対して力を入れたのも 2017 年度の特徴である。

以下、まず課外・ボランティア活動支援センターの使命と事業を確認し、それに沿って、本年度の取り組みを概括したい。

【課外・ボランティア活動支援センターの使命と事業】

2014 年度に誕生した東北大学 高度教養教育・学生支援機構（以下、機構）の業務センターとして設置されている「課外・ボランティア活動支援センター（Center for Service Learning and Extra Activities）」は、「本学学生の社会性を涵養し、主体的な問題解決能力を備えた指導的人材を育成するために、学生の自主的な課外・ボランティア活動を総合的に支援するとともに、社会貢献型の体験学習を実施し、学生の心身の健康増進に寄与する」ことを使命として、次の 3 つの事業をすすめてきた。

(1) 本学学生の自主的な課外活動、文化やスポーツ・ボランティア活動の総合的な支援
(2) 東日本大震災被災地復興および地域社会・国際社会に貢献し得る人材の育成を目的とした、社会貢献型の体験学習（サービスラーニング）の企画・実施
(3) 国内外の大学との課外・ボランティア活動における交流・連携の促進

【学生ボランティア団体等の学友会登録】

2017 年度は、まず(1)の学生の自主的な活動の支援の面で大きな変化がいくつかあった。まず、大きな変化のひとつは、2017 年 9 月に学生ボランティア団体のほぼすべてが学友会に登録するようになったことである。同時にグローバルラーニングセンター等が指導していた国際交流系団体（例えば、留学生支援を行っている「@home（アットホーム）」など）も学友会に登録するようになった。

これは、これまで学生ボランティア団体については、いわゆる学友会所属団体とは別に「東北大学東日本大震災学生ボランティア支援に関する要項」に基づく登録制度があったのを、学友会にも登録してもらうようにしたものである。また国際交流系団体については、これまで正式な登録制度はなく、留学生課やグローバルラーニングセンターが指導していたが、こちらも学友会に登録してもらうようにした。なおこの際、活動実績が 2 年以上ある団体については特例として準加盟団体として認めてもらった。詳細については、「1-5. ボランティア登録団体の支援」を参照されたい。

各団体に学友会登録をしてもらった理由は 2 つあり、ひとつは「東北大学東日本大震災学生ボランティア支援に関する要項」を廃止する予定としていたので、学生ボランティア団体の制度的裏付けとして学友会への登録を各団体に勧めた。ただ、これについては、後に検討を重ね、学生ボランティア

団体としての別の登録制度は残ることとなった（学友会との 2 重登録を認める形の登録制度となった）。

また学友会登録を推進したもうひとつの理由は各団体の学内における活動場所の確保である。川内北キャンパスのテニスコート裏にある仮設の学生寮を回収し、2018 年度中に学友会所属団体の活動場所として活用する見通しであり、学生ボランティア団体も活動場所を確保するために学友会に所属することとなった。これまで、学内の学生ボランティア団体には、いわゆる「部室」はなく、課外・ボランティア活動支援センターの学生スタッフ組織の SCRUM のみ、課外・ボランティア活動支援センターが業務を行っているボランティア活動支援室を利用できるという状態だった。しかし、様々なボランティア団体が活発に活動するようになり、その活動も東日本大震災後の一時的な活動ではなく、恒久的な活動になってきたため、活動拠点の確保が課題となったのだ。2018 年 3 月現在では、まだ各団体の活動拠点が確保された訳ではないが、学友会登録の学生ボランティア団体や国際交流系団体にも、将来的には部室が割り当てられる見通しになっている。

なお、国際交流系の団体登録にあたっては、学友会の団体登録書類が必ず日本語で、しかも手書きで作成しなくてはならない点などが、外国人学生には大きなハードルになることが指摘された。ここでは詳述しないが、国際交流系団体の登録にあたって、課外活動支援の国際化の必要性について様々な課題が明らかになった。

【「東北大学学生ボランティア支援に関する内規」の制定】

また、12 月には「東北大学学生ボランティア支援に関する内規」が制定された。これまで本学における学生ボランティア支援の根拠となっていた規則は「東北大学東日本大震災学生ボランティア支援に関する要項」であり、これは 2011 年 6 月に制定されたもので、東日本大震災に関するボランティア活動のみ支援することを目的とした規則であった。その後、2014 年度に課外・ボランティア活動支援センターが誕生し、そこでは必ずしも東日本大震災に関連しないボランティア活動も支援することとなったが、その根拠となる全学的な規則の整備はできていなかった。

その後、検討を重ねて、東日本大震災に限定しない形で、東北大学生のボランティア活動を支援する内規を 2017 年 12 月 21 日に制定することができ、その内規に基づいて課外・ボランティア活動支援センターを全学的なボランティア支援窓口として位置付けることができた。これについても詳細は「1-5. ボランティア登録団体の支援」を参照されたい。

【研修会の実施】

昨年度には、センターの学生スタッフ SCRUM メンバーへの研修としてセクシャルハラスメントへの対処や会議の進め方などについてのレクチャーを実施したが、今年度は 4 回のシリーズものとして、SCRUM 以外の「課外・ボランティア活動団体研修会」を企画して実施した。内容については、参加者からは好評であったため、2018 年度も継続して実施する予定である。参加者は平均して 30 名程であり、今後はより多くの参加者を得ることが課題である。詳しくは、「1-4. 課外・ボランティア活動研修会」を参照されたい。

【スクラムの育成と震災伝承部、人権共生部の取り組み】

課外・ボランティア活動支援センター内で、主にボランティア活動を推進するための学生スタッフ組織 SCRUM の育成は、センターの業務の上でも重要な部分である。スタッフ登録している学生は

2016 年度 3 月には 37 名だったが、2017 年 12 月には 66 名に増加した。これら 66 名の学生は、SCRUM の 3 部門にルーツを持つ 3 つの SCRUM 参加団体（岩手で活動する「ぽかぽか」、宮城で活動する「インクストーンズ」、福島で活動する「福興 youth」）の何れかに所属して自分自身もボランティア活動を行いながら、他のボランティア団体やボランティア活動を希望する学生個人のサポートを行う活動（ボランティアフェアの開催、ボランティアツアーやスタディツアーの企画）にも参加している。

また今年度から、国際部・人権共生部（通称：ひととも）・震災伝承部というテーマ毎に学習や研究を進めるグループが組織された（国際部は 2016 年度から活動している）。各部の活動については、「3. SCRUM 部での活動」を参照いただきたいが、人権共生部は、「ポスト震災」を見すえて地域内の様々な人権的課題について学ぶ部であり、また震災伝承部は「ポスト震災」世代への東日本大震災の経験の継承を役割とする部であり、どちらも震災からの時間の経過にともない取り組みの必要性が生じた活動だと言える。

【サービス・ラーニング科目の実施】

課外・ボランティア活動支援センターが開講した科目は 2016 年度は基礎ゼミ 1 科目、展開ゼミ 2 科目、総合科目 1 科目の合計 4 科目であった。2017 年度には大幅に増やし、基礎ゼミ 4 科目、展開ゼミ 3 科目、基幹科目 1 科目（1 セメ・2 セメともに開講で 2 コマ）の 8 科目 9 コマを開講した。すべて全学教育科目である。

「ポスト震災」をにらみ、震災以外のテーマを取り扱った基礎ゼミとして「仙台の地域課題を解決するアイデアを考えよう」「共生社会に向けたボランティア活動―人権・多様性・エンパワメント」の 2 科目を今年度新たに開講した。また震災伝承をテーマとした基礎ゼミ「震災をどう伝えるか――震災遺構の保存・活用と、震災の記憶の伝承の課題を学ぶ」、展開ゼミ「三陸復興の地域課題」「福島における人権保障と共生の課題―原発事故以降を生きる人々に寄り添う」を開講した。

さらに 2016 年度の総合科目を発展させ、基幹科目「社会の構造」のひとつとして「東日本大震災からみる現代日本社会」を開講した。

それぞれの授業内容などについては「1-6. 開講した授業」を参照されたい。

【国内外の大学・高校との交流、報告会・シンポジウム等への参加】

今年度も様々な国外・国内の大学や高校と交流を行った。特に SCRUM や高校生支援団体 Bridge の協力を得て、震災学習やリーダー研修等のために被災地を訪問する高校生との交流を、いままでよりもより充実した形で行えたと思う。また、2017 年 11 月に仙台で開催された「世界防災フォーラム」およびこのフォーラムと同時開催された「防災推進国民大会」の双方において、東北大学生ボランティアの活動報告を実施できたことには、大きな意義があった。

また東北大学教育学研究科主催（高度教養教育・学生支援機構が共催）のシンポジウム「東日本大震災後の子ども支援～高校生・大学生が見つめる被災地の現在～」で、東北大学のボランティア団体 6 つが活動報告を行わせていただく機会を得ることができた。シンポジウムでは被災地の高校生と大学生の交流も行うことができ、ボランティア活動を行っている東北大学生にとって、有意義な報告と学びの機会となった。詳しくは「1-7. 国内外の大学・高校との交流」「1-8. 報告会・シンポジウム等への参加」を参照されたい。

1-2. 事務連絡会議（運営会議）

事務連絡会議は、課外活動・ボランティア活動に関連する教職員が月に１回定例で行う情報交換の場であり、実質的に課外・ボランティア活動支援センターの方針はここで相談して決定している。現在は、課外・ボランティア活動支援センター及びグローバルラーニングセンターの教員、学友会体育部・文化部の教員、有識者教員（西出優子先生）、学生支援課長、支援企画係長、活動支援係長、学生スタッフ SCRUM 代表が参加している。

下表でもわかるとおり、本年度は支援室から課外・ボランティア活動支援センターへの業務継受と学生ボランティア団体の登録制度の変更に伴う議論に大きな時間を費やし、センターの過渡的状況を示している。

【表 1】事務連絡会議一覧（2017 年 3 月~2018 年 3 月）

回	日程	主な議題
21	3/15	学生ボランティア活動支援委員会委員について 課外・ボランティア活動支援センターミーティングについて 学生団体の登録について 新入生歓迎行事について
22	4/14	２０１７年度予算の執行計画について ドイツからの寄附金について ベイラー大学の受け入れについて
23	5/25	学生ボランティア団体・国際交流学生団体の学友会登録について あしながインターンシップ生の受け入れについて
24	6/22	学生ボランティア団体・国際交流学生団体の学友会登録について
25	7/21	学生ボランティア団体・国際交流学生団体の学友会登録について 東北大学東日本大震災学生ボランティア支援室の廃止について 課外・ボランティア活動団体合同研修会の実施について
26	8/28	学生ボランティア団体・国際交流学生団体の学友会登録について 課外・ボランティア研修会の実施について
27	9/13	学生ボランティア団体・国際交流学生団体の学友会登録について 東北大学東日本大震災学生ボランティア支援室の廃止について Gakuvo(公益財団法人日本財団学生ボランティアセンター)との協定について
28	10/18	東日本大震災学生ボランティア支援室の廃止と「東北大学学生ボランティア支援に関する内規（案）」について Gakuvo(公益財団法人日本財団学生ボランティアセンター)との協定について
29	11/22	東日本大震災学生ボランティア支援室の廃止と「東北大学学生ボランティア支援に関する内規（案）」について Gakuvo(公益財団法人日本財団学生ボランティアセンター)との協定について 課外・ボランティア活動団体合同研修会の実施について ボランティア活動支援室の使用時間延長の要望について 新サークル棟の部室配分について

30	12/20	東日本大震災学生ボランティア支援室の廃止と「東北大学学生ボランティア支援に関する内規（案)」について Gakuvo(公益財団法人日本財団学生ボランティアセンター)との協定について 平成３０年度の授業実施について 平成２９年度発行物について
31	1/17	新ボランティア支援内規に基づく支援委員会開催について Gakuvo(公益財団法人日本財団学生ボランティアセンター)との協定について 来年度の授業実施について 来年度のセンターの体制について
32	2/20	新ボランティア支援内規に基づく支援委員会開催について Gakuvo 協定事業実施計画書・予算書（案）について 来年度のセンターの体制よ予算について 来年度の実施授業について 支援の基準と団体登録、活動実施届と報告書について
33	3/20	来年度のセンター体制について 学生ボランティア活動支援委員会およびボランティア団体登録、活動実施届等 Gakuvo との協定事業 新入生歓迎行事

1-3. 課外活動団体合同研修会および花輪理事への要望

今年度も 12 月に課外活動団体のリーダー層を対象とした第 3 回課外活動団体合同研修会[4]を開催した。そこで出された要望と、ボランティア団体がとりまとめた要望を【資料 1】にまとめて、花輪公雄理事（教育・学生支援・教育国際交流担当）との意見交換会を行った。花輪理事からは、大学祭実行委員会の部室の確保やボランティア団体の情報の同窓会誌への広報等に関して前向きな回答があった。なお、学生からは年に 1 回ではなく、定期的にこうした研修会を開催してほしい旨、要望があった。

【表 2】2017 年度に行った課外活動団体合同研修会、理事との意見交換会

日時	内容	参加団体	参加人数	備考
12/18	課外活動団体合同研修会	SCRUM、生協学生委員会（おおわん)、大学祭実行委員会、学友会文化部常任委員会	13 人	センターから小田中直樹、永富良一、藤室玲治、江口怜が参加した。
12/21	花輪公雄理事との意見交換会	SCRUM、生協学生委員会（おおわん)、大学祭実行委員会、学友会文化部常任委員会	6 人	センターから藤室玲治、江口怜が参加した。

合同研修会の当日プログラムは、具体的には以下のとおりであった。

[4] 2015 年 2 月 6 日に第 1 回を、2016 年 11 月 17 日に第 2 回を開催。

【表 3】課外活動団体合同研修会の概要

日時	2017 年 12 月 18 日（月）18:00～20:30
場所	川北合同研究棟・101CAHE ラウンジ
主催	東北大学課外・ボランティア活動支援センター
プログラム	・18:00～　挨拶　　課外・ボランティア活動支援センター長　小田中直樹教授 ・18:10～19:10　各団体紹介（10 分報告＋5 分質疑×4 団体） ①ボランティア支援学生スタッフ SCRUM、②生協学生委員会（おおわん）、③大学祭実行委員会、④学友会文化部 ・19:10～19:20　休憩 ・19:20～20:30　ワークショップ「各団体の失敗事例・悩みとその解決方法」 （ファシリテーター：課外・ボランティア活動支援センター　藤室玲治）

【写真】課外活動団体合同研修会の様子

【資料 1】花輪理事に提出した要望書

2017 年 12 月 21 日

理事（教育・学生支援・教育国際交流担当）
花輪公雄　様

課外・ボランティア活動支援センター
センター長　小田中直樹

課外・ボランティア活動に関する学生団体からの要望

このたびボランティア系団体（SCRUM、その他ボランティア登録団体）および課外活動団体（学友会文化部常任委員会、大学生協学生委員会、大学祭実行委員会）との意見交換をおこない、課外・ボランティア活動に関わる学生団体からの要望を聴取いたしました。ご検討いただきたく、ここに取りまとめてご高覧に供する次第です。

参考：意見交換の対象団体と日時
2017 年 12 月 15 日　SCRUM、HARU、Bridge

2017年12月18日　SCRUM、学友会文化部常任委員会、大学生協学生委員会、大学祭実行委員会

＜課外活動団体全般＞

1. 課外活動に利用できるスペースを改善・拡充してほしい。

（具体例）

①大学祭実行委員会事務局が利用しているプレハブの事務所には冷暖房がなく、収容可能人員も少なく、劣悪な環境である。また大学祭に関する備品を収納している倉庫の取り壊しが検討されていると聞いているが、収納スペースがなければ大学祭の開催が不可能であるため、代替措置をとってほしい。

②新サークル棟の工事が行われる期間、敷地内の軒下で活動していた音楽系サークル等の活動場所がなくなってしまうため、代替措置をとってほしい。

③課外活動団体が自由に会議等で使用できる公共のワーキングスペースを設けてほしい。

④音楽やダンスなどの練習を個人単位で自由に行えるスペースの設置が考えられないか。

2. サポーター・コーディネーター（相談役）となる教員を配置してほしい。

（理由・背景）

・学生だけでは解決できない問題に対して、アドバイスや補助をしてくれる教員が欲しい。アドバイスを受けることで、学生の自主的・主体的活動が促進される。例えば、ボランティア、音楽、演芸、個人技・芸術などの各分野に数名ずつ、相談役の教員がいるとありがたい。

3. 大学の担当部署の組織図が分かりにくいため、大学と相談したい事柄についてワンストップで対応してくれる窓口がほしい。

（理由・背景）

・課外活動に関連して学生が大学側に連絡を取るとき、適当な窓口が不明瞭で、連絡が取りづらい。また、各イベント等を開催する際に、その担当窓口・担当者を明示してほしい。担当者がわからないため、集めた意見をどこに届ければいいのかがわからない。

4. 大学主催行事で学生を中心に取り組んでいるイベント（大学祭等）について、大学側の見解や支援の範囲を明確にしてほしい。

（理由・背景）

・東北大学祭は、大学の公式行事であるが、実質的に学生で構成される事務局が企画・運営を行っている。しかし、大学側がどこまで支援をしてくれるのかが不明瞭である場合が多い。東北大学として大学祭の位置づけや学生への支援のあり方を明確にしてほしい。

5. 課外活動に関する情報発信の手段を提供してほしい。課外活動について学内に周知する機会を設けてほしい。

（具体例）

①大学が使える情報発信ツールを学生も利用できるようにする。

②学生の課外活動の成果を大学全体（教職員・学生）に知ってもらえる機会を設ける。

（理由・背景）

・学生団体が行うことのできる広報・情報発信のツールでは周知の範囲に限りがあり、準備資金も必要である。大学祭等の公式行事でさえ、学生の間で共有されておらず、特に川内キャンパス以外では知られていない。
・学生の行う課外活動の実態や意義について、学内で理解を得られていないと感じている。まずは理解を得る機会を設けることで、活動に対する援助が広がるのではないか。

6. 警務員や学生支援課窓口における対応を改善してほしい。
（理由・背景）
・警務員室では、学生対応がおろそかになっている場合がある。
・学生支援課の活動支援係の窓口で、団体登録を拒まれたり、説明が一貫していなかったりする場合がある。

7. 課外活動、ボランティア活動にかかわる書類を簡素化してほしい。

＜ボランティア団体＞
8. ボランティア募集について、大学から協力を得たい。
（具体例）
①入学式や新入生対象のガイダンスの際に、ボランティアの紹介や呼びかけを行う。また、入学時の封筒など大学からの公式書類にボランティア情報も含める。
②学務情報システムの掲示板にボランティア情報を掲載できるようにする。
③学内の電子掲示板でボランティア情報の広報をできるようにする。
④TGL（Tohoku University Global Leader Program）で被災地への視察や被災地におけるボランティア活動等への参加を必須にする。
（理由・背景）
・震災から時間が経過した現在も、地域からのニーズによって活動内容は増加している。それに対して、ボランティアに参加する学生数が少なく、十分にニーズに応えられていないため。大学は地域の理解・協力を得て成り立っているため、地域のニーズに応える必要があるのではないか。
・東北大学はグローバル・リーダーの育成に力を入れているが、世界に出ていくときに、東日本大震災のことや現在の復興状況について知っていることは不可欠であり、国際的に活躍できるリーダーシップを育成する上でもボランティア活動は重要な意味をもつ。

9. 学生が利用できるコピー機を充実させてほしい。
（具体例）
①カラーコピー機を設置し、無料ないし低額で利用させてほしい（RISO のカラーコピー機の設置等）。
②現在課外活動で使用できるコピー機の、1 回あたりの利用枚数の上限を増やしてほしい。
（理由・背景）
・ボランティア活動の場合、ボランティアの対象者（地域住民や高校生等）に効果的にアピールする広報物を作成・配布する必要があるため、カラーコピーの利用が不可欠である。

10. 震災や地域貢献、ボランティア関係を専門とする教員や、授業のデータベースを作ってほしい。

（具体例）

①電子上の登録システムとして、教員に登録を呼びかける。

（理由・背景）

・ボランティア活動で地域との関係をつくるときに、既にその地域のことに詳しい研究者に助言をもらったり、情報交換をおこなったりできると、よりよい活動ができる。

・被災地に関連して、どこで、だれが、何をしているか（授業含め）の「見える化」がされていない。地域の側から見ると、「東北大学」として一緒に見えるにも関わらず、連携がなされていない。

・研究者にとっても、被災地や地域貢献に関心のある学生ボランティアとつながることにはメリットがあるのではないか。

・学内で情報交換ができれば、学外の交流会やイベント等に参加するよりも低コストである。

11. ボランティア活動に利用できる車両等を充実してほしい。

（具体例））

①キャンパス・バスをボランティア活動に利用できるようにする。

②荷物を多く運搬できるハイエースバンを公用車として設置してほしい。

③課外活動に学生が利用できる車両が欲しい。

④学生がレンタカーや自家用車を使用する際に利用できる駐車スペースを確保してほしい。

⑤レンタカーの法人カードを東北大学名義で作成することで、低額でレンタカーを借りられる仕組みを作ってほしい。

（理由・背景）

・ボランティア活動では、活動の性格上運搬する荷物が多く、交通手段の確保が難しい。また、助成金が減少し、交通費の出費で困ることが多い。交通手段の確保ができないために、地域のニーズに応える活動に制限がかかってしまうことも多い。

12. 交通費の補助を出してほしい。

（具体例）

①交通費の補助制度を設ける。

②東北大学 OB・OG に寄付を募ることのできるような紹介の仕組みを作ってほしい。

（理由・背景）

・ボランティア活動に利用できる大学の資金や学外の助成金が減少しており、活動の継続が困難である。特に県外での活動が難しいが、大学のない・少ない地域に通うことに意義を感じている。

1-4. 課外・ボランティア活動研修会

本年度から、SCRUM やボランティア登録団体の研修として、課外・ボランティア活動研修会を開始し、前期に 2 回、後期に 2 回の計 4 回開催した。ボランティア登録団体からは 1 名以上の参加を求め、さらに課外活動団体層にもチラシを配布して広報した。実施スケジュールと概要は以下の通りである。

【表 4】課外・ボランティア活動の実施スケジュールと概要

回数・日時	タイトル	講師	参加人数	概要
第 1 回 5/30	安全・安心にボランティア活動をするために	藤室玲治(課外・ボランティア活動支援センター)	43 人	ボランティア活動を安全・安心に行うための基礎知識のガイダンス、ヒヤリ・ハット事例のワーク
第 2 回 6/20	課外活動におけるセクハラ・デート DV 防止のために	八幡悦子（NPO 法人ハーティ仙台代表）	31 人	地域活動や団体内でのセクハラ等を防止するための基礎知識のガイダンス
第 3 回 10/17	課外活動や地域支援のためのメンタルヘルス講座 ※一般社団法人ワカツクと共催	高橋由佳（認定 NPO 法人 Switch 理事長）	26 人	課外活動を行う際の自身のメンタルヘルスを維持・向上させるための基礎知識のガイダンス
第 4 回 12/5	目的によって会議のやり方は変わる！～課外・ボランティア活動のためのファシリテーション入門講座～	藤室玲治(課外・ボランティア活動支援センター)	24 人	団体内で会議をうまく進めるための基礎知識のガイダンス、グループワーク

【第 1 回　安全・安心にボランティア活動をするために】

第 1 回目は、課外・ボランティア活動支援センターの藤室玲治特任准教授が講師となり、東北大学のボランティア活動に関するルールや保険の仕組み、交通事故やセクハラ等の事件・事故を防ぐための方法、「正常性バイアス」「ヒヤリ・ハット事例」の概念や意義等について説明した。その後、様々な団体の学生でグループを作り、ヒヤリ・ハット事例に関して情報共有と改善策を考えるワークを行った。学生の感想としては、以下のようなものがあった。

- 危機管理には、まず自分が当事者でもあるという意識も大切であると感じた。
- 先輩方から、実際にあった事例や困っていることへのアドバイスなども聞くことができてよかった。
- 今までヒヤリ・ハットの経験をしたことがあったが、笑い話ですませたり、すぐに忘れることが多かったが、共有して、解決策を考えることで、事故を減らせると思うので、ヒヤリ・ハットに対しての考え方を変えようと思う。

また、グループワークで挙がったボランティア活動中の「ヒヤリ・ハット事例」としては、【表 5】の事例が実際に挙がった。きちんと対策すべきものもあれば、解釈自体が妥当か検討の余地があるも

のもあるが、いずれにせよこうした事例を出し合って、きちんと話し合う機会が重要であることが浮かび上がってきた。

【表 5】タイプ別にみた、ボランティア活動中のヒヤリ・ハット事例

タイプ	内容
宗教・セクト	・ 宗教的な話を一般参加の学生が仮設で話していた ・ ボランティアフェアで、セクト系学生が話を聞きにきた ・ 宗教関係の人がお茶会の参加者名簿を狙っていた
交通事故	・ 寝不足での運転 ・ 子どもが道路に飛び出して、車にぶつかりかける ・ 学生が運転手として活動先に行くことに慣れない ・ 運転速度が速すぎる ・ 運転手以外、全員眠っている
住民の事故	・ 料理イベントでの食中毒の危険。ウェットティッシュやゴム手袋の使用を促していたが、料理へ夢中になり、直接食べ物を手でさわる住民の方がいた。 ・ 足湯イベント。たらいにお湯だけが入っている状態で、住民の方が足を入れてしまった。まだ入れないようにと一言入れるべきだった（ヤケドの危険） ・ 子どもに軽くぶつかったらよろけた ・ 仮設団地で子ども達と遊んでいたときに、自転車に乗っていた子が転んでしまった ・ 小学生の男の子が興味本位でお湯のはったバケツに手を入れそうになっていたので、慌てて注意した
住民とのトラブル	・ 住宅訪問で怒鳴られたこと ・ 洗濯物の近くで、草刈り ・ 足湯・手芸カフェで、子どもたちを排斥しようとする雰囲気がお年寄りの中にあった。結局（現時点では）親同伴ではない子どもはカフェに来られないことになった。 ・ ボランティア先の人の指示と違うことをしてしまったこと ・ 津波の被害を受けた学校に「慰霊碑のまえでは写真を撮らないで」という看板があったのに、写真を撮っている人がいた
住民→学生へのハラスメント	・ 会長が女子学生に抱きついていた ・ 男性住民が、女子学生の手を握っているのを見た ・ 腕をくまれた ・ 男性住民に、連絡先を聞かれたり、交際してほしいというようなことを言われた。家に遊びに来るようにも言われたが、先生や他の学生に相談して最終的には断った。 ・ 女子メンバーが中年男性に「部屋に来ないか」と誘われて困っていた ・ 住民の方に金銭的要求をされた ・ おせっかいな住民から、頼み事や連絡が頻繁にくる

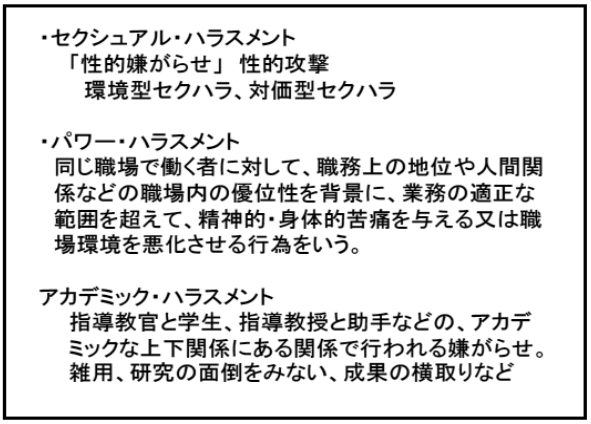
	・　宴会の席で、酔っぱらった住民と楽しく会話をしていると、徐々に女子学生との距離が近くなっていた ・　お酒の入った住民から、若い住民を指さして「こいつ彼女いないんだよね。どう？」と言われた。その後下ネタも言われた。 ・　おばちゃん達が下ネタで盛り上がっていた ・　子どもにメンバーが「くさい、デブ」と言われていた ・　中学生がメンバーにおぶさっていたとき
学生のケガ・体調不良	・　畑をくわで耕しているとき、くわが他のひとにあたりそうになった ・　タバコを吸っている人（ぜん息なので） ・　山車の作成中に転びそうになった ・　草むしりをしていたら、草で手をきった ・　仮設テントをたてる際に、手を挟んだ ・　祭りの日、気温が高く、水分補給のタイミングがなくて体力的にきつかった ・　体調。周りが頑張っているから、自分もやらなけば→悪化する ・　夏祭りのお手伝いをしたとき、すごく日に焼けて数日間大変だった ・　夏祭りイベント中に、体調不良で倒れた

【第２回　課外活動におけるセクハラ・デート DV 防止のために】

第２回目は、DV・性暴力被害者支援に取り組み、人権教育の観点から性教育の講演活動に取り組まれている八幡悦子さんをお招きしてお話を伺った。実際、ボランティア活動中にセクハラ被害にあう例があり、また課外活動の中でセクハラはじめ様々なハラスメントが生じやすい状況があり、ハラスメントを起さない／身を守るための知識と技法を身につけることを狙いとしていた。学生からは以下のような感想があり、非常に好評であった。

・　今まで、性・性被害について触れることをタブーだと思っていたのですが、今回のお話を聞いてタブーではないと分かりました。嫌なことをきかれたら、答えなくて良いことが分かって安心しました。

・　今日の講演会の内容はみんなが聞くべき内容だと思ったし、学校とかでも教育する必要があると感じました。また、いやなことを断るときには愛想笑いもしない方がいいというのはとても勉強になりました。



【写真】第１回研修会でのグループワークの様子（左）、第２回研修会のスライドの一部（右）

【第３回　課外活動や地域支援のためのメンタルヘルス講座】

第３回は、仕事や生活の悩みを抱える若者の伴奏型支援を行う認定 NPO 法人 Switch 理事長の高橋由佳さんをお招きして、特に課外活動やボランティア活動を行う上で大切なメンタルヘルスの考え方をご講演いただいた。これは、一般社団法人ワカツクからのご提案とご協力を受けてご紹介いただいたものであり、資金面でのご援助も頂いた。講演は、「ストレス」とは何かという説明から始まり、精神疾患（特にうつ病）の患者数は非常に多く身近な問題であること、認知行動療法を通した問題解決の方法等をお話頂いたのち、個々にセルフチェックを行って自分の考え方のくせを自覚するワークを行った。学生からは、ボランティア活動中だけでなく、普段の生活でも生かせる知識が学べたとの感想が寄せられた。

- 自分のストレス反応の傾向や考え方のくせを知ることができて良かった。感情も大事だが、一度切り離して事実を見ることが心を平穏に保つ秘けつなんだなと思った。
- 傾聴の際に評価者にならないことや、「なぜ」「どうして」を使わないこと、共感を大切にすること、を大切にしてこれからボランティア等をしていきたい。

【第４回　目的によって会議のやり方は変わる！～課外・ボランティア活動のためのファシリテーション入門講座」】

第４回は、藤室玲治特任准教授が講師となり、課外活動やボランティア活動のサークルの中で会議を行う際に大切となる考え方や、進行役であるファシリテーターの意義と方法について講義し、実際にファシリテーターを体験してみるグループワークを行った。特に、会議には①報告型、②アイディア出し型、③意思決定型、④対話型があること、会議ごとに目的を自覚して方法を使い分ける必要があることが説明された。学生の感想からは、ファシリテーターの重要性と同時に、参加者も積極的に会議に参加することが大切であることに気付いたとの声が挙がった。

- 会議はファシリテーターだけではなく参加者全員が協力的でないといけないと思った。人任せにしてた部分もあったなと反省した。
- 会議の目的を明確にするということが大切だなと思いました。目的が明確でないと、進め方も定まらないし、参加者の中で温度差が出てきてしまうと思います。

【写真】第３回研修会でお話される高橋由佳さん（左）、第４回研修会のグループワーク（右）

1-5. ボランティア登録団体の支援

今年度も、ボランティア登録団体に対して、井戸端会議での情報交換や課外・ボランティア活動研修会の開催、助成金情報の提供、倉庫の貸し出し等、様々な支援を行った。

ただし、本年度はボランティア団体の登録制度のあり方について、東北大学としての学生ボランティア支援の枠組みの検討と関わって、紆余曲折があった。結果的には、12 月に新たな内規が制定され、ボランティア登録制度も残ることになった。この経緯について、詳しく記しておきたい。

（1）2017 年度当初の状況

これまで、2011 年 6 月に発足した東日本大震災学生ボランティア支援室と 2014 年 4 月に発足した高度教養教育・学生支援機構（以下、機構）の課外・ボランティア活動支援センターが並行して業務を行っており、組織上の整理が課題となっていた。そこで、2016 年度中に各種打合せを行い、2017 年 3 月の高度教養教育・学生支援機構教授会議において、平成 23 年 6 月 7 日に当時の教育・情報システム担当理事裁定で定めた「東北大学東日本大震災学生ボランティア支援に関する要項」（以下、要項）を廃止し、新たな内規を高度教養教育・学生支援機構長裁定で制定する見込みであり、それに伴ってボランティア団体登録制度も「東日本大震災」に限定しない形で新たに発足する予定であった。しかし、全学の学生ボランティア活動に関して規定する規則を機構の内規として制定できるのかという点で教育･学生支援部内で議論になり､新たな内規の制定はいったんストップすることとなった。

課外・ボランティア活動支援センター及び学生支援課では、上記の動きを見込んで、新しい内規のもとでのボランティア登録の申請受付を 2017 年 2 月頃から行っており、【表 6】の団体が登録申請を行っていた。従来、要項に基づいて開催される運営委員会でボランティア登録団体の審査を行っており、2017 年も 6 月～7 月にかけての開催を検討していた。

【表 6】2017 年 4 月段階でボランティア団体登録申請を行った団体

団体名	代表者名	顧問教員名
国際ボランティア団体 AsOne	高野紗季	森田直子 先生
献血推進サークル	阿部夏子	吉田浩 先生
こども☆ひかりプロジェクト	佐藤萌	高橋満 先生
地域復興プロジェクト“HARU”	小濱奈月	村松淳司 先生
基礎ゼミ・展開ゼミ継続サークル“たなぼた”	武田萌	富田真紀 先生
東北大学インクストーンズ	小暮李成	島田明夫 先生
学生による地域支援団体みまもり隊	錦織彩乃	池田実 先生
東北大学福興 youth	山﨑英彦	松本行真 先生
震災復興・地域支援サークル　ReRoots	村上敦哉	片岡龍 先生

※団体名・代表者名は順不同・敬称略

（2）ボランティア団体の学友会統合案の浮上

しかし、5 月の段階で、ボランティア登録団体を、本学の学生・教職員で構成する学友会の登録団体に一本化する案が浮上した。背景としては、川内北キャンパスのテニスコート裏に震災後作られた応急仮設のプレハブをサークル棟として用いる案が出ており、その配分権は学友会にあるとされているため、ボランティア登録団体の長年の課題であった部室問題を解決する上でも、学友会登録を行

うメリットが大きいことがあった。また、様々なサークルを学友会に一本化していく方向性も一部議論されていたことも背景にあった。

こうした事情を背景にして、ボランティア登録団体及びグローバルラーニングセンターが支援する国際交流系団体に対して説明を行い、学友会登録の意向を確認することとなった。ボランティア登録団体に対しては、6 月 8 日にメールで団体の代表及び顧問宛にメールで「学生ボランティア団体の学友会登録に関する意向確認のお願い」及び意向確認用紙を送付し、提出を願った。この時点では、全団体が学友会登録を希望した場合は、ボランティア団体を別に登録する制度を廃止し、学友会に統合することも想定していた。また、学友会が登録団体として 3 年間の実績のある団体を「準加盟団体」としていることから、ボランティア登録団体もしくは国際交流団体として 3 年以上の実績のある団体に対しては、特例として準加盟団体として最初から登録できるような措置をとることを予定していた。（下記と同様の文書を国際交流団体にもグローバルラーニングセンターを通じて配布した）

【資料 2】

平成 29 年 6 月 8 日

東日本大震災ボランティア支援室
登録学生ボランティア団体 各位

課外・ボランティア活動支援センター長
東日本大震災ボランティア支援室長
小田中直樹

学生ボランティア団体の学友会登録に関する意向確認について

これまで学生ボランティア団体については、東日本大震災学生ボランティア支援室で登録を受け、大学として公認してきましたが、この度、東日本学生ボランティア支援室が解散することとなりました。

登録学生ボランティア団体についても、登録先がなくなるため、対応を検討しており、案の一つとして学友会への登録を考えています。学友会は、大学の学問以外の文化、体育等に関する自発的な活動のための全学的な組織で、本学の教職員・学生の全員で構成され、会員の会費により、その運営が行われています。

東日本学生ボランティア支援室同様のサポートや金銭的補助、活動場所の確保等を行うことは難しくなると思いますが、それでも大学の公認団体として活動したいと考える団体は、別紙資料等も参考に、別紙「学友会登録に関する意向につきまして」に記入の上、6 月 15 日（木）までに、課外・ボランティア活動支援センター（volu-s@grp.tohoku.ac.jp）までメールで提出下さい。

【問い合わせ先省略】

学友会への登録にあたって（参考資料）　※6月9日小田中先生・確認訂正済

1. 学友会について

学友会の組織等について、詳しくは下記 URL を参照下さい。

https://www.tohoku.ac.jp/japanese/studentinfo/studentlife/02/studentlife0201/

また登録後の諸手続きについては、別紙「新たに学友会に加わった学生団体の皆さんへ」をご参照下さい。なお、登録の時期については、各団体の意向を確認したあとで検討いたします。

2. 登録組織について

登録を希望する国際交流学生団体については、学友会文化部の登録団体として取り扱うよう依頼する予定です。学友会の規則では、まず「登録団体」となり、その後 3 年間続けて団体の登録継続を行った団体は「準加盟団体」への昇格を申請できます。「登録団体」に対しては配分金等の予算的措置はありませんが、「準加盟団体」になると、数千円程度ですが配分金が配分されます。なお、配分金の受領に関しては、金銭の授受がからむことから、説明会への出席、使用使途の限定、使用前・使用後の諸手続き、使途に不備があった場合の返金などの義務が生じます。

なお、国際活動・ボランティア活動に携わる学生団体としてすでに 3 年間以上の活動実績がある団体については、特例措置として、その期間を学友会での登録期間とみなし、「準加盟団体」として登録するよう学友会に依頼する予定です（依頼が認められるか否かは、現時点では不明です）。

3. 部室の配分について

現在、川内北キャンパスの北側にある元・応急学生寄宿舎を、学友会登録団体の部室として整備し、平成 30 年度までには使用できるようにする予定です。配分は、学友会でおこないます。これまで部室のなかった団体にも配分される可能性がありますが、部室のない学友会登録団体は学内に多々あるため、全ての団体に配分されるとは限りません。

4. その他

学友会では、現在、他大学の学生と一緒に活動している団体（いわゆるインカレサークル）　は認めていません。インカレサークルについては登録を受け付けていませんので、その点ご留意ください。

これらの文書を通して意向確認を行った結果、ボランティア登録団体では「希望しません」「検討中です」の団体が複数見られ、学友会登録に伴う変更やデメリットについて懸念を持っている実態が窺えた[5]。そのため、6 月 22 日にボランティア登録団体に対する小田中センター長からの説明会を開

[5] ここに収録した【資料 2】後半に収録されている「学友会への登録にあたって（参考資料）」については、6 月 8 日付で、原案を課外・ボランティア活動支援センターの藤室特任准教授が作成し、活動支援係の職員がそれを訂正した別バージョンが存在する。その別バージョンでは、例えば部室の分配について「これまで部室のなかった団体にも配分される可能性がありますが、学友会に先に登録していた団体から優先して配分することとなりますので、登録しても、必ず配分されるとは限りません。（学生寮改修後の部室は、ほぼすべて既存の学友会団体で埋まる予定です。）」と、読みようによっては分配の可能性がほとんどないと読めるような表現になっていた。また「学友会登録のメリットは多くはなく、半面、提出書類等の手続きが多くあるため、毎年登録をやめる団体があることも事実です。

催し、直接学生に対して懸念される点などについて説明を行った。その後、6 月 26 日に説明会で行った説明をまとめた文書を各ボランティア登録団体に送付し、再度の意向確認を行った。その際に配布した文書が【資料 3】である。

【資料 3】

ボランティア登録団体　各位

2017 年 6 月 26 日

ボランティア登録団体の学友会登録に関する補足

課外・ボランティア活動支援センター
センター長　小田中 直樹

この度は、学友会登録に関する意向表明ありがとうございました。今回提出のあった意向を基に学生支援担当理事の花輪公雄先生と相談の上、今後の対応を検討する予定です。
なお、意向表明に際して、幾つか質問や要望が出されましたので、下記の通り回答いたします。以下の回答を受けて、学友会登録の意向を変更する場合は、6 月 29 日（木）までに再度意向表明の確認用紙をご提出ください。提出先は volu-s@grp.tohoku.ac.jp です。よろしくお願い致します。

1. 準加盟団体と登録団体の違いについて

学友会に加盟する場合、原則として最初はすべての団体が「登録団体」となります。その際、体育部・文化部・報道部・生活部のいずれか（現時点では、通常は文化部と体育部のどちらか）に所属します。そして、団体の更新を継続して 3 年間行った場合「準加盟団体」への登録を申請することができ　学友会の運営委員会で許可を得て「準加盟団体」となると若干の予算措置を受けることができます。その後は、一定の準加盟団体としての活動を行った後、学友会内部（文化部・体育部については常任委員会）での審査等を経ると、「正規加盟団体」となることができます。

ちなみに、学友会に登録する場合、ボランティア登録団体は文化部所属となることが見込まれています。将来的に、「ボランティア部」といった独立の部ができる可能性がない訳ではありませんが、そのためには学友会規則の改正が必要なため、登録後に要望が出れば学友会内部で議論することになります。

先日もお伝えした通り、今回は特例として、ボランティア登録団体としての登録期間を学友会登録期間と見なし、3 年以上の登録期間を経ている団体については、最初から「準加盟団体」扱いで学友会に加盟することができるよう、申し入れを行う予定です。

それでも、大学の登録団体として活動したいという強い意志がある団体が登録を継続しています。」との記述もあった。翌日 9 日に、小田中センター長が該当の「参考資料」を訂正し、【資料 2】に収録されている通りの資料として、各団体に訂正して配布したが、説明が二転三転した印象はぬぐえず、そのために学友会登録に慎重な立場を取る団体もあったのではないかと思われる。

2. 学友会登録に際しての広報面での変化

広報面に関しては、これまで通り課外・ボランティア活動支援センターとしてのボランティア活動の広報を実施する予定です。さらに、学友会の広報紙に掲載されるなど、学友会を経由した広報の対象となる可能性もあります。

3. 学友会の登録に関わらず、ボランティア登録団体も大学公認団体として部室の配分に参加する権利はないのか

2012 年頃、それまで曖昧であった部室の管理・配分の権利について、学友会がこの権利を有することが全学で決められました。そのため、ボランティア登録団体として学友会に対して部室配分の要望を出すことは可能であり、また学友会が同意して部室が配分される可能性はありますが、配分を受ける「権利」はありません。

4. 応急学生寄宿舎改修後の部室配分の見込について

震災後に建設したテニスコート裏の応急学生寄宿舎を部室として改装した後、64 の部室と 8 の倉庫になることが予定されています。現在、学友会の登録団体は 171 あり、概ね 100 団体が部室を有しています。そのため、今回ボランティア登録団体及び国際交流学生団体で約 10 団体が学友会に登録したとすると、約 80 団体で 64 の新部室を分配する必要があります。

なお、部室の配分方法については、現時点では決まっていません。また、倉庫の配分についても詳細は未定です。

5. 東日本大震災学生ボランティア支援室（以下、支援室）の廃止に伴い、大学としてボランティア団体への支援の枠組みはどうなるのか

基本的に、支援室の廃止に伴って、その担当業務は高度教養教育・学生支援機構に設置された業務センターの一つである「課外・ボランティア活動支援センター」が継受することになっており、事実上本年度からはそのように対応しています。業務分担を大学内で調整する必要はありますが、基本的な運用はこれまで通り、センター教員の藤室、江口、事務職員の水口が行い、井戸端会議の開催等も行う予定です。ただし、これまで支援室が行っていたボランティア団体登録の枠組みをどうするか、活動実施届の提出先をどうするのかといった事務的な手続きなどについては、これから検討する予定です。

6. ボランティア登録団体の倉庫利用について

ボランティア団体が備品等の管理のために収納スペースが必要であることは理解しています。現在利用している教育・学生総合支援センター1 階の倉庫については、今後（川内北キャンパスの整備計画などに伴うなど）様々な事情で使用が困難になる可能性がないとは断言できませんが、学友会に登録するかしないかという決定に伴って使用を禁止することはありません。

7. 他大学の学生と一緒に活動している団体（いわゆるインカレサークル）の学友会登録について

この点は、6 月 8 日付の差し替え版文書「学生ボランティア団体の学友会登録に関する意向確認について」及びセンターの藤室よりメールで補足した通りであり、学友会ではいわゆるインカレサークルの登録は認めていません。ただし、この取り扱いはこれまでのボランティア団体登録も同

様であり、学友会登録に伴って取り扱いを変更する訳ではありません。なお、本学の学生だけで構成される学友会登録団体が、活動の中で他大学の学生と交流等を行うことに関しては問題ありません。

7. 支援室のスタッフチーム SCRUM の位置づけと権限について

SCRUM はこれまで支援室のスタッフという位置づけでしたが、本年度 4 月より課外・ボランティア活動支援センターのスタッフという位置づけとなりました。本来大学が行うべき業務の遂行に協力してもらっているという基本的な性格を念頭に置き、ボランティア活動支援室の利用を始め、従来の位置づけと権限に変更を加える予定はありません。なお、場合によっては、課外・ボランティア活動支援センターの内規を制定し、SCRUM の位置づけを明記することも検討します。

以上

この後の再度の意向確認の結果、ボランティア登録団体では 2 団体が「希望しません」と回答したが、その他の団体は「希望します」と回答した。そこで、希望しなかった団体の扱いはいったん留保し、希望した団体に関しては学友会登録を行う手続きに入った。まず、花輪理事に小田中センター長名義で【資料 4】を提出し、学友会登録に関しての了承を得た。

【資料 4】

2017 年 7 月 5 日

学生支援担当理事
花輪　公雄　殿

課外・ボランティア活動支援センター
センター長　小田中　直樹

学生ボランティア団体・学生国際交流団体の学友会登録について

(1)要望

ボランティア・国際交流を主目的として活動し、学友会への登録を希望する学生団体のうち、これまで 3 年以上、高度教養教育機構グローバルラーニングセンターおよび同課外・ボランティア活動支援センター（および両者の前身組織）の指導のもとに活動してきたものについては、準加盟団体として登録するという特例措置が認められるよう、ご理解とご協力を頂きたく思います。

(2)上記要望に関連する事務的な要望：活動実施にあたっての実施届提出や指導の窓口

学友会所属団体は、活動を実施するにあたっては、実施届を学生支援課活動支援係に提出し、その指導を受けます。

ただし、ボランティア団体および国際交流団体については、その活動内容の特殊性に鑑みて、指導はグローバルラーニングセンターおよび同課外・ボランティア活動支援センターで行うことにしたく思います。

また、このうちボランティア団体については、活動実施届などは、これまでどおり課外・ボランティア活動支援センターの教職員に提出し、そこで確認（必要であれば各学生団体に計画の訂正・再提出などを指導）のうえ、決裁に回すものとしたく思います。

(3)要望の背景

本学では、学生団体は学友会に登録することを基本的な方針としています。したがって、学友会に登録された団体に対して、いわば大学の「正規の」学生団体というステイタスを与えられていています。

ただし、この方針には、いくつかの例外が存在します。すなわち、グローバルラーニングセンター（およびその前身組織）が指導してきた国際交流団体と、課外・ボランティア活動支援センター（およびその前身組織）が指導してきたボランティア団体です。これら学生団体は、学友会には登録していませんが、上記の性格を反映して、一種「正規の」学生団体というステイタスを享受しています。

この間、課外・ボランティア活動支援センター（以下、本センター）では、国際交流団体・ボランティア団体の位置付けを検討し、その結果、上記基本方針に則り、これら団体についても基本的には学友会に登録するべきであるという結論に達しました。そして、グローバルラーニングセンターの協力も得つつ、当該団体に対する意向調査（6 月 8 日から 30 日）および説明会（6 月 22 日）を実施しました。意向調査の結果は別紙のとおりです。

学友会への登録を希望する団体のうち、

(a)グローバルラーニングセンターおよび本センターの指導のもとに活動してきた期間が 3 年未満のものについては、可能なかぎりすみやかに登録団体申請をおこない、登録団体として活動を始める予定です。

(b)同期間が 3 年以上のものについては、本来であればこれらもまた登録団体の申請および登録団体としての活動開始の対象となるべきところですが、本センターでは、大学組織の指導のもとに 3 年以上活動してきたという事情を考慮し、準加盟団体として学友会に登録するという特例的な措置を要請するべきであるという結論に達しました。

(4) 理事のご理解・ご協力が得られた場合における、今後予想される手続き

学友会の最高決定機関は全学協議会です。したがって、次回の全学協議会（7 月 19 日）に総務部から緊急提案することが、もっともオフィシャルな方策であると考えられます。

また、場合によっては、例外的な事態であることを考慮し、学生支援担当理事から学友会会長（本学総長）にご要望いただくことも考えられます。

【注記】ボランティア団体独自の登録制度の検討

今回、学友会への登録を希望しないボランティア団体がありますが、これら団体については、ひきつづき学友会への登録をよびかけるとともに、課外・ボランティア活動支援センターに最長 2 年間登録する枠組みを設け、そこに登録させることを考慮中です。それにより、はじめて学研災・学研賠の適用が可能になるからです。

ただし、この「2 年間」は一種の「猶予期間」であり、3 年目以降も活動の継続を希望する団体については、原則として学友会に登録するものとしたく、今後制度の設計を進める所存です。

以上

その後、課外・ボランティア活動支援センター及びグローバルラーニングセンターを管轄する高度教養教育・学生支援機構長名義で、里見進東北大学学友会会長宛に、学友会登録に伴う登録措置を求める要望書（【資料 5】）を提出した。この要望は、7 月 19 日の学友会全学協議会の議題に追加され、審議の結果、了承された。

【資料 5】

2017 年 7 月 6 日

東北大学学友会
会長　里見　進　殿

高度教養教育・学生支援機構
機構長　花輪　公雄

高度教養教育・学生支援機構の指導監督下にある学生団体の学友会登録
にかかわる特例措置について（要望）

⑴要望

ボランティア・国際交流を主目的として活動し、学友会への登録を希望する学生団体のうち、これまで 3 年以上、高度教養教育・学生支援機構（以下、本機構）グローバルラーニングセンターおよび同課外・ボランティア活動支援センター（両者の前身組織を含む）の監督指導のもとに活動してきたものについては、監督指導下における活動年数を学友会細則（以下、「細則」）20 条 2 項に定める「登録の更新」の年数に読み替え、細則 19 条に定める「準加盟団体」として登録を申請することを特例措置としてお認めいただきたく、ここに要望いたします。

⑵要望の背景

本機構に設置されているグローバルラーニングセンターおよび課外・ボランティア活動支援センター（ともに、前身組織や担当事務部局を含む）は、これまで、ボランティア・国際交流を主目的として活動する学生団体を指導監督してまいりました。ただし、これら団体は、設立の経緯などを反映して、学友会に登録しておりません。

この間、本機構では、両センターを中心に、これら国際交流団体・ボランティア団体の位置付けを検討し、その結果、これら団体についても基本的には学友会に登録するべきであるという結論に達しました。そして、当該団体に対する意向調査（6 月 8 日から 30 日）および説明会（6 月 22 日）を実施いたしました。登録希望団体について【別表】をご参照ください。

これら学友会への登録を希望する団体のうち、両センターの指導のもとに活動してきた期間が 3 年未満のものについては、可能なかぎりすみやかに登録団体申請をおこない、登録団体として活動を始める予定です。

これに対して、同期間が 3 年以上の団体については、本来であればこれらもまた登録団体の申請および登録団体としての活動開始の対象となるべきところですが、本機構では、本機構（前身組

織を含む）の指導監督のもとに 3 年以上活動してきたという事情を考慮し、準加盟団体として学友会に登録することを認めるという特例措置を要請するべきであるという結論に達した次第です。

ご検討のほど、よろしくお願いいたします。

高度教養教育・学生支援機構の指導監督下にある学生団体の学友会登録にかかわる特例措置について（要望）【別表】

監督業務センター	団体名	指導監督下の活動年数	備考
課外・ボランティア活動支援センター（前身組織・東日本大震災学生ボランティア支援室）	HARU	5 年	2011 年 3 月より大学の依頼により、山元町等で活動開始し現在に至る。2011 年 10 月に登録。
	ReRoots	5 年	2011 年から活動を開始し、2012 年 5 月に登録。仙台市若林区で農業支援やまちづくり等を行う。
	みまもり隊	2 年	2011 年から活動を開始し、東松島市で農業支援等を行う。2015 年 3 月に登録。
	SCRUM	5 年	2011 年 10 月より東日本大震災学生ボランティア支援室の学生スタッフとして大学で募集し活動を開始。学内のボランティアコーディネートや緊急時の災害支援等を行い現在に至る。
	ぽかぽか	4 年	2012 年 8 月より東日本大震災学生ボランティア支援室内に設立された岩手部門として活動を開始した。2015 年 2 月に独立した団体として登録した。
	福興 youth	4 年	2013 年 3 月より東日本大震災学生ボランティア支援室内に設立された福島部門として活動を開始した。2017 年 4 月に独立した団体として登録した。
	インクストーンズ	3 年	2013 年 9 月より東日本大震災学生ボランティア支援室内に設立された宮城部門として活動を開始した。2017 年 4 月に独立した団体として登録した。
	たなぼた	1 年	2016 年 4 月より活動を開始。2017 年 4 月に登録した。
	献血サークル	1 年	2016 年 4 月より活動を開始。2017 年 4 月に登録した。

	グローバルラーニングセンター	@home	17 年	1999 年に当時の留学生課の指導・監督の下に成立し、留学生支援や国際交流に従事してきた。	
		The Sentinel	1 年	2016 年 5 月からグローバルラーニングセンターの指導の下で英語での東北大学生に関する情報の発信等の活動を開始し、現在に至る。	

その後、当該団体に関しては、学友会登録の申請を行うよう伝えた。その間、上記のうち献血サークルの学生より、団体としての継続の見込が立たないため、学友会登録を断念する旨連絡を受け、結果的に 9 月 11 日には学生生活支援審議会の下に設置された学生支援専門委員会では、8 つのボランティア登録団体が学友会登録団体として承認された（さらに、この段階で学友会登録を希望しなかったボランティア登録団体の内、AsOne が後に学友会登録を申請し、登録団体として承認されている）。

このように、ボランティア登録団体の多くは、これまでの活動実績が認められ、学友会団体としても活動することになった。

（3）学生ボランティア支援の新内規制定

その後、東日本大震災学生ボランティア支援室の廃止と、新たな学生ボランティア支援に関する内規の制定に関して検討が進められ、ここに新たなボランティア団体登録制度をどのように明記するのかが課題となった。その中で、ボランティア登録団体を学友会登録団体に完全移行するという方針に関しては、幾つかの課題が浮上した。

第 1 に、学友会登録団体は長年継続することを見込んでいるため、登録に際して 1 年間の活動実績を求めているが、ボランティア団体は、特に自然災害の救援の際などに急ぎで発足する場合がある。この時、1 年間の活動実績を求めていると団体登録ができず、学研災・学研賠等の保険を使用することができない状態でボランティア活動を行うことになり、望ましくない。第 2 に、「こども☆ひかりプロジェクト」など、学友会に登録しなかった団体の支援が空白になってしまうことである。以上の理由から、当初は 2 年間に限ってボランティア団体として登録でき、その後学友会登録を進める臨時的措置としてのボランティア団体登録制度を作ることが構想された。

この構想の下、関係者との協議を進め、課外・ボランティア活動支援センターを主担当として、東日本大震災に限定しない総合的な学生ボランティア支援を行うため、新たに高度教養教育・学生支援機構長裁定の「東北大学学生ボランティア支援に関する内規」を制定する方針で検討を進めた。本部法務課等とも確認し、高度教養教育・学生支援機構が制定する内規においても、全学の学生を対象とすることに問題がないことが確認された（2016 年 12 月 20 日の部局長会議にて「機構」の定義づけが行われ、理事がガバナンスする全学組織としての性格が確認されたため）。検討の結果、12 月 21 日の高度教養教育・学生支援機構教授会議において【資料 6】の通りの内規の制定が承認された。また【図 1】は、新たな内規の意義について、教授会議での説明用に作成したものである。

【資料 6】

○東北大学学生ボランティア支援に関する内規

平成 29 年 12 月 21 日　　制　定

(趣旨)

第 1 条　この内規は、東北大学(以下「本学」という。)の学生が行う自主的なボランティア活動に対して、東北大学高度教養教育・学生支援機構（以下「本機構」という。）が行う支援について、必要な事項を定めるものとする。

(支援対象)

第 2 条　支援対象は、ボランティア活動を目的として本学の学生により組織された団体およびボランティア活動に関心を持つ本学の学生個人で、第 3 条に定める学生ボランティア活動支援委員会が別に定める手続きにより承認したものとする。

(学生ボランティア活動支援委員会)

第 3 条　本機構に、学生ボランティア活動支援委員会（以下「委員会」という。)を置き、次の各号に掲げる事項を審議する。

一　学生ボランティア活動支援に関わる事業報告および計画

二　学生ボランティア活動支援に関わる決算および予算

三　学生ボランティア活動支援の対象としての、本学の学生により組織された団体および本学の学生個人の承認

四　その他、学生ボランティア活動支援に関わる重要事項

(委員会の組織)

第 4 条　委員会は、委員長、副委員長及び次の各号に掲げる委員をもって組織する。

一　学生支援を担当する総長特別補佐

二　学生生活支援審議会委員　若干人

三　教育・学生支援部長

四　その他委員会が必要と認めた者

(委員長及び副委員長)

第 5 条　委員長は本機構の機構長をもって充てる。

2　委員長は、委員会の会務を総理する。

3　副委員長は本機構の課外・ボランティア活動支援センターの長をもって充てる。

4　副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故があるときは、その職務を代行する。

(構成員以外の者の出席)

第 6 条　委員長は、必要があると認めるときは、構成員以外の者を会議に出席させて説明又は意見を聴くことができる。

(顧問)
第 7 条　委員会に顧問を置くことができる。
2　顧問は、委員長の求めに応じ、委員会の重要事項に関し、意見を述べ、又は助言を行う。
3　顧問は、委員長が委嘱する。

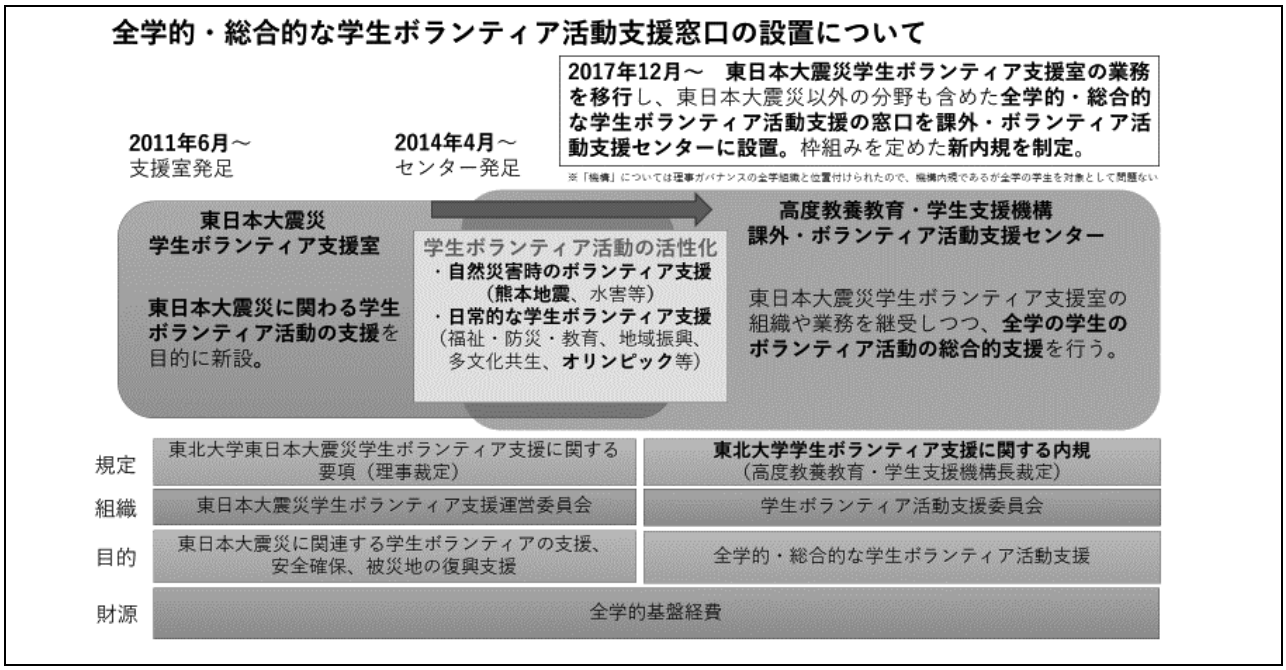
（庶務）
第 8 条　委員会の庶務は、教育・学生支援部において処理する。

（担当業務センター）
第 9 条　委員会で承認された学生ボランティア活動支援は、本機構の課外・ボランティア活動支援センターが担当し、必要に応じて本機構の他の業務センターと連携するものとする。

(雑則)
第 10 条　この内規に定めるもののほか、学生ボランティア支援に関する事項は、別に定める。

附　則
この内規は、平成 29 年 12 月 21 日から施行する。

【図 1】全学的・総合的な学生ボランティア活動支援窓口の設置について



（4）新たな学生ボランティア団体登録制度の制定

この内規に基づいてボランティア団体登録制度について検討を進める中で、新たな課題も浮上した。学友会は、東北大学としての正式な機関ではないため、専ら学友会登録団体だけを支援するのであれば、大学として特別に予算措置を行う合理性が認められず、また高度教養教育・学生支援機構マターではなく学生生活支援審議会マターになるのではないか、という課題である。

また、ボランティア登録団体の学生にも意向を確認したところ、学友会登録団体に全て移行した場合、これまで培ってきたボランティア団体の連携が失われてしまうのではないかとの懸念の声も寄せられた。これらの課題を踏まえて検討した結果、学友会への登録制度と併行して、ボランティア団体の登録制度を新たに設けることが望ましいという方向に転換することになった。

そこで、新内規に基づいて 2018 年 2 月 23 日に初めて開催された学生ボランティア活動支援委員会において「東北大学学生ボランティア活動に関わる支援等の目的と基準」（【資料 7】）および「学生ボランティア団体の登録手続き等について」（【資料 8】）ならびに「学生ボランティア団体の活動実施届および活動報告書等について」（【資料 9】）が承認された。

【資料 7】

東北大学学生ボランティア活動に関わる支援等の目的と基準

平成 30 年　2 月 23 日
学生ボランティア活動支援委員会

1. 東北大学学生ボランティア活動に関わる支援等の目的

東北大学高度教養教育・学生支援機構（以下「本機構」という。）では、東北大学生が、自主的に地域的・社会的課題の解決に取り組むことを通して、教育と成長の機会を得ることを目的として、東北大学学生ボランティア活動に関わる支援等を行うものとする。

2. 支援等の対象となる活動

支援等の目的を達するため、以下の各号の基準に該当するボランティア活動について、本機構では支援等を行うものとする。

(1)　参加する学生が自発的な意欲で参加し、自主的に取り組める活動であること。
(2)　活動する学生および活動を行う団体の構成員以外の福利を増進するとともに、何らかの地域的・社会的な課題の解決や価値の創造に取り組む活動であること。
(3) 活動に参加することで、学生が教育や成長の機会を得られるような活動であること。

3. 支援等の対象とすることができない活動

ボランティア活動に参加する学生の自主性および心身の安全ならびに健全な学生生活を保護し、また学生の活動により地域住民や社会が不利益を被ることのないように監督し、また東北大学の国立大学法人としての公平性・中立性を守るため、以下の各号の基準に該当する活動は支援等の対象とすることができないものとする。

(1) 心身の危険が伴うと懸念される活動
(2) 経済的搾取が懸念される活動
(3) 学業等に支障を来たす活動
(4) 責任体制や危機管理体制、事故に対応する保険等が不備ないし明確でない活動
(5) 法令等に違反する活動、有資格者が行うべきことを無資格で行う活動
(6) 反社会的勢力に関係する活動
(7) 活動する地域の住民等の利益を不当かつ明確に損ねる活動

（8）特定の政党や政治家等への支持を集めるための活動
（9）特定の宗教や教義を布教するための活動
（10）営利を目的とする活動
（11）その他、学生ボランティア活動支援委員会が不適当と判断する活動

4. 支援等の可否判断
前記の基準に照らして、具体的な支援等の可否および内容の判断は、課外・ボランティア活動支援センターで行うが、判断が困難な場合は、学生ボランティア活動支援委員会で審査する。

【資料 8】

学生ボランティア団体の登録手続き等について

平成 30 年　2 月 23 日
学生ボランティア活動支援委員会

1　学生ボランティア団体登録の申請
東北大学（以下「本学」という。）の学生がボランティア活動を主な目的とした団体（以下、「学生ボランティア団体」という。）を組織し、その活動にあたって東北大学高度教養教育・学生支援機構（以下、「本機構」という。）から支援を受ける場合には、当該団体を組織しようとする学生の代表者は、本機構の機構長に登録を申請し、学生ボランティア活動支援委員会の承認を経て、その許可を得なければならない。

2　申請内容
登録に当たっては、次に掲げる事項を申請しなければならない。
（1）　団体の名称
（2）　設立年月日
（3）　目的
（4）　活動内容とその社会貢献性および教育効果
（5）　規約
（6）　顧問教員、役員及び会員の氏名
（7）　前年度の活動内容（申請前に活動実績がある場合）
（8）　今年度の活動計画書

3　登録の許可
機構長は、申請内容が次に掲げる要件を満たす場合、学生ボランティア活動支援委員会の承認を経て、登録を許可するものとする。
（1）　本学の学生 3 名以上の会員で組織されていること。
（2）　本学の専任教員が、顧問教員として当該団体の運営及び活動の指導に当たっていること。

ただし、顧問教員が他の団体の顧問教員を兼任する場合、当該申請団体を含め、その数が 3 団体以内であること。

(3)　別に定める「東北大学学生ボランティア活動に関わる支援等の目的と基準」に適合していること。

4　登録の有効期間

前項の規定により登録の許可を得た学生ボランティア団体（以下「学生ボランティア登録団体」という。）の登録の有効期間は、1 年とする。ただし、学生ボランティア登録団体が、毎年 5 月末日までに第 2 項に掲げる事項を機構長に申請し、前項に掲げる要件を満たす場合に限り、登録の更新を受けることができる。

6　記載事項の変更等

学生ボランティア登録団体が、登録にあたって申請した内容を変更したとき、又は解散したときは、速やかに機構長に届け出なければならない。

7　登録の抹消

申請内容に虚偽があった場合、または別に定める「東北大学学生ボランティア活動に関わる支援等の目的と基準」に適合しない場合には、機構長は、学生ボランティア活動支援委員会の承認を経て、当該団体の登録を抹消することができる。

8　異議申立て

登録申請の結果、不許可となった場合又は登録を抹消された場合は、当該通知のあった日から 14 日以内に限り、機構長に異議申立てを行うことができる。

9　附則

この手続き等は、平成 30 年 2 月 23 日から施行する。

【資料 9】

学生ボランティア団体の活動実施届および活動報告書等について

平成 30 年　2 月　23 日

学生ボランティア活動支援委員会

1　趣　旨

東北大学生によるボランティア活動を推進するにあたり、活動に従事する学生の安全・安心を確保し、また活動先の地域社会・住民とのトラブルを回避し、社会に有益な活動とするために、学生がボランティア活動を実施するにあたって、実施届および活動報告書の提出を促し、大学として適切に学生への指導を行えるようにするものである。

また同時に、学生ボランティア活動に対して、学生教育研究災害傷害保険（学研災）および学研災付帯賠償責任保険（学研賠）等の保険を確実に適用するためにも、活動実施届および活動報告書の提出を指導するものとする。

2. 活動実施届について
届け出が必要な場合：「東北大学学生ボランティア支援に関する内規」に定める支援対象の団体が、一連のボランティア活動を企画した際。実施開始日の 7 日前の提出とする。
届け出を行う者：団体の構成員であること（活動に同行しない者でも良い）。ただし、実施責任者として、同行する者 1 名の氏名・連絡先などを届けなくてはならない。
届け出の方法：活動実施にあたり顧問教員の了解を得た上で、別に定める活動実施届の書式に記入しメール等で、課外・ボランティア活動支援センター（以下、支援センターという。）の担当者に提出する。なお、支援センターが指定する Web フォーム等に入力して提出としても良い。また同時に、支援センターが指定する方法で参加者名簿および行程表を添えて提出すること。なお、参加者名簿には、保険（学研災・学研賠、大学生協の学生総合共済・学生賠償責任保険、宮城県社会福祉協議会のボランティア保険等）加入の有無を記載すること。

3. 活動報告書について
提出が必要な場合：活動実施届を出した活動が終了した日から 14 日以内に提出するものとする。
提出の方法：別に定める活動実施届の書式に記入しメール等で、支援センターの担当者に提出する（支援センターが指定する Web フォーム等に入力して提出としても良い）。また、参加者名簿および行程について、活動実施届提出時から変更がある場合は、それらも添えて提出すること。

以上のように、本年度中の検討の中で、ボランティア団体の登録制度については紆余曲折があった。しかし、結果的に、多くの団体が学友会登録団体となり、将来的な活動場所の確保などの道が開けたことは評価できる。また、東日本大震災後の被災地支援から始まった東北大学の学生ボランティア活動の文化が広がりを持つ中で、東日本大震災に限定しない形で学生ボランティア活動を積極的に支援することが明確になり、今後の学生ボランティア文化の発展が期待される。

1-6. 開講した授業

本年度は、課外・ボランティア活動支援センターで開講するサービス・ラーニング科目を大幅に増やし、【表 7】の通り計 9 コマ（18 単位）の授業を提供した。以下、各授業の概要について紹介していく。なお、担当教員の内、藤室は高度教養教育・学生支援機構協教育の特任准教授、江口は同じ機構の特任助教である。

また、藤室は高度教養教育開発事業で「学内外連携による、東日本大震災被災地復興および地域社会・国際社会に貢献し得る人材の育成を目的とした、社会貢献型の体験学習（サービスラーニング）科目の開発事業」が 2015 年度に採択され、また江口は同事業で「多様な他者との共生に向けた現代的教養の育成に資する人権教育プログラムの開発事業」が 2016 年度に採択され、2017 年度もそれぞれの事業の一環として、授業開発および実施を行ったものである（藤室の事業は 2017 年度で終了、江口の事業は 2018 年度も継続予定）。

【表 7】2017 年度の課外・ボランティア活動支援センター開講科目（すべて全学教育科目）

科目群	授業題目（◎は 2017 度初開講）	担当教員	開講時期	受講生	授業評価
基幹科目	東日本大震災からみる現代日本社会◎	藤室玲治 西出優子 江口怜	1S・火 1 2S・月 4	1S、36 名 2S・15 名	1S、4.4 2S、4.7
基礎ゼミ	ボランティア活動を通して、被災者の生活再建・コミュニティ形成の課題を知る	藤室玲治	1S・月 3～4	14 名	4.9
	仙台の地域課題を解決するアイデアを考えよう◎	藤室玲治	1S・木 5	18 名	4.7
	共生社会に向けたボランティア活動―人権・多様性・エンパワメント◎	藤室玲治 江口怜	1S・月 5	11 名	4.5
	震災をどう伝えるか―震災遺構の保存・活用と、震災の記憶の伝承の課題を学ぶ◎	藤室玲治	1S・月 5	10 名	4.1
展開ゼミ	ボランティア活動を通して、被災者の生活再建・コミュニティ形成の課題を知る	藤室玲治	2S・4S・木 5	6 名	4.8
	三陸復興の地域課題と日本の未来◎	藤室玲治	2S・4S・月 5	9 名	4.6
	福島における人権保障と共生の課題―原発事故以降を生きる人々に寄り添う◎	藤室玲治 江口怜	2S・金 5	6 名	4.6

※ 授業評価は「学生による授業評価」12 項目の平均点（最高点は 5）。前期の全学教育科目の平均点は 4.1、後期の同科目の平均点は 4.2

1-6-1. 基幹科目「東日本大震災から見る現代日本社会」

■担当教員：藤室玲治、西出優子（経済学研究科准教授〔当時〕）、江口怜

■受講者：東北大学 1 年生 3 名、2 年生 3 名、TA 1 名

■授業時間帯：第 2 セメスター　木曜日 5 限

■授業概要（シラバスより）

大きな自然災害が社会に与える被害と、そこからの復興過程においては、その時代の社会が抱える課題が浮き彫りになります。2011 年に発生した東日本大震災においても地方の過疎と少子高齢化の進展、人口減少社会への突入という課題が、復興を困難にしています。また福島第 1 原発の事故は、原発とエネルギー政策について大きな課題を提起しました。その他、避難や防災のあり方、農林漁業の今後、ボランティア等による支援のあり方なども問われています。こうした東日本大震災が提起した様々な課題を学び、そこから現代日本社会の課題と構造について学ぶことが、本講義の目的です。

■学習の達成目標（シラバスより）

・東日本大震災が明らかにした課題の特殊性と普遍性についての理解。大震災によって明らかになった多様な課題について、具体的な事例にそって理解するとともに、その課題が被災地のみならず、

現代日本社会全体の課題につながる普遍的な側面を持つことを、講義の聴講とグループディスカッション、自主設定課題調査等で理解します。

・課題の学際性についての理解。大震災によって明らかになった多様な課題は、例えば原発問題を取り上げても、単独の学問分野のみによるアプローチでは十分な理解は難しく、学際的視点・文理融合的視点・トランスサイエンス的発想が必要なことを理解します。

・自らの専門性・市民性との関連による理解。講義を通じて学ぶ課題について、自らの専門性との関連について、あるいは市民性（いのちの大切さ、卒業後の生活との関連、出身地の防災リスク、まちづくりやボランティアへの参画等）との関連について理解し、他人事としない態度を身に付けます。

■実施スケジュール

	前期内容（担当者）	後期内容（担当者）
第 1 回	オリエンテーション――災害と日本社会（藤室玲治）	
第 2 回	東日本大震災の概要と復興の課題（藤室玲治）	
第 3 回	被災の実際と避難の課題①（せんだい 3.11 メモリアル交流館・花淵みどり氏）	被災の実際と避難の課題①（せんだい 3.11 メモリアル交流館・花淵みどり氏）
第 4 回	被災の実際と避難の課題②（小さな命の意味を考える会・佐藤敏郎氏）	被災の実際と避難の課題②（小さな命の意味を考える会・佐藤敏郎氏）
第 5 回	被災者の生活再建の課題（つながりデザインセンター・飯塚正広氏）	仮設住宅 7 年目の課題（藤室玲治）
第 6 回	震災と子どもの貧困、不登校の課題（TEDIC・門馬優氏）	復興まちづくりの課題（災害科学国際研究所／公共政策大学院・島田明夫氏）
第 7 回	仮設住宅 7 年目の課題（藤室玲治）	復興まちづくりの課題（藤室玲治）
第 8 回	復興まちづくりの課題（災害科学国際研究所／公共政策大学院・島田明夫氏）	原発事故と避難の課題①（藤室玲治）
第 9 回	原発事故と避難の課題①（藤室玲治）	原発事故と避難の課題②（藤室玲治）
第 10 回	原発事故と避難の課題②（災害科学国際研究所・松本行真氏）	フィールドワークの報告（藤室玲治）
第 11 回	熊本地震に活かされた教訓（藤室玲治）	東日本大震災と NPO の課題（西出優子）
第 12 回	東日本大震災と NPO の課題（西出優子）	自主設定課題レポートの報告（藤室玲治）
第 13 回	災害ボランティア活動の歴史と課題（災害科学国際研究所・丸谷浩明氏）	最終ディスカッション（藤室玲治）
第 14 回	自主設定課題レポートの報告（藤室玲治）	
第 15 回	最終ディスカッション（藤室玲治）	

毎回の授業では、講義または映像資料の視聴を行なった後（60 分程度）、グループ・ディスカッションの実施と全体発表を行ない（20 分程度）、ミニッツペーパーを執筆するという流れをとった（10 分程度）。なお講義は基本的にオムニバス形式であり、担当教員だけでなく、テーマを専門とする教員や外部の実践家・専門家を招いている。

この授業では、合わせてフィールドワークの実施や自主設定課題の提出も求めた。フィールドワークとしては、震災遺構や記念館等、東日本大震災の被害や復興状況を示す施設などの訪問、東日本大震災に関わるボランティア活動への参加のうち、いずれか一つの実施と感想提出を行なうこととした。また自主設定課題としては、授業やフィールドワークのなかから、自分でより深めたいテーマを選択し、調査の実施とレポートの提出を行なうこととした。

■学生の感想

・ 東日本大震災という一つの災害をとってみても、そこを取り巻く問題、あるいはそこから新たに派生する問題をとらえることで、ボランティアに関する法律の制定等、知らなかった分野について新たな発見をしたり、今まで知られていた問題(原発の避難など)についても、別の角度、視点を取り入れることで問題の根本まで掘り下げることができたように感じられた。専門科目の履修が増えるにつれてこのような講義を受ける機会は減ってしまうが、視野を広げて、一つの問題に多角的に取り組む姿勢を忘れないようにしたい。（工学部１年・男性）

1-6-2. 基礎ゼミ「ボランティア活動を通して、被災者の生活再建・コミュニティ形成の課題を知る」

■担当教員：藤室玲治

■受講者：東北大学 1 年生 14 名、TA１名

■授業時間帯：第１セメスター　月曜日 3限・4限

■授業概要（シラバスより）

東日本大震災より６年が経過しましたが、いまだ多くの方々が仮設住宅等で生活されています。また自力で家を再建されたり復興住宅へ入居された方々も、新たな生活への適応に多くの課題を抱えています。被災された方々の高齢化も進んでいます。そのため今も、被災地でのボランティア活動は必要とされています。この授業では小グループに分かれ、ボランティア活動を実際に体験します。その上で、被災者や支援者のお話、フィールドでのインタビューなどを通して、被災者の生活再建とコミュニティ形成にどのような課題が存在するのか、理解を深めます。最後に、グループ毎に特定の地域・復興住宅団地等を対象としたコミュニティ形成のためのボランティア活動を企画・実施し、その成果を相互に評価します。

■学習の達成目標（シラバスより）

・ボランティア活動に参加し、その意義や背景、課題を理解することができるか。

・地域コミュニティでのフィールドワークやインタビューを通して、地域課題を把握することができるか。

・ボランティア活動の企画・実施を通して、主体的に課題解決のための行動をとることができるか。

・グループ活動を通して、他者と役割を分担しながら、協調して活動できるか 。

■実際スケジュール

今年度は、災害公営住宅（復興住宅）におけるコミュニティ形成の課題に焦点をあてることとし、①仙台市若林区大和町、②仙台市太白区あすと長町、③石巻市新蛇田（のぞみ野）の三地区で実践活動を行なった。

授業の流れとして、まずはゴールデンウィークを利用してボランティア活動への参加を課し、活動終了後は振り返りのグループディスカッションを行なった。つづいて活動現場に関わる実践者の講演とフィールドワークを実施し、各地域の現状と課題に関する理解を深める機会とした。その後は、

班ごとに具体的な実践活動を企画し、受講生是認で活動を行なった。なお企画にあたっては、連携先と企画案の打ち合わせを行なうこととし（1 回以上）、より活動現場の課題に即した実践となるように促した。

■連携先と、活動現場・活動内容

対象地域	連携先	活動内容（活動現場）
仙台市若林区 大和町	・若林区社会福祉協議会 ・若林区大和地区社会福祉協議会	・午前：足湯カフェ（大和町市営住宅、卸町市営住宅、中倉市営住宅） ・午後：科学実験（松木公園）
仙台市太白区 あすと長町	・あすと長町第一市営住宅自治会 ・あすと長町第二市営住宅自治会	・午前：科学実験（あすと長町第一市営住宅） ・午後；科学実験（あすと長町第二市営住宅）
石巻市 のぞみ野	・石巻じちれん	・午前：大掃除、お楽しみ会（新立野第二復興住宅） **・昼：昼食の提供（同上）**

■学生の感想

・ ボランティアが身近なものであると実感すると同時に、人のこころに一歩踏み込む重みも実感した。震災の爪痕が色濃く残る場所を目の当たりにするときや、生活や精神状態をうまく立て直せず自殺してしまった人やその周囲の人の苦悩、体験談を一対一でお話しいただき直接聞いた「つらい」という声、それらを受け取るのは決して容易ではなく、私は涙をこらえることが何度もあった。ただ、復興のなかでも決して消えることのないつらさが、失われるべきだとは思わない。震災は日に日に風化している。もう私の故郷では東日本大震災のことはあまりよく思い返されない。たとえ語り継がなくとも、思いを受け取ることはボランティアの役割のひとつなのかもしれないと思う。（法学部１年・女性）

1-6-3. 基礎ゼミ「仙台市の地域課題を解決するアイデアを考えよう」

■担当教員：藤室玲治

■受講者：東北大学 1 年生 18 名、TA 1 名

■授業時間帯：第 2 セメスター　木曜日 5 限

■授業概要（シラバスより）

本科目は東北大学生のみなさんが住む（通学する）仙台に当事者として向き合い、より良いまちをつくるため、仙台の地域課題について理解を深め、その解決方法を「アイデアソン」という手法で考える授業です。具体的には、3～4 人程度のグループを編成して、仙台市役所が例示する地域課題や自分の興味のある地域課題について、調査対象の選定→事前調査→フィールドワークによる調査→調査内容の整理・分析とアイデアソン→まとめ・発表を行います。「アイデアソン」とは「アイデア」と「マラソン」の合成語で、課題に対する解決策を、グループ単位でアイデアを出し合い、それをまとめていく形式のワークショップです。

■学習の達成目標（シラバスより）

・仙台市の地域課題解決のために行政と民間それぞれが果たすべき役割、行政と民間が協働してまちづくりに取り組む必要性等について理解し、第三者にもわかるように説明できるようになること。

・仙台市役所の方や地域の方々等、世代の異なる他者とコミュニケーションをとり、目的（調査等）を達成することができるようになること。

・グループでの調査やアイデアソンを通して、グループで目標に向かって協働する手法とリーダーシップを学び、実践できるようになること。

■実施協力団体

仙台市、一般社団法人ワカツク

■実施スケジュール

回	日程	概要
1	4 月 20 日	フィールドワークの準備①（仙台市の地域課題の例示、グループ編成）
2	4 月 27 日	フィールドワークの準備②（文献やネットによる事前調査、調査計画の立案）
3	5 月 11 日	フィールドワークの準備③（アポ取りとインタビュー方法を学ぶ）
4-6		フィールドワークの実践①（グループ単位、3 コマ相当）
7	6 月 1 日	フィールドワークの振り返り①（調査内容の整理・分析とアイデアソン）
8	6 月 8 日	フィールドワークの振り返り②（調査内容の整理・分析とアイデアソン）
9-12		フィールドワークの実践②（グループ単位、4 コマ相当）
13	6 月 29 日	フィールドワークの振り返り③（調査結果取りまとめ、発表用資料作成）
14	7 月 6 日	フィールドワークの振り返り④（調査結果取りまとめ、発表用資料作成）
15	7 月 13 日	グループ単位で発表

■各グループの選択したテーマとテーマ提供部局（仙台市役所）

グループ	テーマ	提供課
A	震災を知らない学生へ、震災の経験・教訓を伝えるために	防災環境都市推進室
B	HAPPY な関係を続けるために～デート DV の普及啓発～	男女共同参画課
C,D	西公園を活用して、周辺地域を活性化しよう	公園課

■学生の感想

・ 今回、「西公園の活性化」という課題に取り組むことを通して、多くのアイデアへのアプローチの仕方を学んだ。特にその中でもフィールドワークの重要性を学んだ。私が将来、社会に出て行った際にはフィールドワークを率先して行い、多角的なアイデアや計画をしたいと思った。私は工学部に所属しており、将来、実際に現場に赴くことは少ないかもしれないが、常に他者とのコミュニケーションの重要性に念頭をおき、新しいものを作りだすエンジニアになりたい。また、今回学んだアイデアへの様々なアプローチの仕方は、将来エンジニアとして物を創造する際に役に立つと思う。（工学部 1 年・男性）

【写真】仙台市公園課の案内で西公園調査（右）、公園課から最終報告にコメントいただく（左）

1-6-4. 基礎ゼミ「震災をどう伝えるか—震災遺構の保存・活用と、震災の記憶の伝承の課題を学ぶ」

■担当教員：藤室玲治

■受講者：東北大学 1 年生 10 名、TA 1 名

■授業時間帯：第 1 セメスター　集中（主に月曜日 5 限）

■授業概要（シラバスより）

東日本大震災から 6 年が経過した今、震災の記憶の風化を防ぎ、教訓を どのように後世に伝えていくかが課題となっています。そのためには実 際に震災でダメージを受け、津波の威力などを物語る震災遺構の保存と 活用が有効な方法となり得ます。しかし一方で、遺構の中には多くの方 が犠牲になった建物などもあり「そのような建物は見たくない」という ご遺族や地域住民の感情もあり、そもそも保存すべきかどうかから議論 になる例も多くあります。また実際に震災を経験された方が語り部とな り、震災の記憶の伝承につとめている例も多くあります。その他、記念碑や植樹など、記憶の風化を防ぐ取り組みは様々です。 この基礎ゼミでは、そうした震災の記憶の伝承の取り組みが行われてい る現場を実際に訪問し、その意義と課題について学びます。また広島や 長崎（原爆の記憶）、阪神・淡路大震災や中越地震被災地における記憶 の伝承の課題との比較も行います。

■学習の達成目標（シラバスより）

・東日本大震災被災地で、震災の記憶の風化を防ぐために、どのような取り組みがなされているか、またなぜそのような取り組みが必要なのかについて、フィールドワークや講義を通して当事者の感情も含めて理解する。

・震災遺構の保存と活用について、地域社会の中にどのような議論があるのか、また保存の費用や活用方法を巡って行政と民間の役割についてどのような議論があるのか、フィールドワークを通して主な論点を理解する。

・国内外の他の事例（大災害や戦災の記憶の伝承）との比較（主に講義と文献調査を通して）において、東日本大震災の記憶の伝承の意義と課題を理解する。

■実施スケジュール

回	日程	概要
1	4 月 17 日	オリエンテーション
2	4 月 24 日	講義、調査課題の発表
3	5 月 1 日	調査課題の報告（各自、震災遺構を一つ以上取りあげて考察）
4-6	5 月 3 日、13 日	第一回フィールドワーク（南三陸町、石巻市）
7	5 月 15 日	第一回フィールドワークのふりかえりと報告、課題発表
8	5 月 22 日	第二回フィールドワーク内容の検討（訪問場所の検討）
9	5 月 29 日	第二回フィールドワーク内容の検討（訪問場所ごとに調査報告）
11	6 月 12 日	第二回フィールドワーク内容の検討（質問項目の検討）
12	6 月 26 日	第二回フィールドワーク内容の検討（資料集の作成など）
12-15	7 月 17 日	第二回フィールドワーク（仙台市、岩沼市、亘理町、山元町）

■学生の感想

・ この基礎ゼミでは 10 人の生徒が震災遺構について学ぶことが出来た。しかし、この 10 人だけでとどまるとあまり意味がない。多くのことを学んだ 10 人が知り合いに話して経験を共有することが大切である。また 10 年後・20 年後に今回訪れた場所に行っていたいと思った。現在に比べ

てどのくらい復興が進んだのか、遺構はどのようにすることに決まったのか、新しい防災施設はできたのか、そして地域住民はどのくらいそこに戻ってきたのかを調べたい。そして自分の子どもにも話をして、東日本大震災のことについて考えられるようにしたいと思った。(医学部１年・男性)

1-6-5. 基礎ゼミ「共生社会に向けたボランティア活動―人権・多様性・エンパワメント」

■担当教員：江口怜、藤室玲治

■受講者：東北大学 1 年生 11 名、聴講者 1 名、TA 1 名

■授業時間帯：第１セメスター　月曜日 5 限　※ボランティア実習は別途設定

■授業概要（シラバスより）

本ゼミでは、ボランティア活動を通して、「他者」と出会い、出会った方たちの経験を「聴く」ことを試みます。主に仙台市内で行われる、貧困者や外国人、障害のある方や義務教育を終えることのできなかった方たち等を支援するボランティア活動に参加し、インタビューを行いながら、すべての人が自由に、人権と多様性を尊重し合いながら生きることのできる「共生社会」のあり方について考えます。また、すべての人が差別されることなく生き生きと暮らすことができるために、求められる対人支援の方法や自尊感情・エンパワメント等の考え方を学びます。

■学習の達成目標（シラバスより）

(1) ボランティア活動に参加し、支援対象者の抱える課題や活動の意義を理解する。

(2) 当事者の経験を聴く技法を身に着け、「当事者視点」で課題を考えることができる。

(3) ボランティア活動で体験したことを文献等から得られる知識と結びつけて理解し、社会的な課題として把握することができる。

(4)「共生社会」の実現に向けた課題とその解決方法について具体的に考えることができる。

■ボランティア実習受入れ団体

①仙台自主夜間中学（義務教育段階の学び直し、基礎教育保障）

②一般社団法人アート・インクルージョン（アートによる障がい者仕事・居場所づくりなど）

③NPO 法人仙台夜まわりグループ（ホームレス支援、生活困窮者支援）

④東北学院大学日本語ボランティアサークル HANDS（在日外国人の日本語学習支援・国際交流）

■実施スケジュール

回	日程	概要
1	4 月 17 日	オリエンテーション
2	4 月 24 日	講義（様々な人権課題、共生社会とは何か、ボランティア実習先の概要）
3	5 月 1 日	船形コロニーおよび地域支援センターぱれっとが運営するグループホーム、デイサービスの見学（宮城県大和町）
4	5 月 8 日	実践者講義 仙台自主夜間中学＋アート・インクルージョン
5	5 月 15 日	実践者講義 仙台夜まわりグループ＋東北学院大学 HANDS
6	5 月 22 日	ワークショップ「「共生社会に向けたボランティア活動」ってなんだ？」、講義（エンパワメントとは何か、ボランティア実習の注意点）
7	5 月 29 日	ボランティア実習 ※振替
8	6 月 5 日	

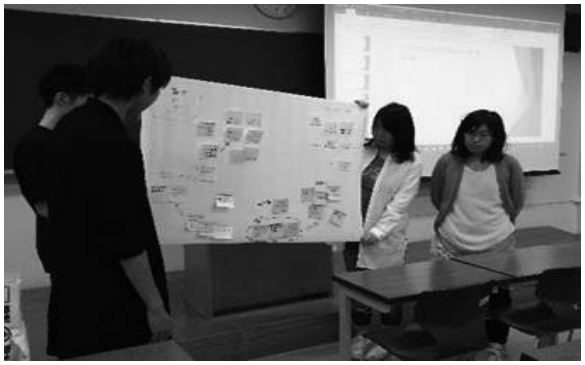
9	6 月 12 日	ボランティア実習振り返りワークショップ、インタビューのガイダンス、文献調査方法のガイダンス
10	6 月 19 日	ボランティア実習 ※振替
11	6 月 26 日	
12	7 月 3 日	ボランティア実習の振り返り、ボランティア体験報告会の準備
13	7 月 10 日	教材 DVD『ホームレスと出会う子どもたち』視聴、報告会の準備
14	7 月 24 日	ボランティア体験報告会（公開）
15	7 月 31 日	まとめ

■学生の感想

「基礎ゼミを受講する以前は、社会的に弱い立場にある方に対して偏見を抱くことがあった。（略）基礎ゼミ受講後は、社会的に弱い立場にある方もそうでない方も、1 人ひとりが違っていることに変わりはないと考えるようになった」

「自分の考え方も、今まで排他的だったというわけではないが、他者を受け入れることへ前向きになったと感じられる。受け入れるためにも、自分と他者が対等な存在だという考えが必要なのではないかと思う」

「「ホームレス」と一括りにしてしまうが、どんな人達なのかを知ることで、ホームレスへの見方が変わる。また、労働の問題と福祉の問題を繋げて考え、現在より福祉をより充実したものにし、どのような人でも社会に居場所があるようにすることが大切と考える」



【写真】宮城県船形コロニー内の入所施設見学の様子（左）
共生社会とは何かを考えるワークショップ（右）

1-6-6. 展開ゼミ「ボランティア活動を通して、被災者の生活再建・コミュニティ形成の課題を学ぶ」

■担当教員：藤室玲治

■受講者：東北大学 1 年生 3 名、2 年生 3 名、TA 1 名

■授業時間帯：第 2 セメスター　木曜日 5 限

■授業概要（シラバスより）

東日本大震災より 6 年が経過しましたが、いまだ多くの方々が仮設住宅等で生活されています。また自力で家を再建されたり復興住宅へ入居された方々も、新たな生活への適応に多くの課題を抱えています。被災された方々の高齢化も進んでいます。そのため今も、被災地でのボランティア活動は必要とされています。

この授業では小グループに分かれ、ボランティア活動を実際に体験します。その上で、被災者や支援者のお話、フィールドでのインタビューなどを通して、被災者の生活再建とコミュニティ形成にどのような課題が存在するのか、理解を深めます。最後に、グループ毎に特定の地域・復興住宅団地等を対象としたコミュニティ形成のためのボランティア活動を企画・実施し、その成果を相互に評価します。

■学習の達成目標（シラバスより）

・ボランティア活動に参加し、その意義や背景、課題を理解することができるか

・地域コミュニティでのフィールドワークやインタビューを通して、地域課題を把握することができるか

・ボランティア活動の企画・実施を通して、主体的に課題解決のための行動をとることができるか

・グループ活動を通して、他者と役割を分担しながら、協調して活動できるか

■ボランティア受け入れ団体

一般社団法人石巻じちれん

■実施スケジュール

回	日程	概要
1	10 月 5 日	ガイダンス、自己紹介、グループ分けの希望調査
2	10 月 12 日	講義、ボランティア活動参加の日程調整
3	10 月 19 日	つぶやき分析のミニワークショップ（KJ 法）、活動参加の目的設定
	10 月 22 日、29 日	ボランティア活動への参加。22 日：災害公営住宅（石巻市新西前沼第二）、29 日：仮設住宅（石巻市三反走）
4	10 月 26 日	10/22 活動組の報告、足湯講習会
5	11 月 2 日	10/29 活動組の報告、聞いてきたお話などの分析（KJ 法）
6	11 月 16 日	現地調査の目的設定など
7	11 月 23 日	現地フィールドワーク（石巻市）
8	11 月 30 日	現地調査結果のふりかえり、調査課題の決定
9	12 月 7 日	調査課題の報告、企画の検討（1）概要の決定
10	12 月 16 日	企画の検討（2）活動場所、活動内容、スケジュールなどの決定
11	12 月 23 日	企画の検討（3）企画の詳細検討
12	1 月 11 日	企画の準備
13	1 月 12 日	企画の実施
14	1 月 18 日	企画のふりかえり、現地で聞いたお話などの分析
15	1 月 25 日	改めて現在の課題と今後の取り組みについて考える

■実施企画の概要

・ 名称：新年のぞみ野お楽しみ会

・ 活動場所：石巻市新蛇田第一集会所

・ 内容：将棋麻雀、ペットボトルボーリング、折り紙（午前中）、お雑煮とおしるこのふるまい（昼）、ビンゴ大会（午後）

■学生の感想

・ このゼミを通して学んだことは、工夫すればいくらでも日常生活に還元・応用できる。例えば被災者の方々の住人との会話の基本を「傾聴・自然体」は普段の会話にも当てはめることができる

し、人の話を聞く意識が変わることで、今までとも抜け落ちていた情報も拾えるようになるだろう。また東日本大震災や復興・ボランティアの知識は今後それらの問題を考えるときに大きな糧になるし、実際に必ずそうした機会は訪れる。知識があれば頭の中で問題に対する思考を続けられるし、常に自分の意見や価値観をアップロードできる。思考の材料を得たというだけでも、とても価値のある経験だったと思う。（工学部１年・男性）

【写真】10/29 仮設住宅で足湯を通して住民の方のお話をうかがう（左）。
1/12 ゼミの最後は集団移転地内の集会所でのお楽しみ会を企画・実施。参加者の皆さんと（右）。

1-6-7. 展開ゼミ「三陸復興の地域課題」

■担当教員：藤室玲治（東北大学高度教養教育・学生支援機構　特任准教授）
■受講者：東北大学 1 年生 9名、2年生１名、TA１ 名
■授業時間帯：第２セメスター　集中（主に月曜日５限）
■授業概要（シラバスより）

三陸海岸――宮城県の石巻市東部から北側の沿岸部、岩手県南部のリアス式海岸、宮古市を境に北部は海岸段丘となり青森県八戸市に至る沿岸部を指す――は、東日本大震災により壊滅的な被害を受けました。震災から６年が経ちますが、現在も仮設住宅で暮らす方も多く、復興事業もまだ途上である市町村が多数あります。三陸復興には長い時間がかかっていますが、その間に人口流出も激しくなっています。土地の嵩上げや防潮堤建設が進み、まちの風景は震災前とはもちろん、震災後にも次々と変わっています。この大がかりな復興事業により、三陸は復興するのでしょうか？被災された方々の生活と仕事はとりもどせるのでしょうか？流され失われたコミュニティは再生するのでしょか？また三陸が直面する課題は、日本全体の将来にとっても課題になり得るのでしょうか？

この授業では三陸復興の地域課題について、生活再建・産業復興・まちづくり・防潮堤・コミュニティ再生等のテーマを取り上げて、実際に現地でのフィールドワークを通して学びます。また課題解決のための取り組みについても学び、学生自身でも、課題解決のための取り組みを議論を通して構想し、発表します。

■学習の達成目標（シラバスより）

・三陸復興の課題についての多面的把握。(1) 三陸の地理と歴史、(2) 津波被害の特徴と復興事業の課題、(3) 過疎と高齢化の課題、(4) 生活と産業の特徴、(5) 文化とコミュニティの特徴の主に５つの側面について学ぶとともに、将来にどのような問題が起きうるかを理解します。
・地域視点での理解。フィールドワークを通して、被災当事者や地元自治体関係者、現地の支援者等のお話を聞き、被災地域に住み・関わる当事者の視点から、課題を理解します。

・日本全体・世界全体との比較。三陸に起きつつあることは、日本全体にとっての課題なのでしょうか？世界にとってはどうなのでしょうか？三陸復興の課題の普遍的側面についても理解します。
・地域課題解決のための構想力。民間・行政等のアクターの連携による課題解決方法を構想し、発表します。その際、先に挙げた地域視点での課題把握、解決を重視します。

■実施スケジュール

回	日程	概要
1	10 月 2 日	自己紹介、オリエンテーション
2	10 月 16 日	各自調査内容を発表
3	10 月 23 日	（台風で休講）
4	10 月 30 日	第一回フィールドワークの内容検討、アポイント等分担
5	11 月 6 日	アポイント確認（内容など場合によって再検討）、資料作成分担
6	11 月 13 日	事前資料の確認
7-8	11 月 18～19 日	第一回フィールドワーク実施（女川町、南三陸町）
9	11 月 20 日	第一回フィールドワークのふりかえり
10	11 月 27 日	第二回フィールドワークに向けた調査割り振り
11	12 月 4 日	調査内容報告
12	12 月 11 日	第二回フィールドワークの内容検討、アポイント等分担
	12 月 18 日	アポイント確認（内容など場合によって再検討）、資料作成分担
13	1 月 15 日	事前資料の確認
14-15	2 月 13-15 日	第二回フィールドワーク実施（石巻市、女川町、陸前高田市、大船渡市、釜石市）

■学生の感想

・ 今回のフィールドワークでは、多くの役人や起業家、住民の方々がこれからの三陸の産業の中心として 1 次産業に期待していらっしゃることがわかり、大変興奮した。現状日本において、1 次産業が単一で利益を上げ続けるのは大変難しいと聞いている。6 次化も含めて、6 次化だけに頼りすぎることなく、未来を見据えた新しい農のあり方が問われている時代である。 私は農学を学ぶものとして、ひっ迫する農の現状に新しい光をもたらすような、地域・生産一つ一つに適応した技術を開発、提供し、三陸地域など、1 次産業に希望を託す地域の助けとなりたい。（農学部 1 年・女性）

1-6-8. 展開ゼミ「福島における人権保障と共生の課題—原発事故後を生きる人々に寄り添う」

■担当教員：江口怜、藤室玲治

■受講者：6 名（宮城教育大学生 1 名含む）、TA 1 名、聴講生 1 名

■授業時間帯：第 2 セメスター　金曜日 5 限

※事前フィールドワークに 1 回参加（福興 youth の活動）。本番のフィールドワークは 2 月 16 日（金）～18 日（日）に行い、ボランティア団体「東北大学福興 youth」と共催の「福島県川内村ボランティアツアー」として実施し、19 名が参加した。

■授業概要（シラバスより）

2011 年 3 月 11 日の東日本大震災に伴う福島第一原子力発電所事故は、多くの人びとの暮らしを破壊し、社会に亀裂を生んだ。社会全体として風化が進む中で、原発事故による避難者数はいまだ 8 万人に上り、避難指示解除や自主避難者への支援打ち切りなど、先行きの見えない中で新たな事態が生まれている。福島県では事故 4 年を経て自殺者が急増し、その背後には「曖昧な喪失感」があるとの指摘もある。さらに今回の原発事故は、原子力政策や被曝、帰還等に関する見解の相違が、地域社会や家族内に分断を生じさせ、事故以前と同様の暮らしを営むことやコミュニティを維持することを困難にしてしまった。

本授業は、こうした原発事故後の福島が抱える課題を大上段に議論するというよりも、事故後を生きる人々に寄り添いながら、人々の人権保障と共生の困難と可能性について考えることを目的とする。具体的には、福島県内（主にいわき市、郡山市を予定）の仮設住宅や復興公営住宅を訪問してのボランティア活動、NPO 法人・社会福祉協議会・学校等への視察やヒアリング等を行う 2 泊 3 日程度のフィールドワークを実施し、集中的に福島の抱える課題を学ぶ。

■学習の達成目標（シラバスより）

（1）原発事故及び事故以降の福島の抱える課題の概要を理解する。

（2）福島の抱える課題について、論争的なテーマに関して立場の異なる論者の見解を理解し、批判的に検証しながら自らの考えを持つことができる。

（3）福島で実際に暮らす人々の話を聴きながら、福島の抱える課題を当事者の視点から理解・想像することができる。

（4）福島の抱える課題に対して、「人権保障」と「共生」という観点から理解し、その課題解決の方法について一定の妥当な見解を持つことができる。

■協力団体

・NPO 法人コースター（全般的なコーディネート、講義、資金面での援助等）
・ふくしま心のケアセンター・ふたば出張所（フィールドワークでの視察受け入れ）
・NPO 法人カタリバ（ふたば未来学園付設のコラボ・スクール視察の受入れ）
・NPO 法人昭和横丁（フィールドワーク内の川内村でのイベントで連携協力）
・一般社団法人 AFW（フィールドワーク中の浜通り視察をコーディネート）

■授業のスケジュール　※フィールドワークを主とするため、講義は適宜休講とした。

回	日程	概要
1	10 月 6 日	オリエンテーション
2	10 月 13 日	原発事故の概要と福興 youth の取り組み報告（福興 youth 代表・山﨑英彦） 今後の授業計画の確認
3	10 月 20 日	NHK スペシャル　東日本大震災「それでも、生きようとした～原発事故から 5 年」（2017 年 1 月 9 日）を視聴し、ディスカッション
4	10 月 27 日	川内村の現状と課題（NPO 法人コースター理事・坂上英和氏） フィールドワーク訪問先検討、事前学習会担当決め
5	11 月 24 日	事前 FW の振り返り、調べ学習の報告①
6	12 月 8 日	事前 FW の振り返り、調べ学習の報告②
7	12 月 15 日	事前 FW の振り返り、調べ学習の報告③
8	12 月 22 日	フィールドワーク中の視察先および企画の検討

9	1 月 19 日	フィールドワーク中の視察先および企画の検討
10	2 月 2 日	フィールドワーク中の企画の打合せ
11	2 月 15 日	フィールドワーク事前講習会・準備
12	2 月 16 日 ～18 日	福島県川内村ボランティアツアー（フィールドワーク） 【1 日目】ふくしま心のケアセンター・ふたば出張所（富岡町）視察、NPO 法人カタリバ主催、ふたば未来学園高校コラボ・スクール（広野町）視察 【2 日目】福島県川内村にて、郡山市の仮設の元入居者の「同窓会」としてイベントを企画。約 40 人が参加。サロン活動・健康体操・節分企画等。 【3 日目】一般社団法人 AFW の吉川彰浩氏の案内で、福島第一原発近隣の浜通り沿岸部（富岡町、大熊町、浪江町）を視察

■学生の感想

「帰還困難区域以外も、復興は十分に進んでいない。確かに前述のとおり、家や商業施設などの外観の復興は進んでいる。しかし、町を歩く人はほとんどいないし、人と人の交流の機会なども十分に回復されていない。私たちが普段当たり前に見ている光景、当たり前に過ごしている環境が、そこでは当たり前ではないのである。私たちがフィールドワークの 2 日目で行ったイベントでも、「1 年ぶり」という言葉や、「いつも 1 人だから今日は楽しい」などの言葉を耳にした。ただでさえ、地域内の人間関係が希薄化している現代社会において、より住民の孤立化が進んでいるように感じた」

「福島県の被災者の方々の“あいまいな喪失”を私たちは、完璧に理解することは出来ないだろう。しかし、私は、ふくしま心のケアセンターの配布資料にあった『～「白か黒か」ではなく、「白と黒と」の考え方をしましょう。故郷を大切にしながら、新しい生活を豊かにしていいのです。～仲間も大切、家族も大切。そして、自分も大切。みんな考え方が違ってもいいのです。～』（「しなやかな心でしなやかに生きるために」）の考え方を大事にして、孤独に感じている人々の心身の健康を見守ることのできる人になり、これからも福島の復興に少しでも役に立ちたいと感じた」

【写真】FW2 日目 川内村での交流イベントの様子（左）
FW3 日目 富岡町の帰還困難区域付近の視察の様子（右）

1-7. 課外プログラムの実施（高度教養教育開発事業として）

江口怜先生が採択された高度教養教育開発事業「多様な他者との共生に向けた現代的教養の育成に資する人権教育プログラムの開発事業」の一環として、今年度は単位とはならないが、人権教育に関わる体験プログラムを 3 つ実施したので紹介する。

1-7-1. 課外プログラム①　子どもの貧困問題解決に向けた取組に学ぶボランティア体験プログラム

SCRUM 人権共生部の活動とも連携しつつ、子どもの貧困問題に取り組む団体でボランティア活動を行う体験プログラムを実施した。

■実施時期：8 月 6 日のガイダンス、10 月 16 日の体験報告会、その間 2 日間以上のボランティア

※すべてのプログラム参加者は TGL の課外活動プログラムに認定し 1 ポイントを付与。

■参加者：20 名

■協力団体：NPO 法人 TEDIC、NPO 法人 STORIA、せんだいこども食堂

■ガイダンスの講師：門馬優さん・石岡里緒菜さん（TEDIC）、佐々木綾子さん（STORIA）、門間尚子さん（せんだいこども食堂）

■学生の感想

「遊んでいると本当に普通の子どもにしか感じない子どもたちにも、よくよく話したり聞いたりすると複雑な家庭環境をもつ子もいることを実感しました」

「今回の報告会で、体験したことや意見を共有したり、社会のあり方・対応のしかたを考えたりすることで、子どもの貧困問題に対する自分の考え・知識をより一層深めることができた」

「（体験報告会に参加して）みんなそれぞれ違う視点を持っていて（むしろ自分よりもよく見ていて考えていて）すごいなと思ったし、勉強になった」

【写真】ガイダンスでお話される門馬尚子さん（左）、体験報告会での振り返りの様子（右）

1-7-2. 課外プログラム②　仙台自主夜間中学ボランティア体験

■説明会：2 月 14 日（水）16:30～18:00　　■説明会参加者：10 人

■ボランティア体験日程：2 月 21 日、23 日、3 月 7 日、21 日、23 日

■振り返りミーティング：4 月 5 日（木）

1-7-3. 課外プログラム③　障がい児者との共生に向けた取組に学ぶボランティア体験プログラム

■ガイダンス：3 月 15 日（木）13:00～14:30　　■体験報告会：4/5（木）

■ボランティア体験日程

①3 月 10 日（土）旧優生保護法下の「強制不妊手術」当事者の声を聞くゼミ学習会参加

②3 月 16 日（金）アフタースクールぱるけ南仙台・ボランティア

③3 月 18 日（日）アート・インクルージョン・ファクトリーOpening Event 参加

④3 月 19 日（月）医療型障害児入所施設「エコー療育園」の見学

⑤3 月 20 日（月）CIL たすけっと 10 日サロン＠長町に参加

⑤3 月 30 日（金）CIL たすけっと交流企画に参加

1-8. 高校との交流

東北大学のオープンキャンパスに来る高校生との交流、また被災地学習やリーダー研修等で東北地方を訪れる高校から東北大学生ボランティアとの交流の希望等があり、毎年、何校かの高校と交流をさせていただいている。

高校生にとっては、年齢の近い大学生の被災地での取り組み等が目標になりやすく、また大学生にとっても高校生に自分たちの取り組み等を伝えたり、高校生とのワークショップをリードすることは、良い経験になるようだ。ここでは 2017 年度の高校との交流について報告する。

なお、ここで紹介したのは課外・ボランティアセンターとしてアレンジした交流事業に限られ、他にも、東北大学の各ボランティア団体では独自に高校や高校生との交流が行われている。

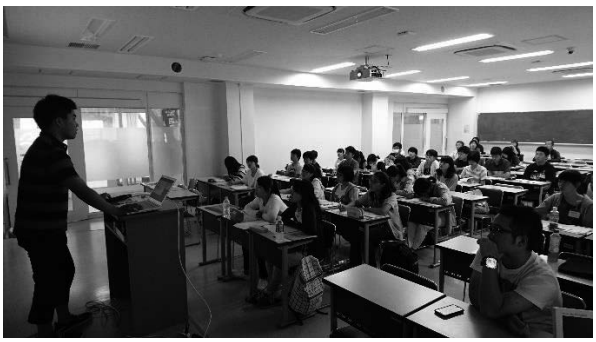
1-8-1. オープンキャンパスでの高校生との交流

2017 年度のオープンキャンパスは、例年と同じく川内北キャンパス講義棟 A101 教室において、被災地の被害状況や課題、SCRUM の活動を紹介するパネル展示を行った。また教室には学生スタッフが常駐し、普段の活動で感じたことを伝えたり、パネルの難解な部分の解説を行った。

今年度からの取り組みとして、来場者に被災された方の思いを知ってもらう目的で、活動中に撮影した写真とその写真に対応した「つぶやき」（現地住民の印象深かった発言を記録したもの）を模造紙にまとめて掲示した。特につぶやきは来場者の間で関心を寄せる声が多かった。

展示の来場者としては、1 日目（7 月 25 日 9：00～15：30）に 87 名、2 日目（7 月 26 日 9：30～15：00）に 80 名が訪れた。現地の住民の方や SCRUM メンバーの中でも震災の記憶の風化が進むなかで、大勢の人に被災地の状況を伝えられたことは、意味のあることであったと思われる。また、オープンキャンパスの一企画としても、「学生ボランティア」という一つの大学生像を将来の大学進学を希望する者に伝えられたことは評価に値するだろう。

2 日目の午後は、A101 教室での展示と並行して、A102 教室で兵庫県の神戸高校、東灘高校、御影高校、葺合高校の学生 33 名との交流企画を行った。SCRUM の代表と SCRUM 各参加団体所属の 1 年生が高校生に、自分とボランティアの関係についての発表や活動紹介を行った。その後は、高校生が 4、5 人の班に分かれ、各班に SCRUM メンバー1 人が入ってフリートークを行った。時間の関係上多くは伝えられなかったが、東北から遠く離れた地域に住んでいても東日本大震災に関心をもつきっかけとなればと思う。



【写真】オープンキャンパスでのパネル展示の様子（左）、兵庫県の高校生への活動紹介（右）

1-8-2. 近畿大学附属高校との交流

今年度初めての試み。2017 年 9 月、近畿大学附属高等学校の教員よりセンター宛にメールが届き、英語特化コース 2 年生の東北での研修旅行（「持続可能な開発」に関する学習、観光の力で東北の復興を考えるプランを作成する）に関して、東北大学生との協働学習の依頼があった。12 月 19 日には同校の教員が東北大学に来て打ち合わせを行った。

研修旅行は 3 月 11 日～13 日に行われるが、12 日を SCRUM との交流の日とした。SCRUM からは 8 名の学生と 2 名の教員が参加した。石巻市の被災地（がんばろう石巻看板付近）を視察した後、市街地を 6 班に分かれて高校生と大学生でフィールドワークし、その経験を踏まえて岩沼の宿舎でワークショップを行った。ワークショップの前には、SCRUM の学生が活動報告を行い、その後は班ごとに高校生の作成したプランを練り直すワークショップを行った。

参加した高校生からは「フィールドワークとかすべての経験をいかせて、ワークショップすることができたから、前回よりもいいものができたと思う」「サポートのおかげで良い発表ができ、今後のビジョンが見えたと思います」「また東北に来て学びたいです」「年が 2、3 個しか変わらないのに、ボランティア活動をし、貢献しててほんとうに、うらやましいし、感心させられた」などの感想があった。

1-8-3. 神戸大学附属中等教育学校

神戸と仙台との被災地間の交流をすすめる神戸大学附属中等教育学校とは、2016 年 3 月に同校が仙台を研修で訪れた際から交流がはじまり、2016 年 12 月にも東北大学で同校の生徒と東北大学生の交流を行った。本年度は 2018 年 3 月 14 日（水）に仙台を訪問してくれた神戸大学附属中等教育学校生 4 名と東北大学生 4 名とで、被災地の支援や復興の現状についての意見交換を行った。

1-8-4. 静岡市立高校

静岡市立高校との交流は 2016 年にはじまった。この年の 3 月 29 日に生徒 9 名と教員 2 名が東北大学を訪問し、図書館で東北大学生ボランティア 2 名と交流した。こちらは教員 1 名、図書館職員 1 名と東北大学生 2 名で対応した。

その翌年には、2017 年 3 月 28 日・29 日の 2 日間にわたって交流した。3 月 28 日には石巻市の門脇地区で震災経験について地元の方からお話をうかがった後、大森第 3 仮設住宅集会所で住民の方々と交流を行った。高校生は 10 名で、東北大学生 1 名が参加し、高校生に足湯ボランティアのやり方等を教えて住民の方々に足湯を行った。また静岡市立高校生たちは、静岡名産の黒はんぺんや桜エビのかき揚げ等の料理を住民の方々にふるまった。また、たまたま当時、東北大学を訪問していた熊本県立大学生 2 名も一緒に活動した。活動後、東北大学川内キャンパスで、東北大学生と熊本県立大学生がそれぞれの取り組みを紹介し、その後、静岡市立高校生とグループ・ディスカッションを行った。翌日の 29 日には、東北大学生・熊本県立大学生とともに仙台市若林区の「荒浜再生の会」を訪問し、荒浜の被災状況を視察し、地元住民の方から被災状況などについてお話をうかがった後、静岡市立高校生は東北大学青葉山キャンパスの工学部食堂で昼食を取り、そこから静岡に帰っていった。

2018 年も 3 月 28 日・29 日に同様の交流を行う予定である。

1-9. 国内の大学との交流

東北に被災地の状況を学びに来た、あるいはボランティア活動をしに来た国内の他大学と、東北大学生ボランティアの交流を行った。熊本県では逆に東北大学生が熊本大学や熊本県立大学生と交流させてもらっているが、それについては「2-10.緊急時の災害対応」を参照いただきたい。他にも、各ボランティア団体毎に他大学との交流はある。

1-9-1. 東京大学 UTVC との交流

東北の被災地で学習支援の活動を行っている学生ボランティア団体である東京大学 UTVC 主催する被災地ツアーで 3 月 18 日に 16 名の東京大学生が東北大学に来て、東北大学生ボランティア 5 名と交流した。2013 年まで東北大学におられて東日本大震災学生ボランティア支援室の運営委員をされていた米村滋人先生が引率されていた。

その日は若林区の震災遺構・荒浜小学校を視察後に東北大学に来られ、東北大学から SCRUM の活動内容と、被災地の現状などを報告した後、グループディスカッションを行った。

1-9-2. 神戸大学東北ボランティアバスとの交流

岩手県陸前高田市等で活動している「神戸大学東北ボランティアバス陸前高田班」の学生 7 名と引率のコーディネーター1 名が、活動の最終日に東北大学に立ち寄られ、主に陸前高田市で活動している東北大学のボランティアグループ「ぽかぽか」のメンバーと意見交換を行った。

1-10. 国外の大学との交流

文化交流や被災地視察のために被災地を訪問する国外の大学や大学生が、東北大学生ボランティア等と交流することも多い。以下に紹介する 3 つの交流は、グローバルラーニングセンターと連携して実施した。

1-10-1. ベイラー大学との交流プログラム“Humans in Minamisanriku”

6 月にアメリカのベイラー大学生 7 名が東北大学と南三陸町・気仙沼市等を訪問した。東北大学生も 7 名が交流プログラムに参加し、事前に Skype や Facebook でコミュニケーションを取り、6 月 28 日にベイラー大学生が東北大学に来られた際に、被災地の現状などを大学生から英語でお伝えした。また気仙沼市在住の元消防士の佐藤誠悦さんのお話もうかがった。

その後、7 月 1 日～2 日にベイラー大学生と東北大学生が混ざった 4 グループに分かれ、南三陸町で地元の方のインタビューを行い、被災体験や現在の心境についてお話をうかがった。インタビューは後に編集して英語字幕を付けて“Humans in Minamisanriku”としてインターネットで公開している。なお、交流プログラムは TGL ポイント対象の課外活動として行われ、参加した東北大学生 7 名にはポイントが付与された。

このプログラムは、ベイラー大学のプレフューメ・榎本裕子先生、地元の佐藤誠悦さん、グローバルラーニングセンターの島崎薫先生、課外・ボランティア活動支援センターからは藤室が参加して実施した。

1-10-2.「あしながインターンシップ」のインターン生との交流

「あしなが育英会」の依頼により，同会が海外より募集したインターン生との交流事業を実施した。7 月 7 日～9 日にかけて，東北大学生 10 名が参加して、あしなが育英会のインターン生との交流事業を仙台市等で実施した。また 9 月 28 日～10 月 1 日にかけて，東北大生 9 名とインターン生 15 名が南三陸町等で民泊しながら交流した。受け入れにあたってはグローバルラーニングセンターの島崎薫先生にご尽力いただいた。

1-10-3　メリーランド大学生との交流

アメリカメリーランド大学の学生は 2015 年 3 月から毎年本学を訪問している。2018 年も 3 月 20 日にメリーランド大学の学生 13 名が東北大学を訪問し、東北大学生と交流を行い、その後 24 日まで南三陸町等で東北大学生とともに被災地視察を行う予定である。

1-11. 会議・シンポジウム等

1-11-1. センター主催のイベント

（1）シンポジウム「震災の記憶を伝え、災害を防ぐための大学生と地域の連携」

仙台市で開催された防災推進国民大会（通称「ぼうさいこくたい」）2017 において、課外・ボランティア活動支援センター主催セッションとして「震災の記憶を伝え、災害を防ぐための大学生と地域の連携」を 11 月 26 日に開催した。40 名程が来場した。本学のボランティア団体の SCRUM と「たなぼた」から、被災地支援の活動や、地域での防災活動について報告を行った。また学外からは熊本県立大のボランティアステーションの学生 2 名をお招きし、熊本における日頃の活動と地域との連携について報告してもらった。

1-11-2. 他団体・機関との共催イベント

（1）学問と社会をつなぐサロン共催イベント

課外･ボランティア活動支援センターでは､東北大学学友会登録団体｢学問と社会をつなぐサロン」と共同で 10 月に「ボランティアに対する意識および社会的意識に関する調査」を行った。その結果を公表するために、報告会「震災 7 年目に改めてボランティアの社会的意義を考える～東北大生への意識調査で見えてきた課題と現在～」を 2017 年 11 月 17 日に開催した。20 名程の来場があった。

なお、調査結果は本紀要 135-6 頁にまとめているので参照されたい。また 17 頁の研究ノートでも分析しているので、そちらも参照されたい。

報告会ではまず双方の団体から各々の活動を報告し、また調査内容についても報告した。その後、来場者を 5~6 人の小集団に分けてディスカッションを行った。終了後に記入してもらったアンケートからその様子を見てみたい。

- 自分がボランティアをしていて、被災者が個人の力ではどうしようもない状況にあるということがわかるようになったが、そこから文献を読んだりということはしていなかったので勉強しようと思った。（工学部建築学科 2 年・女性 SCRUM スタッフ）
- 学ぶこと、動くこと　どちらも大切。もっと考えて行動をしたい、刺激を受けました!!（医学部保健学科 2 年・女性）
- 普段感じていることの意識の裏付けもできてとても納得のいく結果でした。これだけのサンプルを集められて良かったですね。（経済学部 2 年・男性 SCRUM スタッフ）

（2）S-チル共催シンポジウム

12 月 9 日に、本学の教育学研究科内に震災後設置された「震災子ども支援室」（S-チル）との共催シンポジウム「東日本大震災後の子ども支援～高校生・大学生が見つめる被災地の現在～」を開催した。2017 年 5 月頃、「震災子ども支援室」からお話をいただき、学内のボランティア団体に声をかけたところ、HARU、ぽかぽか、インクストーンズ、福興 youth、たなぼた、NPO 法人キッズドア（東北大学生が参加）の 6 団体が関心を持ち、シンポジウムに登壇することになった。

その後、6 月 26 日にキックオフミーティングを行い、その後も何度かミーティングを開いて準備を進めた。シンポジウムは高度教養教育・学生支援機構も共催して開催することになった。

12 月 9 日のシンポジウム当日は、工藤教育学研究科長および花輪機構長からの挨拶があり、午前中に 6 つの高校（岩手県立大船渡高校、岩手県立一関第一高校・附属中学校、宮城県気仙沼高校、宮城県石巻西高校、仙台白百合学園高校、福島県立磐城桜が丘高校）からポスター発表があった。午後には、6 つの学生ボランティア団体が登壇してプレゼン発表を行った。当日は大勢の方が参加した。なおシンポジウムの様子は毎日新聞に掲載され、NHK 仙台でも放映された。

学生ボランティア団体にとっては、震災後の自分達の活動の歩みを振り返り、今被災地に向き合う意味を考え直す良い機会となった。貴重な報告の機会を下さった S-チルの皆さまには深く感謝したい。

1-11-3. 他団体・他機関のイベントでの報告等

（1）世界防災フォーラム

先述した 11 月の防災推進国民大会とほぼ同時期に開催された「世界防災フォーラム」において 11 月 27 日、東北大学のボランティアグループの HARU と、センターの学生スタッフ組織 SCRUM の取り組み等を、学生 4 名から英語で報告した。

（2）復興庁主催「NPO と学生がつながろう！～持続可能なコミュニティ支援活動のために～」

2 月 18 日、復興庁主催のイベント「NPO と学生がつながろう！～持続可能なコミュニティ支援活動のために～」に SCRUM から学生 6 名が参加した。

このイベントは午前・午後の 2 部構成であった。午前中は参加 8 団体（学生ボランティア 5 団体、NPO3 団体）の活動報告会で、SCRUM からは代表の山本が活動報告を行った。午後は、日本 IBM 様による「プロジェクト・マネジメント」のワークショップが行われ、参加学生は岩手・宮城の 2 グループに分かれ新歓ツアーを題材にワークショップを行った。

1-12. 東北大学学友会の支援・連携

ここでは主に、学生支援課活動支援係が行った、東北大学学友会への支援、学友会との連携活動について報告する。

1-12-1. 学生団体の登録ならびに説明会の開催

今年度の学友会団体は、全 187 団体、約 10,000 名の総数の学生から、学生団体登録継続届・登録申請書を受け付け、これらの団体の自主的な活動支援を行った。また、10 月 20 日には、全ての届け出のなされた団体の代表者に対する説明会を開催し、当日、149 団体の代表者ならびに顧問教員が参加し、課外活動時における様々な注意喚起を行った。

1-12-2. 新歓および大学祭の支援

平成 29 年度の新入生歓迎行事（【表 8】）ならびに大学祭においては、それぞれ学生の自主的な実行委員会が組織され運営は全て学生に任されているが、それら運営を指導・サポートする教職員による体制を構築し支援を行ってきた。

【表 8】新入生歓迎行事一覧

日時	行　事　名	場　所	主　催
4/15	Spring　Festival	川内北キャンパス	新入生歓迎会実行委員会
4/16	新入生歓迎合同演奏会	百周年記念会館 川内萩ホール	新入生歓迎会実行委員会
4/22	春のスポーツ大会	川内北キャンパス	学友会体育部

また、大学祭は 11 月 3 日から 11 月 5 日の 3 日間にわたり、川市北キャンパスを主会場として開催され、約 33,000 名の来場者（大学祭実行委員会報告）で賑わった。今年のテーマ「もどれ童心、おどれ若人」のもと作品展示や野外ステージ等が繰り広げられた。

【写真】大学祭の様子（左）、大学祭　落語研究部（右）

【写真】大学祭　クロースアップマジック同好会（左）、大学祭　ブルーグラス同好会（右）

2. 学生スタッフチーム SCRUM の活動報告

課外・ボランティア活動支援センターでは、教職員主体の事業に加えて、教職員・学生の共同企画事業や、学生が主体となった事業・活動が展開されている。

その主軸となるのが、ボランティア活動を推進するための学生スタッフチーム SCRUM で、テーマごとの部の活動、「ぽかぽか」「インクストーンズ」「福興 youth」という 3 つの参加団体、それらを統合する事務局が連携しながら、多様な活動を行ってきた。以下では、本年度における SCRUM の主な活動について報告する。

2-1. 2017 年度の学生スタッフチーム SCRUM の概要

課外・ボランティア活動支援センターは、その前身の東日本大震災学生ボランティア支援室の頃から教員と学生スタッフチームが一体となって企画・運営してきた。2015 年に学生スタッフ組織の愛称がスクラム(SCRUM)と定まり、メンバーのアイデンティティのよりどころとなった。

さらに 2016 年度から 2017 年度にかけて、スタッフ登録している学生が大幅に増加した。2016 年度 3 月には 37 名だったのが、2017 年 12 月には 66 名になっている。増加した学生の多くは 1 年生である。スタッフ数の増加により、様々な活動を行うことが可能になった。

現地でのボランティア活動は、2016 年度から引き続き、岩手で活動する「陸前高田応援サークルぽかぽか」・宮城で活動する「東北大学インクストーンズ」・福島で活動する「東北大学福興 youth」の 3 団体が、SCRUM の参加団体として担当し、スクラムスタッフの多くは 3 団体のいずれかに所属して活動を行った。

また 2017 年度には、「ポスト震災」をにらんで、SCRUM 内部に「人権共生部」という普遍的な社会課題に対してアプローチする活動が生まれた。また震災については、意識的な次世代への継承活動を行うために「震災伝承部」という活動も生まれた。

以下、 2017 年度の SCRUM の運営について、大きな変化に着目しながら紹介していく。

2-1-1. 変化① 部門制廃止と参加団体制の開始、部の発足

1 つ目の変化としては、被災 3 県で活動する「部門」が廃止され、それぞれの部門が独立した新たな団体となったことである。岩手部門である「ぽかぽか」だけは、以前から別のボランティア団体でもあったが、他の宮城県で活動する「インクストーンズ」、福島県で活動する「福興 youth」も別団体として学生ボランティア団体登録を行った。

なお、別団体となって独立性は強めたが、SCRUM と密に連携し、ボランティア・スタディツアーなどの活動を企画・運営するという意味で、この 3 団体は「SCRUM 参加団体」とも呼ばれている。

また、テーマ毎の活動として国際部・人権共生部（通称：ひととも）・震災伝承部の三つの部が発足した。部は、参加団体とは異なり、特定のフィールド（活動拠点）ではなく、特定のテーマ（国際部：留学生支援の活動、人権共生部：人権に関する様々な問題、震災伝承部：震災の教訓・被災地の現状の学習・発信・継承）に関して活動を行うグループである。これにより、参加団体には所属せず特定の部のみで活動するメンバーも数名いるようになり、SCRUM 所属スタッフの SCRUM に対する関与の仕方が多様化した。

2-1-2. 変化② 事務局と担当制の発足

2016 年度は、メンバー増加に対する対応策として、SCRUM のなかに広報・渉外・財務・総務・国際の 5 つの局を設置することで役割分担を行っていた。しかしながら、縦割りの弊害（局間の連携が取れない、仕事の重複、全員で取り組むべきことも特定の局のみの負担となる、局が次々と新しい仕事を生み出すことによる多忙化等）が指摘されたことにより廃止され、2017 年度は事務局が置かれ、この事務局会部に広報・渉外・会計・総務それぞれに担当者が設置され、各担当者が仕事の割り振りや集約を事務局ミーティングに話し合って決めて実行するという体制に変化した。なお、2016 年度に局として存在した国際局は、2017 年度より先述の通り部として活動するようになった。

また事務局会議は、SCRUM スタッフ全員が参加する全体会議と、ほぼ交互に開催されるようになった。事務局会議出席者は、役員（代表・副代表・会計）と各担当に加えて、部の担当者と、参加団体からの代表者であり、SCRUM 運営に必要な調整が行われる会議となった。

また、2017 年 11 月には、これまで教員が主導して行ってきた高校生向けの企画などを担う担当として、事務局会に企画担当を置いた。なお、高校生向けの企画に関しては、2017 年度後半から高校生向けの支援を行う団体である、高校生支援団体 bridge とも連携しながら行っている。

各担当の具体的な仕事の内容は【表 1】の通りである。

【表 1】2017 年度の担当制と主な仕事内容

担当名	主な仕事内容
総務	物品管理・イベント（集中会議・芋煮会等）の企画など
渉外	井戸端会議・ボランティアフェア等の連絡調整
広報	三角柱や立て看板の作成、SNS での発信など
会計	SCRUM 全体の会計管理・助成金申請など
企画	高校生向け企画の連絡調整など

2-2. 総務

総務は、新歓イベントの企画、事務局会議や全体会議、集中会議の運営などを行なってきた。また 2017 年度から、卒業生との関係を維持・構築する「友の会」の運営も行っている。

2-2-1. 新歓イベント

本年度の新歓イベントは、幹部学年を中心にプロジェクトチームを作り企画した。「とにかくたくさん新入生を獲得する」ことと、昨年の反省を踏まえて「スクラムと参加団体の関係性を説明する」の 2 点を目標に実施した。運営兼参加の「ボランティア・フェア」に加え、スクラムの独自の新歓イベントとしては、「スタッフ説明会」、「晩餐会」、「お花見」、「おやつ会」の 4 つを、それぞれに担当者を立てて実施した。これらのイベントの費用は、スクラムメンバーからの集金によって賄い、「会計」担当が管理を行った。また、これらのイベントを周知させるために「広報」の担当を設け、チラシや立て看板、SNS などを用いて広報活動を行った。成果として、20 名以上の新入生を獲得できた。

2-2-2. 集中会議

本年度も、春・夏の長期休みにおいて「集中会議」を実施した。「集中会議」の内容は「全体会議」や「事務局会議」によって議論し企画した。「春の集中会議」（3 月）では、「参加団体制」、「担当制」

や「部」など本年度からの新体制についての共有・議論や、卒業生によるパネルディスカッションを通してこれまでのスクラムを知りこれからのスクラムを考えるといった内容となった。「秋の集中会議」（10 月）では、各参加団体からの報告に加えて部からの報告や、スクラムの業務を整理し優先順位をつける「CUDBAS ワーク」、新体制をふりかえるなどのプログラムを実施した。2 日目の午後には広瀬川の河川敷で芋煮会も行った。主なイベントを【表 2】にまとめた。

【表 2】2017 年度の主な会議・イベント一覧

イベント名	開催日	内容
春の集中会議	2017.3/25-26	新体制の説明、ボランティアにおける対人援助のあり方、参加団体の活動報告、グループワーク（今後の活動、SCRUM の国際化、他の自然災害への対応、日常的なボランティア活動への対応等）、OB のパネルディスカッション、個人の振り返りと目標設定等
新歓講演会	4/13	釘子明氏（陸前高田市の語り部）講演会
スタッフ説明会	4/14,4/20, 4/26	大学と SCRUM の関係紹介、SCRUM と参加団体・部の活動紹介等
その他新歓企画	4/16, 4/21	花見（16）、 おやつ会（21）
新歓合宿	5/13-14	富岡町おだがいさまセンター（郡山市）視察、仮設住宅見学、WS（新入生の目標設定）、上回生のロールモデル発表、レク等
秋の集中会議	10/14-15	参加団体・部の活動報告、CUDBAS ワーク、個人ふりかえりグループワーク、各担当ワールドカフェ、芋煮

2-2-3. 全体会議、事務局会議

毎週火曜日に、SCRUM スタッフ全員が原則として参加する「全体会議」と、一部のスタッフが集まる「事務局会議」を、ほぼ交互に開催するようにした（課外・ボランティア活動支援センター主催の研修会が実施され、会議が無くなる火曜日もある。研修会については 49 頁参照のこと）。日程については【表 3】に示した。

【表 3】SCRUM の全体会議・事務局会議・研修会一覧

会議名	開催日（原則は火曜日）
全体会議	4/18 ,4/25, 5/9, 5/16, 6/6, 6/13, 7/11, 10/3, 10/24, 10/31, 11/7, 11/21, 12/12,1/9, 1/23, 2/13
事務局会議	4/4, 4/11, 5/2,5/23, 6/27, 7/4, 8/1, 9/19, 10/10, 11/14, 11/28, 12/19, 1/16
（研修会）	5/30, 6/20, 10/17, 12/5

2-2-4. ”SCRUM”友の会

2017 年 3 月より、「”SCRUM”友の会」と名付けられた LINE グループによって卒業生同士・現役生との連絡や情報共有がなされるようになった。本年度は、米村先生を囲む会の開催や卒業生の追いコンなどが呼びかけられた。「”SCRUM”友の会」には、主にこれまでスクラムに関わりがあり、現在はスクラムを離れている人が多く参加している。

2-2-5. その他総務の活動

セメスター終わりの 9 月と 2 月に倉庫・ボラ室の掃除・整理を行った。また、本年度新歓費用として集め、新歓終了後に余ったものを「SCRUM 宴会費」として、スタッフの懇親に利用することとし、その管理を行った。

【写真】秋の集中会議 2 日目の芋煮会 10/15（左）、新歓合宿での集合写真 5/14（右）

2-3. 渉外

渉外としては、前年度に引きつづき、主にボランティアフェア（以前のスタートアップフェア）、井戸端会議の企画・運営に携わってきた。

2-3-1. ボランティアフェア

ボランティアフェアとは、東北大学内外のボランティア団体や NPO 法人などがブース形式で出展をし、新メンバー・ボランティアの募集や団体の活動紹介などを行う企画である。昨年度までは「スタートアップフェア」と呼んでいたのを、2017 年度から名称変更した。各団体における新メンバーの発掘や活動の広報、団体間の交流促進の場となっている。

今年度の動きとしては、センターの支援対象の変化に伴い、東日本大震災関連以外の活動を行う団体も出展したことが挙げられる。それによって、より幅広いボランティア団体の活動紹介が行われるようになった。

今年度 3 シーズン 13 日間実施したボランティアフェアの参加者延べ人数は、282 名と昨年度(276 名)を上回る結果となった。詳細については【表 4】【表 5】【表 6】にまとめた。来年度以降も、ボランティアに興味がある学生・ボランティアをしたい学生と学内外のボランティア団体とが繋がることの出来る貴重な場所として、重要な役割を果たしていくと考えられる。

【表 4】4 月ボランティアフェアの概要

日程	時間	会場	人数	参加団体
4/6（木）	16:00-18:30	川北キャンパス講義棟	13	アスイク、AsOne、キッズドア、SCRUM、STORIA、たなぼた、チャンス・フォー・チルドレン、HARU、baloons+、復興応援団、ブレーンヒューマニティ東日本、みまもり隊、宮城県青年赤十字奉仕団、ReRoots、ワカツク
4/8（土）	9:00-16:00	川北キャンパス講義棟	25	
4/10（月）	16:00-18:30	図書館多目的室	32	
4/13（木）	16:00-18:30	図書館多目的室	34	
4/15（土）	10:00-17:00	川北キャンパス講義棟	25	
4/19（水）	16:00-18:30	図書館多目的室	22	
4/25（火）	16:00-18:30	図書館多目的室	43	

（194）

※6 日： 各学部オリエンテーション、8 日：時間割決め大会、15 日：スプリングフェスティバル

【表 5】7 月ボランティアフェアの概要

日程	時間	会場	人数	参加団体
7/5（水）	16:00-18:30	図書館多目的室	8	アスイク、キッズドア、グッド！、たなぼた、HARU、復興応援団、みまもり隊、ワカツク
7/6（木）	16:00-18:30	図書館多目的室	21	
7/7（金）	16:00-18:30	図書館多目的室	22	

（51）

【表 6】11 月ボランティアフェアの概要

日程	時間	会場	人数	参加団体
11/15（水）	16:00-18:30	図書館多目的室	13	アスイク、As One、キッズドア、SCRUM、グッド！、たなぼた、HARU、復興応援団、bridge、ワカツク
11/16（木）	16:00-18:30	図書館多目的室	9	
11/17（金）	16:00-18:30	図書館多目的室	15	

（37）

※17 日：終了後に学問と社会をつなぐサロンとの合同シンポジウムを開催

【写真】ボランティアフェアの様子　2017 年 4 月

2-3-2. 井戸端会議

井戸端会議は、東北大学内外のボランティア団体などが集まって行う会議のことで、各団体の近況共有やスタートアップフェアの日程、開催概要、その他イベントの調整を行っている。2013 年 9 月よりスタートし、今までに計 33 回開催された。会議には毎回 5~10 ほどの団体が参加し、合同の企画の検討や団体間の垣根を超えた数少ない情報共有の場として機能している。

今年度は、1 月から 2 月にかけて、東日本大震災被災地の現状や本学に関係する学内外のボランティア団体の活動を発信することを目的として、井戸端会議参加団体の有志と SCRUM の部・震災伝承部が連携し、図書館にてパネル展示「東日本大震災後の学生ボランティア活動」を実施した。また、3 月には新たな取り組みとして井戸端会議参加団体のメンバー同士で交流する企画も行われ、他団体のメンバーの交流の機会になるとともに、今後ボランティア団体同士のネットワークが広がっていく第一歩となった。2017 年 3 月～2018 年 2 月までの概要を【表 7】にまとめた。

【表 7】井戸端会議開催の概要（2017 年 3 月～2018 年 2 月）

回数	日程	主な議題	参加団体
25	3/27	4 月ボランティアフェアについて	AsOne、キッズドア、献血推進サークル、こども☆ひかりプロジェクト、SCRUM、ballons+、ReRoots、ワカツク
26	5/18	東北 ・みやぎ復興 マラソン協力依頼について 4 月ボランティアフェアの振り返り 次回ボランティアフェアに関して	キッズドア、SCRUM、HARU、みまもり隊、ReRoots、ワカツク、（仙台放送、アールビーズ）
27	6/8	震災子ども支援室“S-チル”のシンポ協力について 7 月ボランティアフェアについて ボランティア登録団体の学友会登録に関して おおわん主催震災フェアについて	AsOne、キッズドア、SCRUM、たなぼた、HARU、ballons+、復興応援団、ワカツク、（S チル）
28	9/28	7 月ボランティアフェアの振り返り 今後のボランティアフェアの開催について	キッズドア、SCRUM、たなぼた、HARU、bridge、ReRoots、ワカツク
29	10/26	11 月ボランティアフェアについて Gakuvo 学生委員会について ボランティア登録に関して	AsOne、SCRUM、たなぼた、HARU、キッズドア、bridge、みまもり隊、ReRoots、ワカツク
30	11/30	11 月ボランティアフェアの振り返り 冬季の開催イベントについて 4 月ボランティアフェアについて	AsOne、SCRUM、たなぼた、HARU、bridge、ワカツク
31	12/15	震災パネル展示について ワークショップ（各団体の悩み・課題共有、大学への要望出し）	SCRUM、HARU、bridge
32	1/11	冬期の開催イベント（震災パネル展示、ボランティア団体合流会）について 4 月ボランティアフェアについて 新歓期発行の紀要／ジャーナルについて	SCRUM、HARU、復興応援団、bridge、みまもり隊、ReRoots
33	2/8	団体間交流イベントについて 4 月ボランティアフェアについて	SCRUM、HARU、復興応援団、bridge、みまもり隊、ReRoots、

2-4. 広報

広報は、前年度に引きつづき、①ボランティアセミナージャーナルの発行、②三角柱の設置、③SNSの発信を行ってきた。

2-4-1. ボランティアセミナージャーナルの発行

センターでは、2012 年度より、年 1-4 回ほど「ボランティアセミナージャーナル」を発行してきた。ジャーナルとは、東日本大震災学生ボランティア支援室として、2012 年度より発行してきたものであり、2014 年度以降はセンター名義で発行を続けている。内容としては、支援室のイベントの報告や、ボランティア団体の紹介などを行ってきた。2017 年度は、4 月に 12 号を発行している。

12 号では、より多くの新入生に興味を持ってもらうため、参加団体でのツアー企画のフローチャートを写真やイラストを用いて載せたり、メンバー紹介ページを充実させたりした。また、11 号と同様に 4 月入学式前に開催される「新入生特別セミナー 東北大学におけるキャンパスライフについて」の会場で配布した。

2-4-2. 三角柱の発行

2017 年度は 12 種類の三角柱を設置した（【表 8】）。三角柱は東北大学の食堂に設置され、学内外のボランティア団体のツアーやイベント情報が盛り込まれたものである。2017 年度は、より多くの人の目にとまるよう、キャッチフレーズを入れるよう工夫したり、三角柱から四角柱に変えたりと様々な工夫をした。また、食堂に置くことに際して、衛生面の配慮により 2 週間という期間付きでの設置になった。そのため、12 月からは三角柱を月に 2 回のペースで作成・設置している。

【表 8】2017 年度の三角柱一覧

設置時期	掲載内容(ツアー名など)
4 月①	ボランティアフェア、おやつ会、花見、スタッフ説明会、晩餐会、震災語り部講演会
4 月②	仙台市若林区被災地スタディツアー、陸前高田ボランティアツアー、福島県富岡町スタディツアー、仙台市あすと長町ボランティア体験、石巻市ボランティアツアー、福島県いわき市薄磯 祭りボランティアツアー、石巻市のぞみ野ボランティア体験
4 月③	東北学生合同新歓 2017、新歓講演会、石巻市のぞみ野ボランティア体験
5 月	仙台市あすと長町ボランティア体験、石巻市ボランティアツアー、石巻市のぞみ野ボランティア体験、南三陸探検、いわき市薄磯 祭りボランティアツアー、陸前高田ボランティアツアー
7 月①	陸前高田ボランティアツアー、陸前高田ボランティアツアー、福島スタディツアー、波板&ボランティアツアー@石巻、石巻市あゆみ野のぞみ野夏祭りツアー、カフェ活動ツアー@石巻市あゆみ野
7 月②	Good!スリランカキャンプ、Good!広島キャンプ、仙台ミラソン地域課題解決ワークショップ、山元町運動会、東京都教育庁合同防災キャンプ 2017
10 月	山元町ハロウィンパーティー、秋のサンマホタテ祭り、Seaside Volunteer Tour in Sendai part2、ボランティアフェア
12 月①	冬でもぽかぽかツアー、福島ボランティアツアー、年末大掃除ツアー、伝統行事！虎舞ツアー

12 月②	年末大掃除ツアー、年初め！陸前高田ボランティアツアー、若林区中倉復興公営住宅クリスマス会、石巻市のぞみ野新年お楽しみ会
1 月①	仙台若者アワード最終審査プレゼン会、福島県川内村ボランティアツアー、石巻てんこもりツアー、石巻大橋仮設お茶会ボランティア、春休み！陸前高田ボランティアツアー
1 月②	春休み陸前高田ボランティアツアー、石巻てんこ盛りツアー、福島県川内村ボランティアツアー、Seaside Volunteer Tour in Sendai Part 3、仙台自主夜間中学ボランティア募集説明会
1 月③	仙台若者アワード最終審査プレゼン会、石巻大橋仮設お茶会ボランティア、復興住宅でお茶会！in 石巻&仙台

2-4-3. HP や SNS での発信

SNS での広報も大変重要である。SCRUM では、HP にツアーやイベント情報を掲載し、これは主に教員が管理運営した。Facebool や Twitter に関しては、教員と学生が共同で管理し、随時イベントの案内や報告を行った。最近は、各参加団体もブログで活動報告を行うようになっている。

今年度のボランティアフェアは例年と比べ多くの学生が足を運んだ。その理由の一つとして、カウントダウン式に Twitter で告知したり、当日の様子を発信したりしたことがあげられる。今後も、より多くの人へ活動を知ってもらうためには、SNS での広報戦略を立てる必要があるだろう。

2-4-4. メール配信サービスや掲示版

本年度は、ボランティア情報メール配信サービスの登録者が 400 名を超え、メーリングリスト形式で情報を発信するようになった。これは、SCRUM 以外のボランティア団体からの情報も受け付け、教職員が文章を確認した上で配信した。また、厚生会館多目的室のボランティア掲示板にも随時ポスター等を掲示した。

2-5. 会計

会計管理にあたっては、SCRUM 会計担当及び 3 つの参加団体で会計担当者を置き、助成金の申請、通帳管理等を適宜行った。本年度に特筆すべき点としては、二点に触れておきたい。

2-5-1. 助成金の申請・取得

これまで被災地での活動に活用させて頂いてきたドイツ大使館からの寄付金を 2016 年度いっぱいで使いきった。また 2014 年度から助成を受けていた住友商事の東日本再生ユースチャレンジプログラムも 2016 年度で終了したことから、活動を維持継続する上での財源の確保に悩まされた。他に 2016 年度は復興庁「心の復興事業」にも選定され取り組んでいたが、2017 年度「心の復興事業」については、申請したが採択されなかった。

そこで、SCRUM の参加団体となったぽかぽか、インクストーンズ、福興 youth でも、独自に助成金取得に向けた申請を行うようになり、その結果、これまで取得していたものも含めて【表 9】の助成金を取得・活用することができた（Yahoo！基金については別に後掲）。

また、助成金申請や助成に伴なう報告を行うことで、学生自身の、団体の活動の意義や方針、それを実現するための経費に関する自覚が高まった。

【表 9】獲得助成金の一覧（Yahoo！基金については別に後掲）

助成元	申請主体	期間	助成額（円）
Gakuvo Style Fund プログラム	ぽかぽか	2017.8～	300,000
ユニベール財団特定活動助成「自然災害支援プログラム」	SCRUM	～ 2017.10/ 2017.11～	200,000（～10 月） 400,000（11 月～）
みやぎ生協福祉活動助成金	インクストーンズ	2017.4～	345,000
赤い羽根共同募金住民支え合い活動助成	インクストーンズ	2017.7～	100,000
WCRP フクシマ コミュニティづくり支援プロジェクト	福興 youth	2017.9～	200,000
学生サポートセンター「学生ボランティア団体支援」	福興 youth	2017.12～	100,000

2-5-2. Yahoo!基金　被災地復興支援活動「学生ボランティア」プログラム助成

本年度は Yahoo!基金より学生のボランティア活動にご支援をいただくことができた。基金事務局内での審査を経て、7 月より SCRUM および 3 参加団体の活動が助成を受けることとなった。一事業当り最大 50 万円の助成を受けることが可能であり、【表 10】の 11 事業が助成対象となった。資金面での継続の見込が立っていなかった熊本地震の被災地支援に関しても、本助成を受けて活動を継続することができた。Yahoo!基金事務局の皆さま、及び本プログラムに寄付を寄せて下さった皆さまに厚くお礼申し上げたい。なお 2018 年度も引き続き Yahoo!基金よりご支援をいただく予定である。

【表 10】Yahoo!基金 被災地復興支援活動「学生ボランティア」プログラム助成事業

団体名	事業名	実施期間	助成額(円)
福　興 youth	いわき市薄磯地区の地域活動支援を目的とした東北大学生向け海開きボランティアツアーの企画・運営事業	7 月 15 日	118,880
スクラム	平成 28 年熊本地震被災地域の仮設住宅コミュニティ形成支援及び現地大学生への活動ノウハウ提供を目的とした東北大学生ボランティア派遣プロジェクト	8 月 20 日～24 日	500,000
福　興 youth	(1) いわき市での子ども支援、(2) 災害公営住宅でのコミュニティ支援、(3) ふたば地区でのボランティア・スタディツアー	8 月 21 日～8 月 22 日、9 月 3 日、9 月 25 日～9 月 27 日	500,000
ぽかぽか	陸前高田ボランティアツアー	9 月 1 日～3 日	100,000
ぽかぽか	陸前高田ボランティアツアー 全国太鼓フェスティバル	10 月 14 日～15 日	41,200
福　興 youth	福島県被災者ひとりひとりの心に寄り添うボランティアツアー	10 月 29 日、11 月 12 日、11 月 19 日、12 月 17 日	20,7913

ぽかぽか	陸前高田市の復興住宅・仮設住宅でのサロン活動と地域の伝統行事支援と子どもの学習支援、みちくさルーム支援	11 月 11 日～1 月	42,2003
インクストーンズ	宮城県の諸地域支援を目的とした東北大学留学生等向けボランティアツアーの企画・運営事業	11 月 12 日、11 月 18 日・19 日、12 月 16 日	45,2184
スクラム	平成 28 年熊本地震被災地域の仮設住宅コミュニティ形成支援及び現地大学生への活動ノウハウ提供を目的とした東北大学生ボランティア派遣プロジェクト	12 月 7 日～10 日	45,7098
福興 youth	原発事故後の福島の復興課題を考えるスタディツアー	2 月 16 日～18 日	129,245
スクラム	平成 28 年熊本地震被災地域の仮設住宅コミュニティ形成支援及び現地大学生への活動ノウハウ提供を目的とした東北大学生ボランティア派遣プロジェクト	2 月 25 日～3 月 1 日	500,000
計			3,428,523

2-6. 東北大学祭への出展

東北大学では、例年 10 月末から 11 月初頭のうちの 3 日間に渡り、東北大学祭が行われている。本年度は 11 月 3・4・5 日に開催された。SCRUM では、「東北大学スクラム(SCRUM)」という団体名で A102 教室で屋内展示企画を、また、SCRUM の参加団体である東北大学インクストーンズが石巻焼きそばを販売する模擬店を、ともに 3 日間出展した。

2-6-1. 屋内展示

2017 年度は東日本大震災学生ボランティア室時代からの通算で 6 回目の出展となった。6 月 13 日に第 1 回ミーティングを開き、過去の出展の様子と普段の活動を踏まえた話し合いの結果、「被災地の今とボランティアを通して気付いた魅力を知ってもらい、関心を持ってもらう、実際に足を運んでもらう」を 2017 年度の出展目的として定め、その後は目的達成のための様々な企画や掲示物を 3 回（夏季休業前、夏季休業明け、大学祭直前）のミーティングを行いながら用意し、当日に臨んだ。

企画内容は、例年を踏襲してスタッフが事前に仕入れた被災地で作られている菓子や飲料、工芸品をカフェ形式で販売する、被災三県の被害状況と課題を記したパネル展示を行った。また、今年度からの取り組みとして、スタッフ作成の各地域おすすめスポットを記したガイドブックの設置と配布、被災された方のインタビュー映像の上映、福島県庁職員の方と提携しての福島の魅力紹介、来場者の声を被災地に届けるための感想ノートの設置を行った。今年度の販売品を【表 11】にまとめた。

【表 11】2017 年度の大学祭での販売品一覧

地域	販売品
岩手県	夢の樹バウム、ソフトバウム、けせん坂、ジェリードーナツ、どぶろく饅頭、チョコレート饅頭（おかし工房木村屋）、マスカットサイダー（神田葡萄園）

宮城県	ミサンガ、ストラップ類（名振マザーミサンガ）、とろろ昆布、浜のおばちゃんグッズ（浜のおばちゃん）、硯（遠藤硯店）
福島県	福幸ブッセ（お菓子のさかい）、ぽるぼろん（NPO 法人しんせい）、じゃんがら（お菓子のみよし）、凍みもち、桃ジュース（JA 福島みらい）

【写真】物品販売の様子（左）、被災地ガイドブックのイメージ（右）

2-6-2. 模擬店

先述の通り、11 月 3, 4, 5 日の 3 日間、東北大学インクストーンズが、石巻焼きそばを出店した。「模擬店を通して、石巻そのものの魅力を知ってもらう」ことを目的とした。

今回の企画は「被災地応援！石巻茶色い焼きそば」と題して、石巻焼きそばを提供することを通して、石巻という地域の魅力を発信することとした。また、実施にあたり石巻でボランティア活動を行うインクストーンズ、HARU、たなぼたの 3 団体が協力して行い、利益も 3 団体で分割した。販売した商品とその値段は【表 12】のとおりである。

【表 12】インクストーンズ模擬店、販売商品と価格

商品名	値段
石巻焼きそば	300 円
石巻焼きそば（目玉焼きあり）	350 円

今回の企画では 1,500 食を超える焼きそばを提供することができ、多くの来場者に利用してもらうことができた。また、この模擬店の後、SCRUM の展示を見られる来場者も多かった。

2-7. 国際部

ここでは国際部が実施する、留学生向けのワークショップやボランティアツアーの取り組みについて報告する。東北大学には数多くの留学生が在学しているが、留学生 の東日本大震災に対する関心は高い。そこで SCRUM では、2015 年 12 月に、第 1 回留学生向けワークショップを実施し、その後 2016 年度には、東北大学の学生ボランティア活動を支援する支援室としては、留学生もその対象として、対応をしっかりしようという目的で「国際部」を設置した。今年度の国際部の主な活動は、以下の表にまとめた。なお、国際部の取り組みにあたっては、グローバルラーニングセンターの島崎先生・渡部先生にご協力いただいている。2017 年度の国際部の活動は【表 13】にまとめた。その内、いくつかの取り組みについて紹介していく。

【表 13】2017 年度の活動一覧

日程	名称	活動場所	活動内容	参加者数	備考
5/19	留学生向け東日本大震災ワークショップ	東北大学附属図書館	映像を見てディスカッション	参加者 9 人 スタッフ 9 人	
6/11	SEASIDEボランティアツアーpart1	仙台市若林区	海岸清掃、荒浜小学校視察	参加者 14 人 スタッフ 7 人	
11/12	SEASIDEボランティアツアーpart2	仙台市若林区	海岸清掃、荒浜小学校視察	参加者 26 人 スタッフ 5 人	
11/18~19	TUFSA 合同ボランティアツアー	石巻市	視察、仮説訪問	参加者 22 人スタッフ 7 人	TUFSA と共催
12/16	IPLANET 合同ボランティアツアー	石巻市	視察、災害公営住宅訪問	留学生 11 人 日本人 8 人	IPLANET と共催
2/11	SEASIDEボランティアツアーpart3	仙台市若林区	海岸清掃、荒浜小学校視察	参加者 7 人 スタッフ 5 人	

2-7-1. 11/12 Seaside Volunteer Tour in Sendai 2

11 月 12 日（日）に、仙台市若林区荒浜地区において、留学生を対象としたボランティアツアーを実施した。はじめに荒浜里海ロッジへ伺い、荒浜再生を願う会主催の海岸清掃イベント『荒浜リボーン』に参加し、前日が月命日ということで黙祷をした後、二人一組で海岸清掃をした。 留学生の感想としては、「意外にもゴミが多く、今日私が拾うことで貢献できたなら嬉しい。」といったものがあった。

この日は荒浜再生を願う会の皆様のサプライズイベントが二つもあり、一つ目が筑波名物ガマの油売りという伝統芸能のお披露目と、二つ目に 100 年前の臼と杵を使わせていただいて餅つき体験をした。留学生に日本文化を見て・知って・体感してもらえたと思う。

また午後は旧荒浜小学校を訪れ、荒浜再生を願う会の庄子さんより、震災当時と震災直後の様子について説明をしていただいた。校舎内には震災の様子を伝える写真やドキュメンタリー、当時の避難の様子を再現する道具類などが充実していた。それらを見て留学生は「校舎内にがれきが押し潰されている写真は衝撃的だった。」や、「この建物はこれからも教訓を伝えるために残していくべきだよ。」と口々に述べていた。

【写真】海岸清掃の様子（左）、庄子さん（左から二人目）より説明を受ける参加者（右）

最後に荒井駅併設のせんだい 3.11 メモリアル交流館にて感想共有を行った。「私たちが清掃したあの美しい海が、6 年前の 3 月 11 日に多くの命を奪ったとは思えない。」や、「私の国では地震がないので、東日本大震災の様子を想像できなかったが、実際足を運んでみて当時の惨状や人々の懸命な努力を知ることができて良かった」といった声があった。

2-7-2. TUFSA 合同ボランティアツアー

11 月 18 日（土）～19 日（日）に、石巻市・女川町にて、東北大学留学生協会 TUFSA との合同ボランティアツアーを行った。世界 11 カ国からの留学生ともに、総勢 29 名で石巻・女川を訪れた。

1 日目には、石巻市復興まちづくり情報交流館を見学し、館長さんのお話を伺ったり、各々展示を見たりした。その後、大橋仮設東集会場を訪問し、窓清掃のボランティアや昼食づくりを行い、仮設住宅の現・元住民の方々にスープとパスタをふるまった。住民の方々約 10 名に参加していただき、楽しい交流のひとときを過ごした。夕方には女川フィールドセンターに移動し、東北大学の木島教授から当時の状況や女川に関する講義をしていただき、その後夕食として鍋コンテストのイベントを開き、参加者間の交流を図った。夜には女川駅に併設されている温泉に皆で訪れた。初めて温泉に入ったという留学生もおり、日本文化のよい体験にもなったと言える。

2 日目には様々なワークショップを行った。まず女川町まちなか交流館にて、三陸石鹸工房 KURIYA さんによる石鹸づくりワークショップを行った。最初に代表の厨勝義さんにお話をいただき、女川でのビジネスやまちづくりの様子、ビジョンやお思いなどを伺った。つぎに三陸の素材を使った、優しい色合いの四角い石鹸をつくる体験をした。その後、シーパルピア女川の中からグループで好きなお店を選んで昼食をとったり、また訪問したりした。参加者にとって、活気づく女川の様子を知るきっかけとなった。午後には、女川に海外からも人を呼び込むためにどうすればいいかを参加者に考えてもらった。また、2 日間のまとめとして、感想共有などを行った。

全体として、参加者が絆を深めながら、震災や復興に関して様々な角度から学び、感じ、考えるきっかけとなるようなツアーとすることをねらいとした。参加者からは、「多くの友達ができ、震災のことを深く学ぶことのできた非常に良い機会だった」「こういったツアーを開く回数を増やしてほしい」「もっと石巻や女川にいたかった」などの声を聞くことができた。今回、TUFSA 側の運営メンバーである留学生の声を反映してツアーを企画することができたことも成果だと言える。今後も留学生の声を取り入れながら、よりよいツアーを企画・運営していきたい。

写真：大橋仮設東集会所にて、住民の方と 11/18（左）、女川駅前にて、集合写真 11/19（右）

2-7-3. IPLANET 合同ボランティアツアー

12 月 16 日（土）に石巻市において、東北大学留学生支援団体 IPLANET と合同で、留学生向けボランティアツアーを行った。今回のツアーは留学生 11 名、日本人学生 8 名の合計 19 名で行った。

まず大川小学校を訪れた。このような震災遺構を訪れるのは初めてという留学生がとても多かったが、日本人学生から東日本大震災や大川小学校について英語で説明を行ったため、基本的な知識については理解してもらえた。また、震災遺構を実際に訪れて自分の目で見ることで、被害の大きさを実感できたようだ。参加した留学生からも、「地震と津波の恐ろしさと、最悪の事態に備えることの重要さを学んだ」「『自分の身は自分で守る』という教育が必要だと思った」などの感想があり、大川小学校の視察が留学生一人ひとりにとって震災について真剣に考える機会になったことが分かる。

午後は、いしのまき元気いちばで昼食をとった後で、門脇復興公営住宅の集会所で住民の方々と交流イベントを行った。クリスマスが近かったため、それにちなんでお菓子の家作りや留学生によるクリスマスの歌の演奏などを行った。多くの住民の方々に参加していただき、住民の方々にとっても参加者の留学生にとっても、よい思い出になった。交流会では、日本人学生も手助けをしながら、住民の方々と留学生がお互いになんとかコミュニケーションをとり、お互いの文化の紹介から震災の経験までさまざまなことについて話していた。留学生からは、「震災のつらい記憶を少しずつでも乗り越えようとしている人々の明るさが印象的だった」「どんなにつらいことがあっても生き続けようとする意思が必要だということが分かった」という感想があった。

【写真】大川小学校で震災の説明をする様子（左）、お菓子の家づくりの様子（右）

2-8. 震災伝承部

被災地現地に密着した活動を行うことが多い SCRUM だが、今年度はそれにとどまらず、震災から 7 年目、被災当時からこれまでの復興の記録を忘れず、忘れさせずに、次の災害に備えることを目的として震災伝承部は設立された。

今年度はその中でも、東日本大震災を様々な観点から考え、さらに普段の活動地域に関係なく様々な震災遺構を訪ねることで、メンバーが震災を知り、考え直すことを主眼とした。以下 2017 年度中の取り組みを挙げていく（【表 14】も参照）。

2-8-1. 2017 年度の主な活動

①震災関連ビデオの視聴

東日本大震災を様々な観点から知るために、テレビで放映された番組などの視聴を行なった。大川小学校での悲劇や福島第一原発事故による避難指示の一斉解除とその現実、さらに法医学者が見た

東日本大震災などその内容は多岐に渡った。ビデオの内容はメンバーの関心に合わせて決定し、それまでは知らなかったような観点・切り口から震災を見ることができ、関心の幅が広がった。学習会やフィールドワークとの関連も見出せた。

②学習会

東日本大震災の興味関心のある事項に関して、メンバーが概要をまとめ発表し共有を行なった。内容としてはビデオから派生したものや、フィールドワークで訪問する予定の震災遺構の概要などが主となった。メンバー間での意見交換でさらに深められそうな観点が出てきたり、各々の専門と絡めた視点が現れたりして有意義なものとなった。

③フィールドワーク

主に仙台近郊で津波の被害が大きかった地域を回った。1/14 は東松島の野蒜地区や名取の閖上の記憶、そして荒浜小学校などを回った。3/21 には岩沼市千年希望の丘や山元町中浜小学校を回る予定である。各地域の語り部の方にお話を伺うことで、当事者だからこそ考え感じ得たことを聞くことができ、実り多い活動となった。

SCRUM は、東北大学にありながらその所在地たる仙台や宮城県全体に目を向けることが少なかったが、このフィールドワークはそのような“地元”を知るいい機会となった。

【表 14】2017 年度の活動一覧

日程	活動内容	参加者数
5/2	大川小学校についてのビデオ視聴	数名
5/9	大川小学校についてのビデオ視聴(続き)	数名
5/16	原発による避難指示一斉解除についてのビデオ視聴	数名
5/23	原発による避難指示一斉解除についてのビデオ視聴（続き）	数名
6/2	振り返りと今後についてのミーティング	7 名
6/7	『“仮設 6 年”は問いかける ～巨大災害に備えるために～ 』視聴	数名
6/21	震災関連死についてのビデオ視聴	数名
6/23	地方創生についての学習会	数名
7/5	震災関連死の制度的側面についての学習会	数名
7/7	震災関連死の医学的側面についての学習会	数名
11/22	後期の活動方針についてのミーティング	4 名
11/29	ビデオ『法医学者が見た東日本大震災』を視聴	数名
12/6	荒浜小についての学習会	数名
12/10	大川伝承の会の活動に参加	2 名
12/13	閖上についての学習会	数名
12/20	千年希望の丘についての学習会	数名
1/10	1/14 のフィールドワークについての打ち合わせ	4 名
1/14	宮城県北沿岸部のフィールドワーク	5 名
2/7	春休みの活動及び新歓についてのミーティング	4 名
2/21	ミーティング	数名
3/21	宮城県南沿岸部のフィールドワーク	数名

2-9. 人権共生部（ひととも）

人権共生部、通称「ひととも」は今年度から活動を開始した。「東北大学東日本大震災学生ボランティア支援室」の廃止に伴い、SCRUM も震災にかかわらず様々なボランティア活動を支援していく位置づけへと変化した。その中で「ひととも」は、SCRUM における新たな活動をインキュベートする（孵化させる）機能をもつことを目指し構想された。また、社会の様々な人権課題を座学・実地から学ぶことで、共生社会へ向けての歩みを考えることのできる人権感覚を養えるよう、様々な分野に目を向けて学習をしている。

「ひととも」の活動は、「勉強会」と「フィールドワーク」の 2 つの面の活動から成り立っている。「勉強会」については、昼休みまたは金曜日の放課後を利用し、その都度メンバーの関心からテーマを決め、計 11 回実施した（【表 15】参照）。一方、「フィールドワーク」については、江口先生の授業「共生社会に向けたボランティア活動–人権・共生・エンパワメント」と連携しながら、3 か所に訪れた。

また、「フィールドワーク」の発展形として、夏のボランティアプログラム・冬のボランティアプログラムを企画・実施した。夏は、「子どもの貧困」をテーマに、「NPO 法人 TEDIC」、「せんだいこども食堂」、「NPO 法人 STORIA」を活動先とし、約 20 名が参加した。冬は、「仙台自主夜間中学」でのボランティアを募集するプログラムと、「障害者支援」をテーマとしての、「アフタースクールぱるけ」、「エコー療育園」、「CIL たすけっと」、「アート・インクルージョン・ファクトリー」での見学・フィールドワークの 2 本立てである。ボランティアプログラムは、①説明会・ガイダンス、②見学・ボランティア体験、③フォローアップミーティング・ふりかえりの三段階の流れで実施した。②見学・ボランティア体験の部分はツアーとは違い、参加者が個別の日程で活動に参加するスタイルであるため、③フォローアップミーティング・ふりかえりを合同で行うことで、参加者どうしの意見の交流を通して体験による学びを深めることができた。さらに「フィールドワーク」の番外編として、ひとともメンバーの有志 3 名で神戸・大阪でのフィールドワークも実施した。

今年度、手探り状態で活動を続ける中で、参加メンバー内で出てきた「ひととも」のコンセプトをここに記しておきたい。第一に、様々な人権課題に興味を持ち・学ぶ「入門的」な場所、ということである。また今後の展望として、メンバーがそれぞれ自分の関心分野・活動先を持ち、そこでの学びをひとともで共有していく形になると良いのではないかという話が出ている。加えて、ひとともでの学びをまずは SCRUM 内に、のちには SCRUM 外にも発信していけるようになるとなお良いということも話された。

【表 15】2017 年度の活動一覧

活動名	開催日（内容）
ミーティング	4/20, 5/23, 6/15, 7/13, 8/4, 9/29, 10/17, 1/19, 2/13
勉強会	4/12（貧困問題）, 6/8（犯罪被害者）,6/20（犯罪加害者の人権）,6/30（ジェンダー）,10/31（バリアフリーとユニバーサルデザイン）, 11/14（発達障害）, 11/24（人権共生、外国ルーツを持つ子ども支援）,11/28（「福祉・医療における排除の多層性」読書会）,12/12（「ひらがなも書けない若者たち～見過ごされてきた”学び”の貧困～」視聴）,12/22（田中宏『在日外国人』読書会）,1/16（「暮らしと憲法 第 2 回 外国人の人権は」視聴）

フィールドワーク	5/1（船形コロニー・地域支援センターぱれっと）, 6/10（さっと日本語クラブ）,7/1（仙台夜まわりグループ）, 7/14（仙台自主夜間中学）,
夏の関西フィールドワーク	9/4-6（被災地 NGO 協働センター、人と防災未来センター、リバティおおさか、大阪鶴橋コリアンタウン、クロス・ベイス、e トコ・プロジェクト（金香百合さん））
夏のプログラム	8/4（ガイダンス）, 10/16（ふりかえり）
冬のプログラム	＜仙台自主夜間中学＞2/14（ガイダンス）, 4/5（ふりかえり） ＜障害者支援＞3/15 or 16（ガイダンス）, 4/5（ふりかえり）

【写真】さっと日本語クラブ見学の様子 6/10（左）、夏のプログラムのガイダンスの様子 8/4（右）

2-10. 緊急時の災害対応

SCRUM では、東日本大震災以外にも、各地で発生した災害への緊急対応を行なってきた。本年度は、前年度から継続した熊本地震被災地での支援と、7 月末に発生した秋田県豪雨被災地での支援を行なった。以下、それぞれについて報告していく。

2-10-1. 2017 年度の熊本地震被災地支援の概要

2016 年 4 月の熊本地震発生後、本学では、熊本地震被災地への学生ボランティア派遣を継続して実施している。昨年度は SCRUM と HARU が連携し、6 度の派遣（5,6,8,9,11,2 月）を実施し、のべ 23 名の学生が現地で活動を行った。

昨年度の第 4 次派遣（9 月）以降は、それまでの派遣ががれき撤去などのハード系の活動が中心であったのに対して、足湯・手芸などを通した傾聴活動などのソフト系の活動が中心となっている。ソフト系の活動は、SCRUM や HARU のメンバーが普段東北で行っている活動であるため、我々の東北での活動経験を熊本の学生へ伝える良い機会にもなっている。

今年度は、6,8,12,2 月の計 4 度派遣を実施し、のべ 21 名の学生が活動を行った（【表 16】）。今年度の派遣の特徴は以下の通りである。

①仮設住宅での清掃ボランティアの経験・ノウハウも現地学生に伝えることができた

②熊本県立大学（ボランティアステーション）との連携強化（三大学で企画・活動を本格的に行うようになった）

③現地大学が定期的な活動を行うようになったことによる活動場所の固定化

以下、各派遣の活動概要を述べていく。

2-10-2. 第 7 次派遣

6 月 8 日から 11 日にかけて、第 7 次派遣を実施した。この派遣では、熊本大学熊助組と熊本県立大学との活動となった。6 月ということで、カエルやあじさい、傘といった季節にちなんだ折り紙と、足湯活動、および仮設住宅の清掃ボランティアを益城町の仮設住宅で行った。東北大学からは学生 4 名と教員 1 名が参加した。

今年度初めての活動だったが、以前と変わらず熊本大との連携をしつつ、本活動から正式に活動に加わった熊本県立大とも連携を取りながら活動を実施することができた。活動に参加したメンバーからは、清掃に関して、「自分の想像よりも体力を使って疲れたが、住民の方に感謝されて達成感があった」（熊本県立大 1 年）や「高齢者の方で、『自分では掃除ができないから助かる』と言われ、ボランティアしてよかった」といった感想を聞くことができた。また、普段の活動に関しては、「住民の方が親しげに話してくれてよかった」（熊本県立大 2 年）、「東北での経験を活かせてよかった」（東北大 2 年）といった感想を聞くことができた。

2-10-3. 第 8 次派遣

8 月 20 日から 8 月 24 日にかけて、第 8 次派遣を実施した。この派遣では、熊本県益城町の 5 つの仮設住宅にて活動を行った。東北大学からは、学生 5 名と教員 1 名が参加した。この内、熊本派遣初参加の学生は 3 名（1 年生 2 名、2 年生 1 名）であり、今年度新入生が初めて参加した派遣となった。また、活動した 2 日間合計で、熊本大学の学生 9 名、熊本県立大学の学生 4 名と、一緒に活動することができた。

活動内容は、足湯・手芸カフェを行った。手芸では、うちわ作りを行った。どの仮設住宅でも、連日 30℃超えのせいか、大好評であった。また、足湯では、「シャワーで済ませるときが多いから、足湯はしっかり温まって良い！」というような声もあり、好評だった。また、テクノ団地では、これらの活動に加えて、みんなの家（集会所）の庭で、子どもたち向けに、バルーンアート作り・スーパーボールすくいを行った。子どもたちも夏休み中ということもあり、大勢集まってくれた。また、本派遣では、熊本城や阿蘇大橋地区の視察も行った。

参加者の感想としては、「足湯を初めて住民の方々に行い、緊張したものの、『ありがとうね』と感謝の言葉をもらい嬉しかった」（熊本県立大学 1 年）、「他大学の方と一緒に活動することで交流の輪も広がり、それぞれの団体の今後に活きてくると思った」（熊本大学修士 1 年）、「東北大学の方には、事前に足湯の講習をしていただき、会話を大切に進めることの重要さを認識することができました」（熊本大学修士 2 年）、「住民間のつながりの強さや仲の良さを感じた。住民同士で『あの人は家にいるかな？』というような気配りが生まれている場面があり、この住民間のつながりと学生の力の双方を生かしつつ、継続的に見守っていくことが大切だと思った」（東北大学 2 年）などがあった。

2-10-4. 第 9 次派遣

12 月 7 日から 10 日にかけて、第 9 次派遣を実施した。この派遣でも三大学合同で、住居清掃と足湯、フォトフレーム作りを行った。訪問先は惣領・櫛島・テクノ・馬水東道・安永東の 5 か所で、被災者の現在を知り、同時に彼らの温かさを感じることができた。

最初に訪れた惣領仮設では清掃依頼が 4 件あり、3 人一組で年末の大掃除をした。来春仮設を出られる方から、「退去時の審査に合格できそう」とのお声を頂き、達成感があった。また、多くのお宅で活動している最中、住民の方はご自身の作業をされていた。このことは、我々に対する信頼があることを示していると思われ、業者ではない学生だからこそのことなのかと思った。

櫛島仮設では、双方向型のボランティアとして住民の方々が炊き出しをしてくださった。被災された方々が色々アイディア出しをされている様子に、震災から月日が経ったことで考え方が変わってきているのかと思った。

翌日は、安永東・馬水東の 2 つの仮設に別れ活動した。安永東仮設では、来てくださったのは 5 人ほどだったが、折り紙を教えていただくなど一方的な支援にならず温かい雰囲気になった。馬水東でも足湯や手芸を通し交流ができ、そこで築いた信頼関係から、地震で自宅の下敷きになったお話まで伺うことができた。

テクノ仮設では、雨予報にも関わらず予想以上に住民の方がいらっしゃり、クリスマスやお正月をイメージしたフォトフレームやメッセージカードを作りながら、皆楽しそうに活動していた。集会所は賑やかな雰囲気に包まれ、外の寒さを感じさせない人の温もりがあった。

【写真】12/10 のテクノ仮設での手芸の様子（右）、2/26 熊本大学ましきラボ前で熊大生と（左）

2-10-5. 第 10 次派遣

2 月 25 日から 3 月 1 日にかけて、第 10 次派遣を実施した。本派遣でも三大学合同で企画・活動をした。本派遣では、熊本大学生 9 名、熊本県立大学生 9 名もの方々が参加し、特に、熊本県立大学の方々に企画・準備をしていただくことができた。昨年度の東北大学メインの派遣から、現地大学がメインの活動に、東北大学が参加させていただくという形になった。また、これまでの派遣でもそうだったが、東北大学生にとっても大きな学び(熊本地震被災地の状況・東日本大震災被災地との違い、現地大学生の活動姿勢・気づきなど)があり、今後東北での活動に活かすことができる派遣であった。徐々に仮設住宅から人が減っている状況だが、今後とも 3 大学で連携し、お互いに刺激し合いながら、被災された方々のために活動していければなと思う。なお、東北大学からは学生 7 名、教員 1 名が参加した。

初日は、テクノ仮設団地の E ブロック集会所にて、足湯・手芸カフェを行った。来場者数は 16 名で、内 11 名もの方に足湯をしていただいた。足湯を非常に楽しみにしていらっしゃる方が多く、開始時間の前から集会所に来てくださる方もいて、足湯へのニーズを再認識できた。また,チラシを全戸配布したおかげで、E ブロックだけでなく、どのブロックからも自然と来てくださった。手芸では、ひな飾りリース作りを行った。難易度も適切で、作りながら、楽しくおしゃべりできた。2 日目、3

日目は、2班に分かれて活動した。櫛島仮設（2日目）・惣領仮設（3日目）では、足湯・手芸カフェ&たこやき会を行った。手芸は、同様にひな飾りリース作りを行った。櫛島仮設では来場者数は9名で、足湯は3人の方にしていただいた。惣領仮設では来場者数は13名の方だった。たこやき会を行ったこともあり、普段の活動ではいらっしゃらない方にも集会所に足を運んでいただくことができた。「4月でこの仮設団地を出るんですけどね、寂しいからここ（集会所）にまた遊びにくるけんね」とおっしゃってくださる方もいた。「食のイベントが、住民の方々に「参加したい」と思わせるきっかけづくりになっているのだろうと改めて感じました。」（熊本県立大1年）などの感想があった。

安永東仮設住宅（2日目）・馬水東道仮設（3日目）では、清掃ボランティアと足湯・手芸カフェを行った。安永東仮設では、戸別の清掃依頼はなかったが、みんなの家のエアコンと網戸を掃除させていただいた。また、馬水東道仮設では、8 軒の方のお宅の掃除をさせていただいた。「家によって、仮設の家具の種類・量が全然違った。それから、被災状況の違いを感じた。短い時間で、信頼関係を築けるのはいいなって思った。」（東北大学1年）、「集会所に来ない人とコミュニケーションできるので、清掃はいい活動だなって思った。清掃した方で、あとあとになって、集会所に顔を出してくれた方がいたので、清掃きっかけで関係が築けたらいいな」（熊本大学3年）

4日目は、熊本城や阿蘇神社などへ視察を行った。熊本地震の甚大さを改めて感じ、初めて訪れたときからの変化を感じることができた。

【表 16】2017 年度・熊本地震被災地での活動一覧

日時	活動場所	活動内容	人数	備考
6/8～11	益城町内仮設（馬水東道/惣領/櫛島/テクノ）、熊本大学	足湯・手芸（折り紙）、清掃、現地学生と交流	4	第7次派遣 教員1名参加
8/20～24	益城町内仮設（馬水東道/テクノ/惣領/櫛島/安永東）	足湯・手芸（うちわ） 視察（熊本城・阿蘇）	5	第8次派遣 教員1名参加
12/7～10	益城町内仮設（櫛島/惣領/安永東/馬水東道/テクノ）	足湯・手芸（フォトフレーム）、清掃	7	第9次派遣
2/25～3/1	益城町仮設（テクノ/櫛島/安永東/惣領/馬水東道）	足湯・手芸（リース）、清掃、視察（熊本城・阿蘇）	7	第10次派遣 教員1名参加

※「人数」は派遣に参加した東北大学生の人数

2-10-6. 秋田県豪雨災害への支援

7月 22 日からの大雨によって大きな被害を受けた秋田県大仙市にて8月8日実施し、SCRUM から3名が参加した。この活動は Gakuvo（日本財団学生ボランティアセンター）主催の「チーム『ながぐつ』プロジェクト 秋田豪雨第1陣」に参加する形で、東北学院大生2名と合同で実施した。

現地では大仙市災害ボランティアセンターのコーディネートで被災宅の片付けと清掃を行った。被災宅の泥出しは既に終わっていたが、至る所に水害の爪痕が残っており、恐ろしさを改めて実感する機会となった。

【表 17】2017 年度・秋田県豪雨被災地での活動一覧

日時	活動場所	活動内容	備考
8/8	秋田県大仙市	被災宅の片付け・清掃	東北大学3名、東北学院大生2名で活動実施

2-11. 他団体とのコラボ活動

SCRUM では、他の学生ボランティア団体との交流として、教職員と連携した活動・イベント（「2-3. 渉外」92 頁参照）以外にも、学生が主体となった多様なコラボ活動の企画を行なってきた（【表18】）。以下、それぞれの概要を報告する。

2-11-1. いっぽこ合宿

6 月上旬に 1 泊 2 日で花山の青少年自然の家にて行った合宿で、多団体の交流と今後の活動企画における連携強化が可能な関係の構築を主な目的としていた。1 日目はアイスブレイクに始まり、事前に用意した団体別活動シートを配り、参加団体の活動紹介を行うことで効率よく各団体について知ることが出来るようにした。その後最初に団体ごとの意見交換、次いで各団体のメンバーを混合にグループを作って、意見交換を行って自団体の活動を省みると共に他の団体の特性を知る契機とする狙いがあった。

上記を一通り終えたあと、ワークショップとして「ボランティアとは？を自分なりに辞書的に定義してみよう」というテーマで団体混合のグループにて議論しあった。1 日目の夜は野外炊事と夜の交流で団体間のコミュニケーションが多く生まれる。2 日目は各団体でコラボ企画を考えるワークショップを行い、いくつかの案を要検討事項として、また直近の HARU の運動会のボランティア（山元町で実施）を協力する方向に決まった。

2-11-2. やまもとスポーツ祭り（山元町運動会）

山元町山下駅前は、沿岸部で被災した方々の防災集団移転地である。ここは、沿岸部のバラバラの地域から集団移転が行われたため、これからの新たなコミュニティ形成が課題とされている。そこで今回は、スポーツイベントを通して交流を生み、山元町のコミュニティ形成の一助となることを目的に活動した。

イベントには、大人から中学生、小学生、幼児まで幅広い年代の方々にお集まりいただき、山元町教育委員会生涯学習課の方のご協力のもと、玉入れ、長縄跳び、綱引き、障害物競走、リレーなどの競技を行った。中でも、障害物競走では山元町の名産であるいちごをモチーフした徒競走を行うなどした。このイベントは第一回目ということもあり、様々な反省点も挙げられたが、イベント参加者からは「楽しかった」という声が上がり、ご協力いただいた生涯学習課の方からは継続実施を歓迎していただいた。

【写真】いちごをモチーフにしたいちごリレー（左）、大人から子どもまで跳んだ長縄（右）

2-11-3. 山元町ハロウィンパーティ・ボランティア

山元町運動会と同様、山元町のコミュニティ形成の一助となるべく企画されたイベントで、今回が3回目（3年目）の開催となった。2回目からは「つばめの杜西区自治会」が主催、HARUとSCRUMが共催している。このイベントは、ハロウィンということで仮装した子ども達が山元町の住民の方々の家を訪問し、一緒にミニゲームや記念撮影、お菓子交換などをして多世代交流を行うというものである。

多くの子どもたちに参加してもらい、また、多くの住民さんのご協力もいただいた。中には、このイベントを心待ちにしてくださっていた住民さんもいらした。訪問が終わった後は、こどもセンターに戻り、ピニャータや射的、積み木などで遊んだ。子ども達はこの日の特別な仮装や、あまり会うことのない、大学生との交流を楽しんでいるようだった。こちらの活動も、つばめの杜西区自治会の方々をはじめ参加された住民さんからも継続実施を歓迎していただいた。

【写真】住民の方のご自宅前で記念撮影（左）、参加者全員の集合写真（右）

【表 18】2017 年度の他団体とのコラボ活動一覧

日時	イベント	活動場所	活動内容	参加人数	参加した団体
6/3-4	いっぽこ合宿	栗駒山荘	東北大学内のボランティア団体のメンバー同士でボランティアについて考えワークショップを行い、団体間で交流。	20	国際ボランティア団体 AsOne、HARU、SCRUM
9/24	やまもとスポーツ祭り（山元町運動会）	山元町立山下第二小学校	山元町の小学校でミニスポーツ大会を開催し、交流する	19	HARU、SCRUM、たなぼた、AsOne
10/28	山元町ハロウィンパーティ・ボランティア	山元町つばめの杜西区	山元町のこどもセンターでのハロウィンイベントの開催	15	HARU、SCRUM、たなぼた

2-12. その他 SCRUM の学生が参加したイベント

2-12-1. 長崎 Sip-S との交流

9 月 14 日、長崎 Sip-S との交流が行われ、東北大学生 6 名（HARU4 名、SCRUM2 名）が参加した。長崎 Sip-S は長崎大の団体で、毎年夏に HARU と合同で活動を行っている。

交流会では、東北と長崎でそれぞれ「自分たちにできることは何か」ということに関して考えるワークショップを行った。

2-12-2. Gakuvo 学生委員会との交流

11 月 18 日、Gakuvo（日本財団学生ボランティアセンター）学生委員会との交流を行った。Gakuvo 学生委員会とは、Gakuvo が行っている事業に対し学生視点の意見を反映させるために設置されているものであり、年 4 回実施（うち 1 回地方開催）されている。SCRUM メンバーの山本が今年度の Gakuvo 学生委員に任命され、今年度の地方開催の会場が仙台に決定したために交流が実現した。

当日は、交流前に Gakuvo 学生委員会のメンバー（山本含め 6 名）と SCRUM メンバー1 名で「せんだい 3.11 メモリアル交流館」を訪問し、仙台市若林区の被災状況等を交流館職員の花淵さんよりお話いただき学習した。

その後、場所を東北大に移して交流会が行われ、Gakuvo 学生委員のメンバーのほか、東北大学生 3 名（SCRUM から 2 名、As One から 1 名）が参加した。交流会では、互いの活動紹介を行った後に、「ボランティア主催側の悩み」をテーマに意見交換を行った。交流会に参加しているメンバーが普段行っている活動は人それぞれであったが、似たような悩みを抱えていることが多くあり、互いに共感しながら意見交換する姿が印象的であった。

2-12-3. Gakuvo ボランティアシンポジウム

2 月 10 日～11 日、Gakuvo（日本財団学生ボランティアセンター）主催のボランティアシンポジウムに SCRUM から 2 名、As One から 2 名の計 4 名が参加した。

シンポジウム 1 日目は、プレゼンの作成や活動報告（レポート）の作成に関する講義を受け、あらかじめ準備していた活動報告資料の手直しを行った。翌日は、前日手直しした資料を用いての活動報告会が行われた後、各参加団体への付箋を用いたフィードバックを行った。その後、各自が関心のあるテーマごとに集まり、意見交換を行った。

2-12-4. 第 6 回学生ボランティアと支援者が集う全国研究交流集会

3 月 2 日から 4 日にかけて、第 6 回学生ボランティアと支援者が集う全国研究交流集会（通称：ボランティアフォーラム）が行われた。このイベントに SCRUM のメンバーは第 3 回（2015 年 3 月）より参加しており、全国のボランティア活動を行う学生と交流することが出来た。

また、初日に行われたオープニングセッションでは、今年度 SCRUM 代表の山本がシンポジストの一人として登壇した。

2-12-5. 仙台若者アワード

仙台市がコカ・コーライーストジャパン株式会社と一般社団法人ワカツクとともに主催した「仙台若者アワード」で、一次審査を通過した 10 団体の中から、SCRUM が選ばれ最優秀賞を受賞した（2 月 24 日）。

3. 学生ボランティア団体の活動報告

東日本大震災の発生後、東北大学生のボランティア活動は、東北大学のある宮城県で主に行われていた。一方で 2012 年 8 月からは、神戸大学・岩手大学の学生等と連携して、岩手県陸前高田市で定期的に活動が展開されている。さらに 2013 年からは福島県でのスタディツアー等も始まり、2017 年度には、SCRUM 参加団体の「ぽかぽか」が岩手県で、「インクストーンズ」が宮城県で、「福興 youth」が福島県で、それぞれ活動している。また宮城県の被災地では、HARU、ReRoots、AsOne、たなぼた等の団体が東日本大震災関連の活動を継続している。

また震災以外のテーマで活動している団体もあり、今回は高校生との交流を行う「bridge」の活動をここで紹介する。

3-1. 陸前高田応援サークルぽかぽか

ぽかぽかは今年度の 3 本柱として以下の 3 つを目標として活動を続けてきた。1 つめは“仮設住宅への寄り添い”である。いまだに仮設住宅での生活を余儀なくされる方々に寄り添う活動をしていきたいと考えた。2 つ目は“公営住宅でのコミュニティ形成のきっかけづくり”である。公営住宅に住む方からよく「公営住宅には知り合いが少ない」「どこにだれが住んでいるのかわからない」といったような声を聞く。そこで、我々が集会所などで企画をすることで自宅から外へ出るきっかけを作り、住民さん同士の交流のきっかけを作りたいと考えた。3 つ目は“地域活動の支援”である。これは以前から関わらせていただいている高田町和野地区や NPO 法人パクトの子ども支援のみちくさルームのボランティアを行うことである。

3-1-1. 上半期の活動 2017 年 4~9 月

4 月は新入生勧誘のためのツアーを行った。4 月 22 日～23 日の 1 泊 2 日で陸前高田を訪れた。1 日目は陸前高田市の震災遺構を視察した後、気仙大工伝承館の館長である武蔵さんのお話を伺った。2 日目は 3 つの仮設住宅と 1 つの公営住宅で足湯・手芸カフェを行った。

5 月もまた新入生に向けたツアーを行った。内容は以前からお世話になっている語り部の釘子明さんの引っ越し準備のお手伝いや高田高校仮設住宅での草刈りである。

6 月はツアーを 1 回とぽかぽかメンバーのみの派遣を 1 回行った。ツアーでは今年度初めて高田松原を守る会のお手伝いをした。新入生のメンバーにとってはこれまで行ってきた足湯・手芸カフェとは違い、形に残るボランティアが出来てよかったという感想があった。24～25 日にぽかぽかメンバーのみで和野地区の動く七夕で用いるあざふを染めるお手伝いに行った。

7 月はぽかぽかメンバーのみの派遣を 2 回行った。1～2 日はメンバーのみでパクトのみちくさルームに参加した。29 日には栃ヶ沢公営住宅の住民さんからの要望があり日帰りで納涼祭のお手伝いをしに行った。

8 月は 6～10 日の 4 泊 5 日で派遣を行った。6～8 日は東北大学生のみの活動を行った。主に高田町和野地区の伝統行事「動く七夕」に参加し、高田小学校の生徒を対象とした学習支援・子ども企画を行った。9～10 日は東京都にある山崎学園富士見中学高等学校の生徒 20 名とともにボランティアを行った。9 日は震災遺構を視察し、高田出身の地元の高校生と富士見中学高等学校の生徒、東北大学生の交流会を実施した。10 日は中・高生と大学生がそれぞれ高田一中仮設と高田コミュニティセンターの 2 班に分かれて料理企画で住民さんと交流する企画を行った。

9 月は和野地区の夏祭りのお手伝いや仮設住宅、公営住宅での足湯手芸カフェを行った。また、下和野公営住宅ではツアーに参加した学生が寄席を披露し盛況だった。

3-1-2. 下半期の活動 2017 年 10 月～3 月

10 月はボランティアツアーではなくぽかぽかメンバーのみで三陸スタディツアーとして沿岸地域を視察や語り部さんのお話を聞くツアーを行った。様々な地域の復興の違いを感じることが出来たツアーとなった。

11 月は初日に陸前高田市にある陸前高田復興支援連絡会の代表である島倉友也さんにお話を伺った。陸前高田復興支援連絡会は市内の仮設住宅の見回り活動やお茶会活動を行っている地元の団体である。ぽかぽかメンバーが普段活動していて疑問に思っていたお茶会活動を学生がする意義について「住民さんが参加できる企画の選択肢を増やすため」だと答えてくださり、腑に落ちた学生が多くいた。この機会がその後の活動のモチベーションとなることになった。

12 月は 3 回の派遣を行った。1 回目はぽかぽかメンバーのみでみちくさルームに参加した。2 回目は 16～17 日ではぽかぽかメンバー以外に 6 名の一般参加者（3 名は韓国からの留学生）と活動を行った。活動内容は仮設住宅、公営住宅での足湯・手芸カフェ活動である。また、年末にはお掃除ツアーとして 2 か所の仮設住宅で清掃ボランティアを行った。

1 月は 2 回活動を行った。1 回は子ども企画として 2017 年 10 月に完成したまちなか広場でペットボトルロケットを飛ばすという企画を実施した。さらに、陸前高田復興支援連絡会と連携を取りこれまで活動をしたことがなかった広田町にある大野公営住宅で足湯・手芸カフェの活動を行った。2 回目はメンバーのみで和野地区の伝統行事「虎舞」のお手伝いをした。

2 月は 2 泊 3 日でツアーを行った。今年度はほぼ毎月訪れていた高田高校仮設住宅での活動が最後となるので思い出を形にするための手芸を実施した。また以前に高田高校仮設住宅に住んでいらした住民さんにも声をかけ料理企画も行った。さらにこれまで活動をしたことがなかった気仙町の今泉公営住宅で足湯・手芸カフェの活動を行った。

3 月はパクトのみちくさルームに参加した。今年度で陸前高田市の 4 地区で行ってきたみちくさルームの活動を終えるということで最後にふさわしい活動となった。

【写真】8/9、高田の高校生と富士見中学高等学校の生徒、東北大学生の交流（左）、2/12、高田高校仮設住宅での最後の活動（右）

3-1-3. 今年度の活動のまとめ

今年度はのべ 151 名の学生がツアーに参加した。前年度に比べ 1 回 1 回のツアーに参加する人数は減少し、合計人数も減少したが、活動回数としては公募のツアーが 10 回、メンバー内のツアーが 7 回の合計 17 回で前年度に比べ 4 回も多く活動をすることが出来た。

■住民の方の声

内容	活動日・場所
自分は市役所の屋上に避難して助かったけど、地区担当者はその地区に帰る前に津波に遭って流された人もいる（60 代・男性）	4 月・竹駒小学校仮設住宅
こっちの生活も慣れてきたね。細根沢の仮設もだいぶ人が減ったみたいだね。こっちにきて足湯してもらうのは久しぶりだね。仮設にいたころを思い出すなあ。（80 代・女性）	12 月・栃ヶ沢公営住宅
わたしは昨年の 10 月に来たばかりだから、まだまだ新入りなの（60 代・女性）	2 月・今泉公営住宅

■学生の声

内容	活動日
高田の景色を 6 階から住民さんとみて震災前の町の構図や今後どのように街や道路が出来ていくのかについて教えてもらい、さらに高田について詳しくなれたと実感した。（文学部・2 年）	5 月
ボランティアの意義について深く考えさせられた。ボランティアが目的を達成することについては自分の価値観が大いに変化した。（理学部・1 年）	11 月
初めて行く今泉公営住宅で楽しく活動できた。仮設の頃から久しぶりに会うひとがいた。今泉地区の復興も徐々に見えてきた（工学部・4 年）	2 月

■2017 年度の活動

次数・期間	活動場所	活動内容	参加者数	備考
第 45 次 4/22~23	気仙大工伝承館・高田高校仮設・竹駒小仮設・細根沢仮設・高田コミュニティセンター	視察・講演を聞く・ポスティング・足湯・手芸・カフェ	9 名	
第 46 次 5/6~7	大隅第 2 仮設・高田高校仮設・下和野公営住宅・小友コミュニティセンター	視察・講演を聞く・草刈り・足湯・手芸・カフェ・子ども支援	13 名	
第 47 次 6/3~4	高田松原を守る会・高田高校仮設・高田一中仮設・小友コミュニティセンター・中田公営住宅	視察・高田松原を守る会のお手伝い・草刈り・足湯・手芸・カフェ・子ども支援	12 名	
6/24~25	和野会館・下和野会館	七夕のあざふ染め	7 名	一般参加無

7/1~2	柳沢会館	子ども支援	5 名	一般参加無
7/29 のみ	栃ヶ沢公営住宅	納涼祭のお手伝い	7 名	一般参加無
第 48 次 8/6~10	陸前高田市市役所・和野会館・只出漁港・細根沢仮設・下和野公営住宅・高田高校仮設・高田小学校・陸前高田コミュニティセンター・高田一中仮設	視察・お話を聞く・動く七夕に参加・料理企画（流しそうめん、たこ焼き、お好み焼き、カレー、フルーツポンチ）・足湯・手芸・カフェ・子ども企画・富士見中学高校生との活動・高田出身の高校生との交流	14 名	9、10 日は富士見中学高等学校との共催
第 49 次 9/1~3	下和野公営住宅・高田一中仮設・和野会館・細根沢仮設・小友コミュニティセンター・高田松原を守る会	視察・足湯・手芸・カフェ・落語企画・和野の納涼祭に参加・草取り・高田松原を守る会のお手伝い	13 名	
10/6~8	南三陸・気仙沼・釜石・大槌・宮古・田老	まちあるき・視察・お話を伺う・ミーティング	10 名	一般参加無
第 50 次 11/11~12	市内の仮設住宅・陸前高田復興支援連絡会事務所・柳沢会館・滝の里仮設住宅・高田一中仮設・高田高校仮設住宅	視察・仮設住宅の視察、ニーズ調査・お話を伺う・子ども支援・足湯・手芸・カフェ	11 名	
12/2~3	小友コミュニティセンター	子ども支援	4 名	一般参加無
第 51 次 12/16~17	中田公営住宅・高田高校仮設・栃ヶ沢公営住宅	視察・足湯・手芸・カフェ・料理企画（たこ焼き）	16 名	
第 52 次 12/27~29	下和野公営住宅・高田高校仮設・滝の里仮設	足湯・手芸・カフェ・清掃活動	7 名	
第 53 次 1/6~8	和野会館・まちなか広場・大野公営住宅	視察・子ども企画（カレー作り、ペットボトルロケット）・足湯・手芸・カフェ	5 名	
第 54 次 1/13~14	和野会館	虎舞練習・参加	4 名	一般参加無
第 55 次 2/10~12	二又復興交流センター・小友コミュニティセンター・今泉復興公営住宅・高田高校仮設住宅	視察・お話を聞く・子ども支援・足湯・手芸・カフェ・料理企画（たこ焼き、お好み焼き）	10 名	
3/2~3	小友コミュニティセンター	子ども企画	4 名	一般参加無

3-2. 東北大学インクストーンズ

東日本大震災の支援は、宮城県では石巻市雄勝町を一つの拠点として活動を行ってきた。この活動は 2016 年度になると、「東北大学インクストーンズ」という愛称が定まり、東日本大震災学生ボランティア支援室や SCRUM から幾分自立した形で活動を展開するようになった。そして 2017 年度

には東北大学インクストーンズは、学友会文化部準加盟団体として東北大学学友会に登録し、活動を継続している。以下では「東北大学インクストーンズ」の活動を、前期の活動、後期の活動、住民の方・ツアー参加者の声、活動まとめの順に紹介していく。

3-2-1. 上半期の活動　2017 年 4~9 月

2017 年度前期は 2016 年度後期の活動に引き続き、①石巻市雄勝町波板地区の地域づくり支援、②石巻市の仮設住宅、復興公営住宅のコミュニティ形成支援、という 2 種類の活動を実施した。2016 年度からの変化としては、宮城県で活動する東北大学内の団体との協力体制ができあがったことである。具体的には、東北大学地域復興プロジェクト“HARU”と共同で仮設大森第 4 団地での活動を開始した。では活動ごとに具体的な内容を説明していく。

①石巻市雄勝町波板地区では、2 回のツアーを含む、5 回の活動を行った。内容としては、高齢化で人手不足が顕著という地区の事情を踏まえて、季節ごとに必要な作業や、波板地区の住民が進めているプロジェクトの補助を行った。具体的にみていくと、4 月には花壇を耕したり、木を植える作業や、雄勝石を加工した商品作りの関連作業を行った。5 月には夏に向けた倉庫の整理と、ガーデン用テーブルの設置、7 月の活動では海開きに備えて、倉庫の整理とテント張りを、8 月には海水浴場運営補助を泊りがけで行った。また、波板地区の住民の方々は、初めて波板に来る学生には波板を楽しんでもらい、リピーターとしてまた来てほしいという思いを持っていたので、ツアーでは波板の魅力に触れられるように、雄勝石の加工体験を行った。

②仮設住宅と復興公営住宅では 13 回の活動を行った。仮設大森第四団地では、HARU とインクストーンズ、交代で月ごとに活動を企画し、共同で派遣を行った。その内容はお茶会、草刈り、夏祭りへの参加である。仮設住宅では、仮設住宅の集約に伴う人の移動や、復興公営住宅への移住が行われている。仮設大森第四団地は 2018 年 9 月に閉鎖される予定で、仮設飯野川校団地は集約先になっているため、お茶会やその時のニーズに合わせた継続的な活動をおこなった。

その他の活動としては、4 月に大川伝承の会の説明会への参加や、石巻市雄勝町で活動を行っている、雄勝花物語の徳水博志氏と MORIUMIUS の引地氏に 8 月にお話を伺うなどの勉強会も行った。

【写真】門脇復興公営住宅でのお茶会 4/29（左）仮設飯野川校団地でのお茶会 6/18（右）

3-2-2. 下半期の活動　2017 年 10 月~2018 年 3 月

①波板地区ではこれからの活動方針を考えるために 12 月に波板地区の住民方に、これまでの活動の総評と、活動の要望を伺った。その結果、2 月に波板地区に保存されている第二勝丸と防潮堤整備についての取り組みの語り部を波板地区の住民方にお願いすることとなった。

②仮設住宅の活動では HARU との共同の活動に加え、基礎ゼミ・展開ゼミサークル“たなぼた”との協力体制も出来上がった。具体的には 11 月から 3 回の三団体合同ミーティングを行い、仮設大森第 4 団地でお茶会やイベント参加など 3 回の活動を合同で行った。さらに震災伝承部で活動を行った仮設三反走団地で、インクストーンズとして初めて訪れ、お茶会と手巻き寿司を一年生が企画した 2 月のツアーで行った。2 月には仮設住宅の集約先となっている仮設飯野川校団地のお茶会を実施した。参加したメンバーからは、「他の仮設から移ってきた方がいらっしゃることを実感した」という声が聞かれた。

3-2-3. 住民の方の声、参加学生の声

2017 年度は、3 回のツアーと 12 回のスタッフ派遣を行い、のべ 176 人の学生が参加した。その中で特徴的な住民の方の声、参加者の声を紹介する。

■住民の方の声

内容	活動日・場所
まだ公営住宅が決まってないから、ここ（仮設大森第四団地）を出ても仮設なのよ。（60 代女性）	4/30・仮設大森第四団地
仮設住宅はいいところで、スーパーも近くてよかった。でもそこが無くなって、いろいろと申し込んで公営住宅に入った。（60 代男性）	4/29・門脇復興公営住宅
二子団地は日当たりがいいし、自分の好きなように設計できるので住みやすい。まだ閑散としていて二子団地はさみしい。（70 代男性）	2/11・仮設三反走
二子団地に移住して三か月経ち、ようやく慣れてきたところ。仮設に七年も住んでいたので、会いたい人になかなか会えないのが寂しい。（70 代女性）	2/11・仮設三反走団地
二子団地の家は六月くらいにできる。前が広場で三陸道にも近くていいところ。家の日照問題で隣の人と話して決めなきゃいけない。そういうところで神経を使ってるんだよな。自治会は今年中にはできると思う。集会所ができるのは来年の三月くらいになる。（60 代男性）	2/17・仮設大森第四団地

■参加学生の声

内容	活動日・内容
仮設なので人が少なくなっており、その中で学生ボランティアが必要とされていると知り、このボランティア活動はやっていて意味があるんだなと感じた。（教育学部一年・女）	4/29・仮設大森第四団地でのお茶会
お茶会で楽しんでもらうことは素晴らしいが、お茶会にも来れない人の支援が課題。特に仮設住宅から公営住宅に移る人が増えたときにうまく溶け込めるよう活動していくことが肝心だ。（文学部一年・男）	4/28・門脇復興公営住宅でのお茶会
草がジャングルのようになったところがあった。住民も少なくなり、草取りなど難しいと思うので、定期的に手伝いたい。（農学部二年・女）	6/18・仮設大森第四での草刈り
限界集落となった波板地区でも、地区を存続させたい、震災を伝えたいとの思いから、防潮堤の整備・第二勝丸の展示などの取り組みが住民の方によっ	2/10・波板地区での防潮堤、第二勝

て行われているのを知り、驚いた。取り組みがうまく実現できるよう、支援していく必要があると感じた。（医学部二年・女）	丸展示についてのお話

■2017 年度の活動一覧（1）実施ツアー(東北大学生に公募して実施)

開催時期	主な活動場所	主な活動内容	参加者数	備考
4/29~30	門脇復興公営住宅、波板地区、仮設大森第四団地、大川小学校	門脇で本間さんにお話を伺う。お茶会・手芸・足湯（門脇、大森第四）、畑の耕作、石の整理（波板）大川小学校の見学	18	
9/8~10	仮設大森第四団地、仮設飯野川校団地、波板地区、石巻市復興まち作り情報館	夏祭り運営の手伝い、テントの設置・解体、流しそうめん出展（大森）流しそうめん、足湯（飯野川）、雄勝石整理、清掃（波板）、震災資料の閲覧（情報館）	21	大森にて成蹊大学の学生と交流
2/10~11	雄勝花物語、大川小学校、波板地区、石巻市資料館、仮設飯野川校団地、仮設三反走団地門脇復興公営住宅	徳水氏にお話伺う(雄勝花物語)、大川小視察、第二勝丸のお話を伺う（波板）、資料の閲覧（資料館）、お茶会、手巻き寿司（仮設）、お茶会、ケーキ作り（門脇）	14	

■2017 年度の活動一覧（2）インクストーンズスタッフ中心の活動

開催時期	主な活動場所	主な活動内容	参加者数	備考
5/21	仮設大森第四団地	お茶会、足湯、折り紙	5	HARU 企画
5/28	大川小学校、波板地区	大川伝承会の説明会参加 倉庫整理（波板）	15	
6/18	仮設大森第四団地、仮設飯野川校団地	石巻焼きそばマイスター取得講座参加、草刈り（大森） お茶会・石鹸作り（飯野川）	20	HARU, たなぼた共同
7/14~15	波板地区	海開きの準備、テント張り	4	
8/5~6	波板地区、雄勝花物語、MORIUMIUS	海水浴場運営の手伝い（波板）お話を伺う（雄勝花物語、MORIUMIUS）	11	
8/27	仮設大森第四団地	お茶会、うちわ作り	7	HARU 企画
10/28	仮設大森第四団地	さんまホタテ祭りの参加	8	
11/23	仮設大森第四団地	お茶会・落ち葉アート・ホットケーキ	7	HARU 共同
12/16	名振地区、波板地区	大学祭委託商品、売上金の返還、仮設住宅の入居状況などの	4	

		お話を伺う（名振）、活動評価、活動の要望（波板）		
12/16	仮設大森第四団地	年忘れクリスマス会への参加	15	HARU 企画、たなぼた
2/17	仮設大森第四団地	部屋・集会所清掃、足湯、お好み焼き・たこ焼き	12	HARU, たなぼた共同
3/11	仮設大森第四団地	慰霊祭参加	15	HARU, たなぼた、AsOne 共同

3-3. 東北大学福興 youth

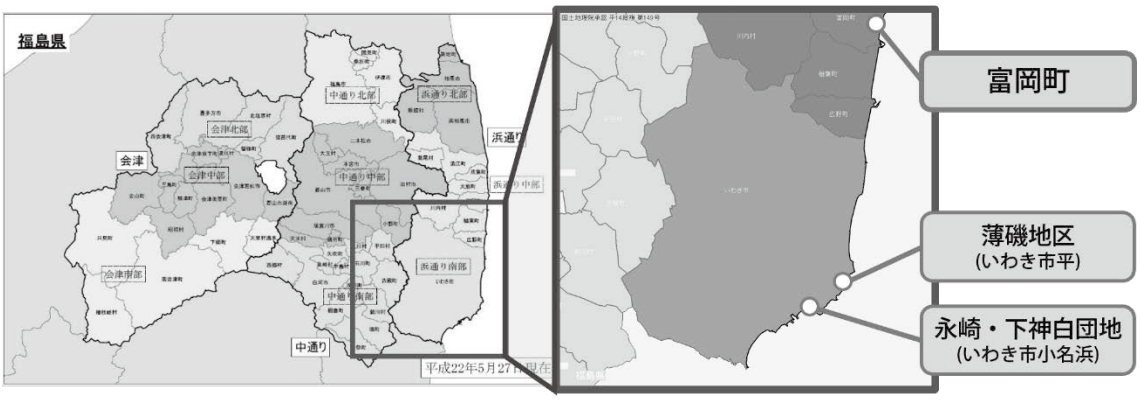
東北大学福興 youth は今年度、前身のいわゆる「福島部門」から数えて、活動開始 5 年目を迎えた。2013 年に東日本大震災学生ボランティア支援室内に福島部門として誕生し、2015 年より「福興 youth」と名乗り、福島県内の仮設住宅・災害／復興公営住宅等にてボランティア活動を行ってきた。2017 年 4 月 1 日には新たに学友会準加盟団体として東北大学学友会に登録した等、体制の変更はあったものの、ほぼ従来通りの支援活動を続けている。

2017 年度の活動の主な特徴としては、以下が挙げられる。

① 災害公営住宅「市営永崎団地」への定期的な訪問を活動の中心に据え、隣接する原発避難者向け復興公営住宅「県営下神白団地」も含めたコミュニティ形成支援に取り組んだこと

② 共働き世帯が多い永崎団地での子ども向け企画、若手不足に悩み、魅力的な教育環境の拡充に力を入れている薄磯地区における学習支援など、子どもを対象とした支援活動を始めたこと

③ 今年度新たに 9 名が加入し、スタッフ人数が増加したこと等により、ボランティアツアーとして公募する機会が減少したこと



図：福島県内の位置関係(左)と、東北大学福興 youth の主な活動地域(右)

左図：気象庁福島地方気象台 HP http://www.jma-net.go.jp/fukushima/alert/alert.html より引用

右図：地図編集ソフト「白地図 KenMap」より作成。国土地理院発行の数値地図 200000（海岸線・行政界）に準拠。

3-3-1. 2017 年度の福興 youth をめぐる主な出来事

➢ 4 月　代表が山﨑に交代

2016 年 4 月より福島部門の 4 代目代表を務めていた中澤(教育学部 3 年)に代わり、山﨑(経済学部 2 年)が 5 代目となる代表に就任した。

➢　4 月　学友会文化部に新規加盟

福興 youth は発足以来、東日本大震災学生ボランティア支援室(現:課外・ボランティア活動支援センター)の登録ボランティア団体として活動を続けてきたが、2017 年 4 月 1 日を以て東北大学学友会に登録し、学友会文化部準加盟団体として新たなスタートを切った。学友会への登録にあたり、災害科学国際研究所の松本行真准教授に顧問を務めて頂くこととなった。なお、これ以降も支援室時代の各部門とは「課外・ボランティア活動支援センター 学生スタッフチーム SCRUM」の参加団体として足並みを揃えており、連携している。

➢　4 月　「福島・富岡スタディツアー」を実施

4 月 15 日、原発事故による避難指示が同月 1 日に一部で解除された双葉郡富岡町や浪江町を訪れた。避難指示解除を迎えても震災当時のまま建物を放置せざるを得ない事情や、除染廃棄物の処理の問題など、参加者が実感を持って両町の抱える現実を理解する機会となった。

➢　5 月　「いわき市薄磯 祭りボランティアツアー」を実施

東日本大震災の津波により甚大な被害を受け、福興 youth が 2014 年度より活動してきた薄磯地区を 1 泊 2 日で訪れた。薄磯団地にて足湯カフェを開いたほか、地区の伝統行事である薄井神社・安波大杉神社の例大祭に参加し、若者の転出などにより人手が不足する神輿の担ぎ手として地区を巡ったり、豚汁の炊き出しを手伝ったりするなど、住民と学生とが心を通わせる有意義な時間を過ごした。

➢　5 月　海まち・とよま市民会議「震災体験記作成プロジェクト」に参加

薄磯地区と隣接する豊間地区の公民館にて、3 月以来 2 度目となる海まち・とよま市民会議主催「震災体験記作成プロジェクト」に参加し、被災者への震災体験の聞き取りを行った。この記録は薄磯地区に建設予定のメモリアル施設に収められる予定である。

➢　5～6 月　新入生向け勉強会を実施

新たに加入したばかりの 1 年生に福興 youth の活動に関して知ってもらおうと、5 月 18 日のミーティングより 4 回の勉強会を行った。勉強会は、活動地域(薄磯地区・永崎団地)、足湯カフェの意義、福興 youth の沿革、原発事故の概要などのテーマについて、上級生からレクチャーするという形で行われた。

➢　6 月　「福島・いわきボランティアツアー」を実施

6 月 24～25 日の 1 泊 2 日でいわき市へのボランティアツアーを催行した。24 日は永崎団地で初めて、子どものみを対象としたイベントを開催した。このイベントには学習支援と全員で遊ぶ時間をそれぞれ取り入れ、子どもたちが安心して過ごせる環境を提供することが出来た。

25 日の午前中は 2 グループに分かれ、永崎女性の会主催で行われた永崎団地の花植えの手伝いと薄磯地区の夏祭りの手伝いに参加した。午後は参加者全員で、永崎団地での足湯カフェを開き、隣接する下神白団地も含めて地域住民と有意義な時間を過ごした。

永崎団地では、9 月、12 月にもカフェ活動を行っており、12 月には 70 名の来場があった他、毎度学生との再会を喜ぶ住民も見受けられるなど、継続的な支援活動が定着している。

➢　7 月　「いわき市薄磯・海開きボランティアツアー」実施

7 月 15 日、薄磯地区のかさ上げ地造成が完了し、これに合わせて 7 年ぶりとなる薄磯海水浴場の海開きと、記念イベント「海まち・とよまパークフェス」が行われた。地区住民からの依頼を受け、ボランティアツアーの参加者でイベントの運営を手伝い、観光地・薄磯地区の復活を盛り上げた。なお、この活動より Yahoo!基金による助成を活用している。

➢　8 月　豊間しおかぜ児童クラブにて初めての学習支援活動

8 月 21～22 日、1 泊 2 日で薄磯地区唯一の学童保育所「豊間しおかぜ児童クラブ」を訪問し、初めての支援活動を行った。2 日間にわたり、流しそうめんやプールでの水遊びのようなお楽しみ企画の実施、宿題の手伝いなどの学習支援を行う初めての活動で、薄磯地区での新たな支援の実現に向けた一歩となった。

➢　9 月　「福島の今を知るスタディツアー」を実施

9 月 25～27 日の 3 日間、原発事故に起因する諸問題を学び考える機会の提供を主な趣旨として、「福島の今を知るスタディツアー」を実施した。

福島県庁職員や「富岡町 3・11 を語る会」のご協力も頂きながら南相馬市から富岡町にかけて視察したほか、双葉郡で法律相談にあたる弁護士、東京電力関係者や農業関係者等との意見交換、3 日目には原発事故避難者との交流活動も取り入れ、現在の浜通り地方を取り巻く状況を多面的に見つめるツアーとなった。なお、スタディツアーを大規模化する方針に基づいて募集したことで、前年 8 月のスタディツアーと比較し 10 名多い 24 名が参加している。

【写真】双葉町両竹諏訪神社より福島第一原発の方向を視察する様子　9/25（左）
富岡町いわき平交流サロンで体操教室に参加し、町民と交流　9/27（右）

➢　10～2 月　展開ゼミとの連携を開始

江口怜先生（課外・ボランティア活動支援センター）の展開ゼミ「福島における人権保障と共生の課題―原発事故後を生きる人びとに寄り添う」と連携を開始した。特に 10～11 月に行われた 3 回のスタッフ派遣と 12 月のツアーには、受講生が授業の一環として参加し、いわき市や富岡町で福興 youth が行うボランティア活動を体験し、原発事故後の福島県に関して理解を深めた。なお、このうち 11 月 12 日に行ったスタッフ派遣では、福興 youth として初めて富岡町内での支援活動を行っている。

➢　11・12 月　「防災推進国民大会」「”S-チル”シンポジウム」に参加

11 月 26 日、内閣府主催「防災国民推進大会」のセッションでは、「復興支援を通じた防災意識の啓発」というタイトルで代表山﨑が発表した。また 12 月 9 日、震災子ども支援室"S-チル"主催のシンポジウムにて「いわきで出会った子どもたち～学生ボランティアに出来ることは何か？～」というタイトルで、3 年中澤と 2 年大庭が発表した。

➢　2 月　「川内村ボランティアツアー」実施

2 月 16～18 日の 2 泊 3 日で福島県川内村ボランティアツアーを催行した。「ふくしま心のケアセンター」ふたば出張所、NPO 法人カタリバが運営する「コラボ・スクール 双葉みらいラボ」への訪問と川内村での交流会については、先述の展開ゼミ受講生が中心となって企画し、一般社団法人 AFW の吉川彰浩氏のガイドによる視察も含めた 3 日間のプログラムに関して、本学 OB で NPO 法人コースター代表理事の坂上英和氏にコーディネートして頂いた。交流会に招いた村民は、いずれも 2017 年 3 月で閉鎖された旧南一丁目仮設(郡山市内)の住民で、1 年ぶりの再会を楽しむ人々で会が盛り上がった一方、帰還後の村民が孤立している状況が浮き彫りとなった。

■住民の方の声

内容	活動日・場所
みんな大変だった。あの人たちも、何でもないように笑ってるけど、みんな同じ(ように津波で多くのものを失った)。（60～80 代男性）	5 月／ 薄磯団地
俺も初めてだからわからないけど、やっぱり、何かきっかけがないと(催しには)出て来にくいなあ。（70 代男性）	5 月／ 薄磯団地
いつも出てくる人たちは決まってるんだ。出てこねえ人は出て来ねえ。本当は出て来ねえ人が心配なんだがな。（80 代男性）	6 月／ 永崎団地
地震のことは思い出すのがいやだよ。自分のことがみじめになるからねぇ。（70 代女性）	9 月／ 下神白団地
現在も帰還困難区域がある。俺は帰ってもいいと言われる区域にいるけど、ハクビシンやイノシシが家にいる状況、帰られる訳がない。30,40m 先は帰還(困難)区域。730 万もらえる。俺はもらえない。いくら絆と言っても分りかきるのが難しい。（70 代男性）	11 月／ 下神白団地
気を抜いて話すとあっちの団地の人たちに何を言われるかわかんないからね。（年齢不詳・女性）	12 月／ 永崎団地
よかったね、ホントよかった。この人たちとまた会えて。死んでるかと思ってた。半年(ぶり)かな。もうちょっとかな。（70 代女性）	2 月／ 川内村

■2017 年度の活動一覧（1）実施ツアー(東北大学生に公募して実施)

日程	ツアー名	主な活動内容	参加者数（内スタッフ・教員数）
4/23(日)	福島・富岡スタディツアー	「富岡町 3・11 を語る会」の方の案内で富岡町視察、浪江町「まち・なみ・まるしぇ」でお話を伺う、文学研究科院生山田氏の案内で浪江町を視察	15（7）

5/3(水祝)-4（木祝）	いわき市薄磯祭りボランティアツアー	薄磯団地で足湯カフェ、薄井神社例大祭に参加	15（6）
6/24（土）-25（日）	福島・いわきボランティアツアー	永崎団地にて子ども企画・足湯カフェ実施、永崎女性の会主催花植えに参加、豊間小学校にてチームこのへん主催夏祭りの運営補助	16（12）
7/15(土)	いわき市薄磯海開きボランティアツアー	「海まち・とよま・パークフェス」の運営補助	15（9）
9/25（月）-27（水）	福島の今を知るスタディツアー	原町ひまわり基金法律事務所樋口氏・JA 福島さくらふたば地区本部・楢葉町役場職員にお話を伺う、福島県庁職員・NPO 法人素材広場横田氏の案内で南相馬市・浪江町・双葉町視察、「富岡町 3・11 を語る会」の方の案内で富岡町視察、下神白団地・富岡町いわき平交流サロンにて避難者と交流	24（13）
12/17(日)	福島ボランティアツアー	永崎団地にてカフェ活動(クリスマス会)実施	22（13）
2/16(金)-18(日)	福島県川内村ボランティアツアー	「ふくしま心のケアセンター」ふたば出張所・双葉みらいラボ・昭和横丁訪問、いわなの郷にて川内村民交流会実施、(一社)AFW 吉川氏の案内で富岡町・大熊町・浪江町視察	19（6）

■2017 年度の活動一覧（2）福興 youth スタッフ中心の活動

日程	主な活動内容	参加者数（内スタッフ・教員数）
5/5(金祝)	海まち・とよま市民会議主催「震災体験記作成プロジェクト」聞き取り活動に参加	4（4）
8/7(月)	豊間しおかぜ児童クラブにて事前打ち合わせ	3（3）
8/21(月)-22(火)	豊間しおかぜ児童クラブにて学習支援、永崎団地・富岡町下高久仮設にて打ち合わせ	10（10）
9/3(日)	永崎団地にてカフェ活動実施	12（9）
10/29(日)	薄磯団地にて芋煮会の運営補助	7（4）
11/11(土)-12(日)	NPO 法人コースター坂上氏の案内で川内村視察、富岡町社協福祉まつりの運営補助・足湯ブース出展、富岡町小浜行政区長松本さんと顔合わせ	10（7）
11/19(日)	永崎団地・下神白団地合同秋祭り運営補助	11（10）
2/7(水)	永崎団地・いわき明星大にて明星大・いわき明星大「いわき合同ボランティア」事前打ち合わせに参加	4（4）
2/12(月)	岩沼市玉浦西地区にて「きぼうときずな」主催医療支援活動に参加	5（5）

3/9(金) -10(土)	永崎団地にて明星大・いわき明星大「いわき合同ボランティア」の活動補助、富岡町さくらモールにて「きぼうときずな」主催医療支援活動に参加	5（5） ※見込み
3/30(金)	福島大学・関西大学との合同ボランティア活動	8（8）※見込み

3-4. 東北大学地域復興プロジェクト“HARU”

HARU は、東日本大震災からの復興支援・地域再生を目的として 2011 年 3 月に結成された団体である。震災直後には物資支援や瓦礫撤去などの現地支援、ボランティア情報の提供を行い、2011 年 9 月よりさまざまなプロジェクトを立ち上げ、いちご農家の支援や仮設住宅における学習支援などに取り組んできた。被災地内外における多様なニーズに対応するため、2017 年 1 月に活動拠点を軸とした「石巻部門」と「山元部門」という部門制を採用し、現在まで宮城県のこの 2 つの地域で定期的な活動を継続しているほか、他大学・団体との交流やツアー等を企画している。

以下では、各部門における今年度の活動についてまとめる。

3-4-1. 石巻部門

仮設住宅の集約と復興公営住宅への移転が進んでいる地域の現状から、新たな生活環境におけるコミュニティ支援の必要性を感じ、前年度までの中心的な活動拠点であった仮設大橋団地および仮設大森第四団地に加えて門脇西復興住宅における支援を開始した。定期的な訪問の中で、足湯や手芸、料理などを通して住民と交流し、住民と学生のみならず住民同士の交流の機会となるようなイベント作りを心掛けた。門脇西復興住宅では、竣工して日が浅いため集会所の壁が寂しいという住民の声を受け、参加者全員で力を合わせて完成させた作品を集会所に飾る手芸カフェを多く開催している。

3-4-2. 山元部門

毎年恒例のイベントに加え、地元の NPO 法人や行政とのつながりを増やしたことをきっかけに山元町における活動の幅を広げた一年であったといえる。「遊び隊」や「はじまるしぇ」など地域を盛り上げるお祭りや松林を保護する取り組みに手伝いとして積極的に参加したほか、9 月には持ち込み企画として初の試みであるスポーツ祭りが山元町教育委員会の後援を受けて開催され、子ども・学生・大人が混ざってチームを組み、運動を通じて交流を深める機会となった。また、3 年目を迎えたハロウィンイベントではつばめの杜西区周辺に住む子どもと高齢者の世代間交流の促進を図るなど、地域の活性化に関わる活動に力を入れて取り組んだ。

■2017 年度の活動一覧

日時	活動場所	活動内容	参加人数	備考
4/29	石巻市仮設大橋団地・門脇西復興住宅	新歓ツアー（住宅訪問・交流、市街地探索）	6	
5/4・5	山元町中央公民館	「春の遊び隊」の運営手伝い	4	子どもも大人もみんなで遊び隊実行委員会主催
5/21	石巻市仮設大森第四団地	足湯カフェ	4	インクストーンズと合同
6/11	石巻市門脇西復興住宅	手芸カフェ	4	

6/18	石巻市仮設大森第四団地	やきそばマイスター養成講座	4	インクストーンズと合同
6/24	山元町	松林管理（草むしり）の手伝い	1	
7/9	石巻市仮設大橋団地	お料理会（冷やし中華）	5	
8/5	山元町中央公民館	「夏の遊び隊」に参加（科学実験教室出展）	2	子どもも大人もみんなで遊び隊実行委員会主催
8/11	山元町小平農村公園	「こでらんね夏まつり」の手伝い	3	
8/27	石巻市仮設大森第四団地	足湯カフェ	3	インクストーンズと合同
9/9	石巻市仮設大森第四団地	夏祭りの手伝い（ポップコーンのふるまい）	3	インクストーンズ・たなぼたと合同
9/14	石巻市仮設大橋団地・門脇西復興住宅	お茶会・ワークショップ	4	長崎大学長崎 Sip-S と合同
9/24	山元町立山下第二小	「やまもとスポーツ祭り」開催	4	山元町教育委員会後援、SCRUM、たなぼた、AsOne と合同
10/5	東北大学	日仏防災会議にて活動報告	2	
10/8	山元町山下区	「はじまるしぇ」イベントの手伝い	4	
10/28	山元町つばめの杜西区	ハロウィンイベント開催	5	つばめの杜西区主催、SCRUM、たなぼたと合同
11/12	石巻市仮設大橋団地	手芸カフェ	3	
11/23	石巻市仮設大森第四団地	足湯カフェ	3	インクストーンズと合同
11/26	石巻市門脇西復興住宅	手芸カフェ	4	
12/9	東北大学	シンポジウム「東日本大震災後の子ども支援」に参加	2	震災子ども支援室“S-チル”主催
12/10	石巻市仮設大橋団地	お料理会（ケーキ）	4	
12/16	石巻市仮設大森第四団地	年忘れクリスマス会に参加	4	インクストーンズ、たなぼたと合同
12/17	山元町ふるさとおもだか館	ワークショップ、学習支援	4	山元町ジュニアリーダーの中高生と合同
2/17	石巻市仮設大森第四団地	足湯カフェ	5	インクストーンズ、たなぼたと合同
3/11	石巻市仮設大森第四団地	追悼イベントの手伝い	4	インクストーンズ、たなぼたと合同

3/17	石巻市門脇西復興住宅	手芸カフェ、ワークショップ	3	栃木県立真岡女子高等学校 JRC 部と合同

3-5. 震災復興・地域支援サークル ReRoots

ReRoots は、2011 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災の時に設立されたボランティア団体だ。当初は、仙台市青葉区の川内コミュニティセンターに避難した学生と地域住民による、避難所運営ボランティアとして動き出した。しかし若林区の農村地域の被害を目の当たりにし、住民目線で農村地域の生活を再建し、復旧・復興を支えるため同年 7 月に若林ボランティアハウスを設立、2014 年まで復旧支援を行った。他大学の学生や全国・全世界のボランティアを巻き込み、復旧支援には延べ 3 万人が尽力した。現在は農業を柱にした地域おこしへ向けた活動を長期的な見通しを持って活動している。以下では、2017 年度に行った活動について報告する。

3-5-1. 2017 年度の活動（一部）

①りるまぁと（荒町地域）

「りるまぁと」は津波被災した農家さんが生産した野菜や ReRoots で生産した野菜を、販路に乏しい生産者に代わって販売する活動で、地場野菜や地産地消の魅力の発信、生産者の生活再建の補助、被災地の現状の発信などの役割を担う。「りるまぁと」の活動自体は 2012 年 11 月から始まっており、当時は仙台朝市での出店だった。以降、住民の方々の生活再建と生産者・消費者間の橋渡しを柱にした「くるまぁと」を若林区の荒井地区で展開させるなど、活動の幅を広げてきた。

荒町地域でのりるまぁとは、2016 年 11 月以降にプレオープン期間を設けた。この期間で営業スタイルを探ったのちに、2017 年 3 月 4 日、毎週土曜日に若林区南鍛冶町のシャンボール第 2 荒町で営業するという形態で、本格オープン。2017 年度はこの「りるまぁと」と、同区の荒井東復興公営住宅での「くるまぁと」の 2 本立てで販売活動を行った。毎週のように訪れる方も出てきており、「ここでなら地元産の新鮮でおいしい野菜が買える」と地場野菜の魅力に気づく方や、「農家さんもがんばっているんだね」と生産者を気遣う方も多くなってきた。

荒町地域は、同じ若林区でありながら、仙台駅に近い内陸にあり、震災時に津波被災地がどのような状況であったか理解していない住民も多いため、復興状況を伝えるアンテナショップとしての役割を担う。また、南鍛冶町地区の住民は、高齢化が進むと同時に、地域の商店が次々と閉店している状況にあったため、買い物に行くためには、宮城野区新寺などへ 1km 以上かけてバスや徒歩で移動しなければならなかった。高齢者にとっては、荷物を持っての移動に不便さを抱えており、近場で生鮮食品を購入できる店を望んでいた。ReRoots は、この「買い物難民」の問題にも着目し、解決に向けた支援を行っている。

②わらアート

わらアートは、津波被災した農地で生産することができた水稲のわらを使ったオブジェを、若林区の農村復興のシンボルとして制作し、同区に人々を呼び込もうと企画された。仙台市と連携しながら、2015 年 12 月の仙台市地下鉄東西線の開業イベントでお披露目されたのを皮切りに、昨年度以降は同区荒井の仙台市農業園芸センターで秋季に展示を行っている。

今年度は、6 体の恐竜のオブジェを制作した。今年度から本格的に制作作業にボランティアを巻き込んでいる。参加者には被災地の現状を目で確かめる機会となったほか、わらに触れることで食に対

する関心を向上させたり、若林区におけるグリーンツーリズムの一つとしても機能したりした。また、このグリーンツーリズムを広めるべく、住民を対象としたわら編みイベントや、わらアートで利用した骨組みをライトアップさせる冬季のイルミネーションイベントを行っている。

③六郷地区での映画上映会

昨年度東六郷小学校が閉校したことにより、若林区の津波被災地域にあった小学校はすべてなくなった。これにより、六郷地区（二木・井土・三本塚・種次・藤塚）の住民は、地域住民が集まるよりどころを失うことになった。かねてからこの地域では、少子高齢化や若者の都心部への流出があり、津波で家屋が流出したことなどによって、震災以降はその傾向が強くなっていた。このままでは、人口の流出が加速し、地域の衰退（ひいては農村地域の衰退）につながる可能性が高まる恐れがあった。一方で東六郷地域では、住民が主体となって地域を興そうとしている住民が増えてきていた。これらの住民が地域を巻き込む企画を成熟させるまで、小学校の学民運動会に代わるような企画を行う必要があった。

そこで ReRoots は、東六郷小学校の跡地にできた東六郷コミュニティ・センターで映画上映会を実施。住民の方々にとってなじみの深い映画を上映しお茶会を開くことで、住民の方々にとっての語らいの場を創出する目的で行われた。学区民運動会をはじめとした小学校の行事と比べれば参加者数は劣るが、住民同士が顔を合わせる機会を新たに作ることに成功した。

しかし、あくまでもこの活動は、住民の望む地域の姿を叶えるための準備に過ぎない。今後も住民の方々とより深い関係性を作るとともに、住民とともに東六郷地域の在り方を模索していきたい。

3-5-2. その他

これらの取り組みが認められ、2018 年 1 月に「第 13 回 JTB 文化交流賞」の組織・団体部門で最優秀賞を受賞した。今後も、地域に根差し、地域住民の目線に立った活動を行っていく。

■2017 年度の主な活動一覧

企画名	日付	場所	主な企画内容
青葉通りカフェ ※青葉通まちづくり協議会主催	5 月 20 日、21 日	藤崎ファーストタワー館前	野菜販売、復興グッズの委託販売
第 1 回おいもプロジェクト	5 月 21 日	ReRoots ファーム	サツマイモと里芋の定植、地域住民を招いての講話
旧東六郷小学校 校舎を送る会 ※わたしのふるさとプロジェクト協力	6 月 11 日	旧東六郷小学校	校舎や校庭の清掃、慰霊塔周りの花植え
二木町内美化活動　※二木町内会主催	7 月 9 日 11 月 4 日	二木地区公会堂	公会堂周りの清掃、花壇の花植え
種次町内美化活動　※種次町内会主催	7 月 15 日 11 月 12 日	種次地区公会堂	公会堂周りの清掃、花壇の花植え

笹屋敷盆踊り大会　※笹屋敷町内会主催	8月5日	石場地区集会所	出店(ReRootsは子ども向け魚釣り)、盆踊り大会、抽選会
第1回映画上映会	8月19日	東六郷コミュニティ・センター	映画(ローマの休日)の鑑賞、お茶会(ReRoots 手作りずんだ餅のお振る舞い)
第2回おいもプロジェクト	8月27日	ReRoots ファーム	サツマイモのつるかえし、ずんだ餅作り体験
三本塚市民農園 BBQ	9月3日	三本塚市民農園	看板作り、市民農園の野菜を使ったBBQ
わらアートオープニングイベント ※わくわくドキドキ五感で楽しむ若林実行委員会主催	9月17日	仙台市農業園芸センター	わらアート展示開始(12月4日まで展示)
第20回シニアいきいき祭り ※仙台市シルバーセンター主催	9月23日	勾当台公園市民広場	野菜販売、復興グッズの委託販売
第3回おいもプロジェクト	10月21日	ReRoots ファーム	サツマイモと里芋の収穫、地域住民を招いての講話
若林区の中高生とわらあみ	10月28日、29日	はとの家(若林区卸町)	来年のわらアートに向けたわら編み ※中高生7人を受け入れ
六郷東部ふるさと交流祭 ※六郷東部まちづくり部会主催	10月29日	東六郷コミュニティ・センター	展示、ワークショップ、芋煮・ずんだ白玉・焼き鳥のお振る舞い
第2回映画上映会	11月25日	東六郷コミュニティ・センター	映画(雨に唄えば)の鑑賞、お茶会(ReRoots 手作りさつまいもケーキのお振る舞い)
第1回食のサロン　※荒井東町内会主催	11月26日	荒井東復興公営住宅集会所	映画(ローマの休日)の鑑賞、お茶会(ReRoots 手作りさつまいもご飯・さつま汁のお振る舞い)
三本塚市民農園＆六郷わら合同企画	11月26日	三本塚避難タワー	地域の方々、市民農園利用者と縄ない・芋煮会
六郷東部年越し祭 ※東北大学学友会邦楽部、NPO法人ミューズの夢参加	12月17日	東六郷コミュニティ・センター	音楽団体による演奏、年越しイベント(戌のわらアート披露)、お茶会(ReRoots 手作りシチューのお振る舞い)
第3回 ふるさとに集う 鎮魂の花火 ※わたしのふるさとプロジェクト主催	1月27日	東六郷コミュニティ・センター	六郷東部の思い出DVDの上映、鎮魂の花火打ち上げ
第3回映画上映会	2月25日	東六郷コミュニティ・センター	映画(鉄道員 ぽっぽや)の鑑賞、お茶会(ReRoots 手作り桑茶ケーキのお振る舞い)

三本塚市民農園 3 月企画	3 月 3 日	三本塚市民農園	地域の方々、市民農園利用者と縄ない・ベリー園の土壌改良
第 2 回食のサロン　※荒井東町内会主催	3 月 18 日	荒井東復興公営住宅集会所	映画(雨に唄えば)の鑑賞、お茶会(井土ネギを使った食事のお振る舞い)
りるまぁと・くるまぁと	毎週土曜日	荒井東復興公営住宅 シャンボール第 2 荒町	野菜販売
ReRoots ファーム畑作業	毎週	ReRoots ファーム	野菜栽培

【写真】わらアートを制作する学生スタッフの様子（左）荒町地域でのりるあぁとの様子（右）

3-6. 国際ボランティア団体 As One

2017 年度は 2016 年度に引き続き女川にいる果樹園カフェ ゆめハウスに訪問して活動のお手伝いをさせていただきました。 また、9 月からは大森第 4 仮設に訪問してイベントのお手伝いボランティアや、お茶っ子を企画実施しました。第 4 仮設は 2018 年 3 月を目処に自治会が解散するためどのように関わっていくか検討していきます。

As One では他の東北大学ボランティアサークルや他大学ボランティア団体とのつながりを活用してイベントを企画しました。特に 9 月 3 日～5 日に行った他大学を誘致した東北ツアーでは東北の現状を伝えるいい機会となりました。

■2017 年度の AsOne の活動

日時	活動場所	活動概要	参加人数	備考
4/8-9	女川町・果樹園カフェ　ゆめハウス	学生カフェとしてランチの提供とお店のお手伝い	4	
5/13	石巻市内	新入生を対象とした石巻市中心のスタディツアー	13	

5/14	女川町	コミュニティスペースうみねこ代表　八木順子さんが企画する母の日のボランティア企画の補助	11	仮設住宅に住む女性を対象にカーネーションを配布
6/3-4	花山青少年自然の家	東北支援に携わるボランティア団体間の交流を目的とした合宿を実施	12	
6/10	福島県 浪江町・双葉町・富岡町	3 町でのスタディツアー	6	一部の内容を特定非営利活動法人 野馬土にスタツアを委託
6/11	石巻市	宮城県の被災状況を視察したいと希望していた関東の学生 3 名を石巻市に連れて行き案内した	8	
18/18-19	神戸	阪神淡路大震災について学びボランティアの変遷について考えるスタディツアー	7	神戸市役所に公営住宅視察、人と未来防災センター訪問
9/4-6	石巻市・福島	5 大学（東北大学・東海大学・筑波大学・立命館大学・京都外国語大学）の学生でボランティアとスタディツアーを実施	28（うち東北大生 10 人）	石巻第 4 仮設にてボランティア 福島県　相馬市・南相馬市・浪江町を視察
9/24	山元町	他東北大学ボランティアサークルと合同で山元町運動会の企画・補助	2	

3-7. 基礎ゼミ・展開ゼミ継続サークルたなぼた

「たなぼた」は、2016 年度前期の「ボランティア活動と地域課題」という基礎ゼミの受講生により結成された。この基礎ゼミは藤室特任准教授によって開講されたもので、東日本大震災の被災地におけるボランティア活動の企画・実施を通して地域課題の解決に挑戦する姿勢を学ぶという内容であった。実際にボランティア活動を企画・実施することを通して「私たちにもできることがある」「ボランティア活動は継続することが重要である」ということを受講生の多くが感じた。また、仮設住宅での入居者減少による支え合いの難しさ、復興住宅での新たなコミュニティ形成の課題等を学んだ。そのような受講生が今後の活動のあり方について議論した結果、新たにボランティアサークルを立ち上げることを決めた。「たなぼた」は「**た**んいが**な**くても**ボ**ランティアし**た**い」「棚からぼた餅」という 2 つの言葉から誕生した名称である。

3-7-1. たなぼたの活動目的・活動理念

様々な地域から住民が移り住んできた仮設住宅や復興公営住宅では、家族や友人・隣人と支え合えるコミュニティの喪失による課題や、新たなコミュニティの形成という課題がある。これらの課題解決のために、住民の方々同士が交流し親睦を深める機会を増やすことが重要である。私たち学生が地

域の集会所などをお借りして様々なイベントを企画、運営することで、その地域住民の方々が集い、知り合い、そして仲を深めるきっかけを作ることができる。さらに、活動を通じ住民の方同士や住民と私たち学生の交流を図ることで、私たちが企画するイベントが震災に関する心の傷や日常生活の悩みなどを吐露することができる場にもなると考える。

私たち「たなぼた」は「3Bota(Band,Biginner,iBasho)」を独自の活動目標として掲げ、東北大学生がボランティアを始めるにあたって、壁を感じずに気軽に参加できる企画作りを大切にしている。また、住民の方々が心を通わせる場所を作ると同時に、私たち自身にとってもボランティアを楽しく続ける居場所を作ることが重要だと考えている。今後も SNS や大学内の広報等を利用して私たちの活動を周囲の人に知ってもらい、気軽なボランティア活動参加を促すことで活動の輪を広げていきたい。

3-7-2. 2017 年度の活動概要

復興住宅の集会所などをお借りして、誰でも参加しやすいようなイベントを企画、実施している。具体的には、仙台市若林区大和町の市営住宅、仙台市太白区長町の復興住宅、石巻市のぞみ野・あゆみ野地区の復興住宅、石巻市仮設住宅、名取市愛島の仮設住宅等の地域でお茶会、手芸教室、足湯、たこ焼きパーティー、地域祭り等の企画を行うほか、自治会や他団体が主催する行事のお手伝いを行ったまた、他の学生ボランティア団体主催のイベントをお手伝いしたり、共同でのイベント企画、実施も積極的に行なってきた。

さらに、私たちが企画するイベントに東北大生・留学生をはじめとする参加者を募ることでボランティア参加者を増やし、被災地における支援活動を継続的なものにしたいと考えている。

活動にあたっては、石巻市においては仮設住宅と復興住宅の支援に取り組んでおられる「石巻じちれん」さんにご協力・ご支援いただいている。また仙台市太白区のあすと長町等での活動では各復興住宅自治会や「つながりデザインセンター」さんにご協力・ご支援いただいている。また大和町市営住宅等での活動については、各復興住宅自治会の他、若林区社会福祉協議会や大和町地区社会福祉協議会さんのご協力・ご支援をいただいている。記して感謝いたします。

■2017 年度の活動一覧

日程	場所	活動内容	参加者数
4/29	仙台市あすと長町第三復興住宅	基礎ゼミ受講生・新入生対象のボランティアツアー	16
4/30	石巻市のぞみ野第一・第二復興住宅	基礎ゼミ受講生・新入生を対象のボランティアツアー	22
5/28	石巻市新沼田第二復興住宅	草取り・清掃活動	8
5/28	仙台市あすと長町復興住宅	基礎ゼミ「ボランティア活動と地域課題」の活動補助	4
6/11	仙台市あすと長町復興住宅	清掃活動の補助	2

6/18	石巻市大森第四仮設住宅	石巻市焼きそばマイスターの取得講座・清掃活動(他団体主催企画への参加)	16
6/24	名取市愛島東部団地仮設住宅	お茶会(他団体主催企画への参加)	2
6/24	仙台市若林区大和町復興住宅	基礎ゼミ「ボランティア活動と地域課題」の活動補助	4
6/25	石巻市のぞみ野第二復興住宅	基礎ゼミ「ボランティア活動と地域課題」の活動補助	4
6/25	仙台市あすと長町復興住宅	清掃活動の補助	1
7/30	仙台市あすと長町復興住宅	自治会主催の夏祭り支援	5
8/5	石巻市新西前沼第二復興住宅	足湯カフェ	7
8/11	石巻市新西前沼第一復興住宅	自治会主催の夏祭り支援	6
8/20	仙台市若林区大和町松木公園	自治会主催の夏祭りへのブース出展	6
9/4,7,15,21,28	石巻市相川運動公園仮設、南境仮設、河北三反走団地仮設	自治会主催のお茶会支援	4,2,1,3,1
9/17	仙台市若林区大和町市営住宅	足湯カフェ	4
9/26	石巻市新立野第一・新西前沼第二復興住宅	オリジナル鍋つかみ作り・足湯カフェ	7
9/27	あすと長町第二復興住宅	たこ焼きパーティー・足湯カフェ	10
9/30	名取市愛島東部団地仮設住宅	お茶会(他団体主催企画への参加)	2
10/1	大和町柳公園	地域防災訓練の実施補助	1
10/22	石巻市新西前沼第一復興住宅	展開ゼミ「ボランティア活動と地域課題」の活動補助	2
10/28	山元町	ハロウィンイベント	5
11/3~5	東北大学川内北キャンパス	石巻焼きそばの出店 ※インクストーンズと共催	6
11/12	仙台市若林区大和町市営住宅	自治会主催の芋煮会への参加(足湯)	8
11/19	石巻市新西前沼第二復興住宅	牛乳パックで小物入れ作り・足湯カフェ	3
11/26	国際センター	ぼうさいこくたい発表	2
12/3	石巻市新西前沼第二復興住宅	クリスマスリース作り・足湯カフェ	5

12/10	仙台市若林区大和小学校	クリスマス会のお手伝い	4
12/16	石巻市大森第四仮設住宅・石巻市新西前沼第一復興住宅	自治会主催のクリスマス会支援	12
12/17	仙台市若林区大和町市営住宅	自治会主催のクリスマス会支援	13
12/23	仙台市若林区中倉市営住宅	クリスマス会のお手伝い	2
1/12	石巻市新蛇田第一集会所	新年のぞみ野お楽しみ会(展開ゼミ「ボランティア活動と地域課題」の活動補助)	13
2/17	石巻市大森第四仮設住宅	インクストーンズと共催	4
2/19	石巻市新西前沼第二復興住宅	足湯・手芸カフェ	7
2/27	仙台市若林区大和町市営住宅	足湯・手芸カフェ	
2/28	あすと長町第二復興住宅	足湯・手芸カフェ(カフェ・ランランと共同)	
3/10	石巻市新西前沼第二復興住宅	たこ焼きパーティー・手芸カフェ	
3/11	石巻市大森第四仮設住宅	未定	
3/24	仙台市若林区大和町市営住宅	未定	
3/29	あすと長町第三復興住宅	未定	

【写真】あすと長町第２市営住宅たこ焼きパーティー8/5（左）
新西前沼第２復興住宅クリスマスリース作り 12/3（右）

3-8. 高校生支援団体「bridge」

本団体は「高校生の“架け橋”に」という理念のもと、高校生の活動を促すきっかけ作りや、学びの機会づくりを行っている。地域による学びの機会の不均等を改善するべく、地方高校生が不足している、自身の将来を考える機会や、大学生との交流によって得られる学びを提供することを目指している。

3-8-1.　4/21　福島県立磐城高等学校交流会

東北大学青葉山キャンパス内にて、福島県立磐城高等学校 1 年生との交流会に参加した。高校生の研究室見学後、座談会形式で勉学や進路等のディスカッションを行った。現在の専攻とその道を志したきっかけ、また、大学進学に向けての努力や現在の学生生活などについて語った。

3-8-2.　10/3　神奈川県立弥栄高等学校交流会

東北大学青葉山キャンパス内にて、神奈川県立弥栄高等学校理数科 2 年生との交流会に参加した。専攻別に 7 グループに分かれ、興味のある専攻の学生とディスカッションを行う形式とした。大学での授業内容に興味を持つ高校生が多かった。

3-8-3.　10/6　栃木県立大田原高等学校 PTA 意見交換会

東北大学青葉山キャンパス内にて、栃木県立大田原高等学校 PTA の方々との意見交換会に参加した。当団体からは 2 名、その他に応援団・大田原高校 OB の方々が参加した。PTA の方々は、大学生の日常生活をはじめ、受験期の高校生との接し方などについて興味をもたれていた。

3-8-4.　10/17　新潟県立新発田南高等学校座談会

東北大学川内北キャンパス内にて、新潟県立新発田南高等学校 2 年生との座談会を行った。全体会として学生生活の紹介を行った後、各グループに分かれ分科会を行った。分科会では、大学生の体験談を話した後、高校生からの質問に答える形で、大学生活についてや受験・進路選択のアドバイス等を話した。

【写真】新潟県立新発田南高等学校座談会　10/17　全体会（左）、分科会（右）

3-8-5. SCRUM と合同の活動

3 月 12 日の近畿大学附属高等学校との交流会、3 月 14 日の神戸大学附属中等教育学校との交流会、3 月 28 日～29 日の静岡市立高等学校との交流会を SCRUM と合同で実施した。内容については、「1-8. 高校との交流」83 頁を参照されたい。

■2017 年度の活動一覧

日程	活動場所	活動内容	参加人数	備考
4 月 21 日	東北大学青葉山キャンパス内	福島県立磐城高校の高校1年生との交流会	大学生 8 名 高校生 40 名	当団体：2 名
10 月 3 日	東北大学青葉山キャンパス内	神奈川県立弥栄高校の高校2年生との交流会	大学生 7 名高校生 80 名	当団体：6 名
10 月 6 日	東北大学青葉山キャンパス内	栃木県立大田原高校 PTA 意見交換会	大学生 8 名 PTA80 名	当団体：2 名
10 月 17 日	東北大学川内キャンパス内	新潟県立新発田南高校の高校2年生との座談会	大学生 7 名高校生 40 名	当団体：6 名
3 月 12 日	石巻市内	近畿大学附属高等学校との交流会	大学生 7 名高校生 40 名	当団体：1 名 SCRUM と連携 交流内容を計画
3 月 14 日	エスポールみやぎ	神戸大学附属中等教育学校との交流会	大学生 4 名高校生 5 名	当団体：2 名 SCRUM と連携 WS を計画
3/28～29	石巻市内	静岡市立高等学校との交流会	大学生 8 名高校生 10 名	当団体：3 名 SCRUM と連携

付録「ボランティアに対する意識および社会的意識に関する調査」集計結果

【調査の概要】

調査目的	東北大生がボランティアおよび社会に対してどのような意識を持っているのかを明らかにする
調査時期	2017年10月10日（火）～31日（火）
調査方法	・昼休み時に川内北キャンパスでの直接のアンケート記入 ・教員に授業前後の時間を借り記入 ・Googleフォームによる回答
調査相手	現役の東北大生および以前学生として籍を置いていた者
調査有効数	333人

単位：［%］小数点第二位以下切り捨て、［人］人数

1. ボランティアに対する意識

－ボランティアに対するイメージ－

（1）ボランティアは、人の役に立ち、社会を良くするものだと思いますか。（択一）　［%］

ボランティア経験	あり	なし
そう思う	60.6	65.4
どちらかと言えばそう思う	32.5	26.7
どちらとも言えない	4.0	5.0
どちらかと言えばそう思わない	1.0	0.8
そう思わない	0	0.8
無回答	1.0	0.4

－参加の有無－

（2）大学生・大学院生の時期にボランティアに参加したことはありますか。　［%］

ある……26.7
ない……72.9
無回答……0.0

＜（2）で「ある」と答えた人への質問＞

－ボランティアの種類－

（3）［A］どのようなボランティアに参加したことがありますか。該当するものをすべて選んでください。［人］

子どもの教育……34
炊き出し・物資供給…6
スポーツ・芸術……11
障碍者支援……7
国際交流・外国人支援……23
その他……8
土砂・瓦礫等の撤去 …1
傾聴・交流 ……53
募金呼びかけ ……12
環境保全 ……6
生業支援（農業・漁業等） ……19

［B］選んだ中で、東日本大震災関連のボランティアはありますか。　［人］

ある……68　ない……18　無回答……3

－参加頻度－

（4）どれぐらいの頻度でボランティアに参加しましたか。（択一）　［人］

月1~2回以上、定期的に参加……42
年に何回かのペースで、定期的に参加……12
夏季休業などのまとまった期間に集中的に参加…… 3
時間があるときに、散発的に参加……12
1回～数回の参加のみ……20

－ボランティアに参加した動機－

（5）ボランティアを始めたのはどのような理由からですか。以下に挙げたそれぞれの項目について、最も近いもの1つを選んでください。　［人］

	当てはまる	ややは当てはまる	どちらとも言えない	あまり当てはまらない	当てはまらない	無回答
A 社会や人の役に立ちたいから	43	36	4	3	2	1
B 自分の成長につながるから	53	24	3	4	5	0
C 就活で有利になるから	5	14	21	20	28	1
D 知人に勧められたから	12	17	10	14	35	1
E 友達・仲間を作りたいから	18	28	15	12	15	1

－ボランティアと学業の関連－

（6）ボランティアの内容は、自身の学部や専攻分野と関係していますか。（択一）　［人］

関係している……12
やや関係している……21
どちらとも言えない……11
あまり関係していない……15
関係していない……30

－ボランティア活動に対する周囲の感触－

（7）ボランティアに参加したことについて、家族や友人からの反応は肯定的ですか、否定的ですか。（択一）［人］

肯定的……44
どちらかと言えば肯定的……27
どちらとも言えない……12
どちらかと言えば否定的……5
否定的……0
無回答……1

＜（2）で「ない」と答えた方＞

－ボランティアへの興味－

（8）ボランティア活動に興味はありますか。（択一）［人］

興味はある……41
少し興味はある……106
どちらとも言えない……44
あまり興味はない……34
興味はない……18

－ボランティア活動との距離感－

（9）ボランティアに参加しないのはどのような理由からですか。以下に挙げたそれぞれの項目について、最も近いもの1つを選んでください。［人］

	当てはまる	ややは当てはまる	どちらとも言えない	あまり当てはまらない	当てはまらない	無回答
A 参加する時間がないから	129	74	17	10	8	5
B 自分では人の役に立てないから	11	29	60	84	46	13
C 自分のためにならないから	12	21	46	82	69	13
D 周囲からの反応が気になるから	6	25	34	67	98	13
E 偽善的だと感じるから	13	31	52	55	80	12

－ボランティア活動をする人へのイメージ－

（10）ボランティアをしている人に対するイメージは肯定的ですか、否定的ですか。（択一）［人］

肯定的……142
どちらかと言えば肯定的……74
どちらとも言えない……19
どちらかと言えば否定的……6
否定的……1
無回答……1

2. 社会に対する意識

－社会的・政治的情報への接近頻度－

（11）あなたは、テレビや新聞、インターネットなどのメディアで、社会や政治、経済に関するニュースや情報をどの程度見聞きしていますか。（択一）
［%］

	ボランティア経験 あり	なし
1日に数回	24.7	22.6
1日に1回	23.5	28.3
週に5～6日	12.3	13.5
週に3～4日	15.7	13.5
週に1～2日	12.3	11.9
週に1日未満	5.6	4.9
まったく見聞きしない	4.4	4.1
わからない	1.1	0.8
無回答	0.0	0.0

－社会的・政治的話題の頻度－

（12）あなたは、友だちや親せき、仕事仲間といっしょのときに、社会や政治の話をすることがどれくらいありますか。（択一）　［%］

	ボランティア経験 あり	なし
よくある	10.1	7.8
ときどきある	43.8	36.2
どちらとも言えない	11.2	14.4
めったにない	24.7	31.6
まったくない	10.1	9.8
無回答	0.0	0.0

－エリート意識－

（13）あなたは普段、日本の将来を担うエリートだという意識を持っていますか。（択一）　［%］

	ボランティア経験 あり	なし
持っている	12.3	＞5.7
少し持っている	12.3	11.1
分からない	24.7	22.6
あまり持っていない	19.1	＜30.4
持っていない	21.3	＜30.0
無回答	0.1	0.0

－社会的・政治的関心の規範性－

（14）あなたは、社会や政治に対して自分の考え・主張を持つべきだと思いますか。（択一）　［%］

	ボランティア経験 あり	なし
そう思う	44.9	37.4
どちらかと言えばそう思う	49.4	45.2
どちらとも言えない	3.3	13.5
どちらかと言えばそう思わない	2.2	1.6
そう思わない	0.0	1.6
無回答	0.0	0.1

－良い市民として重要なこと（市民性の内実）－

（15）良い市民であるために何が必要かということについて、いろいろな意見があります。次にあげるようなことを、あなたはどれくらい重要だと思いますか。A～Gのそれぞれについて、最も近いもの1つを選んでください。　［%］（小数点第一位切り捨て）

		全く重要ではない						非常に重要だ	分からない	無回答
A 選挙の時に必ず投票に行くこと	あり	2	3	3	10	15	15	48	0	1
	なし	0	2	3	9	13	24	41	1	0
B 脱税しようとしないこと	あり	4	3	0	5	17	13	57	2	1
	なし	2	0	0	9	7	13	60	3	0
C 法律や規則を守ること	あり	4	2	1	5	6	19	59	0	1
	なし	1	0	2	6	10	16	62	0	1
D 政府の行動に目を光らせること	あり	2	3	5	10	22	26	25	2	1
	なし	0	1	6	15	29	18	24	2	1
E 権利を行使・主張すること	あり	2	4	2	15	19	23	23	7	1
	なし	0	0	6	19	23	22	23	2	1

3. 一般的な社会課題に対する意識

－貧困者への理解－

（16）あなたは、貧困状態にある人たちを政府の責任で援助するべきだという意見に同意しますか。（択一）
［%］

	ボランティア経験 あり	なし
完全に同意する	16.8	＞11.5
ほとんど同意する	58.4	＞50.6
どちらとも言えない	19.1	26.7
あまり同意しない	0.4	0.6
まったく同意しない	0.0	0.2
無回答	0.1	0.1

－外国人に対する態度－

（17）国が行う外国人に対する以下の政策について賛成ですか、それとも反対ですか？　それぞれについて、最も近いもの1つを選んでください。　［%］

		賛成	どちらかと言えば賛成	どちらかと言えば反対	反対	無回答
A 日本に住んでいる外国人が、日本人と同じ福祉や医療を受けること	あり	65.1	30.3	2.2	1.1	1.1
	なし	51.0	34.9	10.2	2.0	1.6
B 日本に定住している外国人に、自治体の選挙で投票や立候補ができる権利を与えること	あり	46.0	38.2	10.1	4.4	1.1
	なし	33.3	37.4	20.1	7.4	1.6
C 働き手の足りない分野に、外国から単純労働者の受け入れを認めること	あり	42.6	37.0	17.9	0.0	2.2
	なし	32.5	42.3	19.3	4.1	1.6

●サンプル構成比

全体	性				学年						
	男性	女性	その他	無回答	1年	2年	3年	4年	修士	博士	無回答
333人	205	117	0	11	222	77	11	5	7	0	11
%	61.5	35.1	0.0	3.3	66.6	23.1	3.3	1.5	2.1	0.0	3.3

ボランティア経験	全体	学部										
		文学	教育	法	経済	理	医	歯	薬	工	農	無回答
あり	89人	11	16	3	5	8	9	2	1	21	10	3
なし	243人	19	9	24	20	35	7	11	4	88	18	8
構成非［%］	100%	9.0	7.5	8.1	7.5	12.9	4.8	4.2	1.5	32.7	8.4	3.3

第Ⅱ部　執筆者一覧

藤室玲治 課外・ボランティア活動支援センター特任准教授	1-1、課外・ボランティア活動支援センター2017 年度の概括、1-6.開講した授業、1-8.高校との交流、1-9.国内の大学との交流、1-10.国外の大学との交流、1-11.会議・シンポジウム等
江口怜 課外・ボランティア活動支援センター特任助教	1-2.事務連絡会議（運営会議）、1-3.課外活動団体合同研修会および花輪理事への要望、1-4.課外・ボランティア活動研修会、1-5.ボランティア登録団体の支援、1-6.開講した授業、1-7.課外プログラムの実施（高度教養教育開発事業として）、1-11.会議・シンポジウム等
松村礼子 学生支援課活動支援係長	1-12.東北大学学友会の支援・連携
松原久 文学研究科博士課程 2 年	第Ⅱ部全体を執筆・編集
斎藤雅史　経済学部 4 年	1-11.会議・シンポジウム等
新井智順　経済学部 3 年	2-11.他団体とのコラボ
山本賢　文学部 2 年	1-11.会議・シンポジウム等、2-1.2017 年度の学生スタッフチーム SCRUM の概要、2-3.渉外、2-10.緊急時の災害対応、2-12.その他 SCRUM の学生が参加したイベント
石川祐也　理学部 2 年	1-8.高校との交流
大庭佳乃　文学部 2 年	2-2.総務、2-9.人権共生部
近藤智哉　工学部 2 年	2-4.広報
鈴木優里　工学部 2 年	3-1.ぽかぽか
小暮李成　理学部 2 年	3-2.インクストーンズ
山崎英彦　経済学部 2 年	3-3.福興 youth
武田萌　農学部 1 年	3-7.基礎ゼミ・展開ゼミサークルたなぼた
松田敦之　歯学部 1 年	1-8.高校との交流、2-6.東北大学祭への出展
森坂太一　教育学部 1 年	2-6.東北大学祭への出展
名古屋雄大　理学部 1 年	2-7.国際部
丸山碩　医学部 1 年	2-7.国際部
新井秀峰　法学部 1 年	2-7.国際部
朝賀美織　教育学部 1 年	2-7.国際部
和久晋太郎　経済学部 1 年	2-8.震災伝承部
竹井愛　工学部 1 年	2-11.他団体とのコラボ活動

2018（平成 30）年 3 月 31 日　発行
2017 年度　課外・ボランティア活動支援センター紀要

発行：東北大学 高度教養教育・学生支援機構 課外・ボランティア活動支援センター

＜連絡先＞
〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内 41 番
東北大学高度教養教育・学生支援機構 課外・ボランティア活動支援センター
センター長　小田中直樹　　特任助教　江口怜
TEL：　022-795-4948　E-mail：volu-s@grp.tohoku.ac.jp

2017年度

課外・ボランティア活動支援センター紀要

the Journal of the Center for Service Learning and
Extra Activities 2017

東北大学 高度教養教育・学生支援機構
課外・ボランティア活動支援センター
2018年3月発行